

YEARBOOK 2022

VOL.47

Kyoto International Student House

特集 第4回公開講演会



HAUS DER BEGEGNUNG

(公財) 京都国際学生の家

【設立理念】

公益財団法人京都国際学生の家 の 成立の趣旨

Kyoto International Student House ・ Haus der Begegnung Kyoto

PRINCIPLE AND PURPOSE

by Dr. Werner Kohler

“Haus der Begegnung” is a house where men from different continents and cultures, of different races and colors, different social strata, religions and outlooks live together. The house members face realistically the difference of national, cultural and religious backgrounds. It is a “House of Encounter” as its name “Haus der Begegnung” indicates. It is an experimental training place for peace, which is not merely absence of war, a training place for the construction of a new form of society necessitated by the demands of the world of tomorrow.

The house life is guided by the following considerations.

1. The living together in the International Student House Kyoto is not an end in itself. Nor is it a world of its own. It is concerned with the daily human society to which we all belong. Our human society, as history shows, is in need of constant renewal. Forms of society change, old traditions decline, new ones arise; but Life Together is the destination of man.

2. Life Together is life in relation with others, with those we like and those we dislike, with those who have different convictions and opinions. Life Together means love and respect for those who are different. We have the freedom to agree to disagree with one another.

3. Life Together is life in daily renewal. We all have a natural inclination to favor our own beliefs and concepts. The house members let themselves be mutually questioned and challenged in their opinions, attitudes and habits. By nature we are inclined to have relations with, and fulfill responsibilities to, our own family group and those of our own social milieu or those that are useful to us. We aim to outgrow these self-centered inclinations. Life Together allows for diversity and runs counter to conformity and unconformity. The traditional societies classify people according to their educational, political, moral and financial standards. Life Together transcends these traditional classes.

4. Life Together is an adventure and an experiment. “Haus der Begegnung” in Kyoto practices in small dimension a new form of society. This new society is both conservative and revolutionary in that it respects the past with its traditions and looks to the future with its possibilities. It is a form of society which is renewing itself in free self-criticism of its members. The basis of this Life Together is Life itself.

Thus it is hoped that students living in this house are willing on their own initiative to participate in various activities such as seminar-like meeting, common meals and house chores of different kinds.

*Dr. Kohler was the most central among the forwarder of HdB in 1965. He and Dr. Inagaki served as the first House Farther.

表紙デザイン作成者 吉田希海

写真 表は HdB 日本庭園での在寮生製作の「かまくら」 裏は深夜の「かまくら」製作風景

撮影日 2023.1.25.

【巻頭言】

人類は戦争を放棄できるのだろうか？——共生へ

内海 博司

(HdB 理事長、京都大学名誉教授、1965OM, 元 HF)

21世紀は、原爆・水爆という人類や地球の滅亡にもつながる最終兵器を人類が持ったことで、大きな戦争は起きないだろうと思われていたが、世界では多くの紛争や戦争が続いている。何故ヒトは戦争をするのであろうか。賢人達は人口が増え過ぎて食糧事情が悪くなると戦争が起きるとしている。

第一次世界大戦までの近代政治史の主役を演じたのはルソーやカントらの理想主義者の平和論ではなく、ホブズやブルらの現実主義者の平和論である。

自然状態にあっては、法や道徳は無く「力」こそが全てである。そこで考えられた平和論は「勢力の均衡(balance of power)」であった。つまりパワー・ポリティックスこそが国際秩序（世界平和）の中心となるべき体系であると考えられた。国と国とが「力（軍事力）」をもって相互に牽制し合い、諸国間の「勢力の均衡」のなかで、巨大国家の横暴をチェックすることによって、国際秩序(世界平和)が保たれる。クラウゼビッツの「戦争論」は「国家間の紛争解決の最終手段、それが戦争だ。」と定義している。第一次世界大戦までの「勢力の均衡」の時代では、戦争は国際政治の一環として位置づけられ、軍事力や戦争は、むしろ健全な国際秩序を回復するものとして肯定されていた。それ故、伝統的な国際法では、戦争は自衛権の名の下に国家の権利（交戦権）として認められていた。

しかし第一次世界大戦の悲惨は、多くの人々に「勢力の均衡」論が誤りであることを学ばせ、それに代わる新しい国際秩序を求めさせた。ルソーやカントらの「理想主義的」平和論が復権し、そのような流れの中で、アメリカ大統領ウィルソンの提唱で、平和維持機構の役割を持つ「国際連盟」が設立された。しかし肝心のアメリカは、国内で共和党の反対にあい国際連盟に参加しなかった。ヨーロッパの戦争に介入せず、ヨーロッパからの干渉を受けない「孤立主義」を原則としていたのが理由である。ウィルソンの構想した「国際連盟」は「勢力の均衡」理論の否定と、自由な諸国の連合による平和な世界共同社会の実現というカント的理念で支えられていたと思われ、紛争を解決するための軍隊を組織することはなかった。結局、第二次大戦が勃発して国際連盟は破綻することになる。

第二次大戦後に、新たに平和維持機構として国際連合が設立された。この組織の提案者もアメリカ大統領（ルーズベルト）であった。この国際連合には、再びパワー・ポリティックスが復活し、国際連盟とは異なり、紛争を解決するために国連平和維持

活動（PKO：Peacekeeping Operations）の設立、多国籍軍の承認などの手段も持てるようになった。しかし、この組織の最大の欠陥は、国際平和を推進・維持すべき組織である安全保障理事会には、第二次大戦の戦勝国5カ国（中国、フランス、ロシア、イギリス、アメリカ）が常任理事国となり、彼らだけが拒否権を持ち、非常任理事国10カ国の意見や加盟国193ヶ国の意見は無視されることである。今回のウクライナ戦争にしても、世界で起きてきた多くの紛争においても自国の利益を考える大国の拒否権によって、その有効性を発揮できないでいる。

余り知られていない話だが、第一次大戦の勃発が杞憂されていた1932年7月、かの有名な物理学者アインシュタインが精神分析学者フロイトに「人類を戦争という災厄から解放する道は存在するのか？」と問いかけた往復書簡が残されている。フロイトは「人類の文明化の過程は、ある種の獣の家畜化になぞえられ、この自己家畜化した人類は、必然的に平和主義者ならざるをえない」と答えている。フロイトはさらに、人類が身体的・気質的に家畜化するに従い、（戦争防止に向かう）人類の心理的変容が随伴するから、人類の全滅を可能にする未来戦争に対する不安とこの心理的変容とによって、もしかすると人類は戦争からの解放という僥倖に恵まれるかもしれない、という内容の答えを返している。フロイトは、人類学者のアイクシュテットらが人類と家畜との並行現象に注目して発想した人類の「自己家畜化（self-domestication）」という仮説を引用したと思われる。

家畜とは自然と切り離されて人間の文化によって管理され、形や習性をも変えた動物のことである。人類は狼を家畜化して犬にし、猪を家畜化して豚にした。野生動物の諸形質を人類が選択して（人為選択）、野生動物にみられない諸形質をもつ「家畜」を造り出した。この野生動物の人為選択によって家畜化されると、多くの家畜に見られるように体毛が白くなったり、攻撃性が無くなる。遺伝子が緩むのか、犬の多様性が示すように変異しやすくなる。個体密度が高くてもストレスがなくなる。雄の外見が雌に近づき性差が小さくなる。社会的存在であるヒトも、自らの営為（人為）によって自らの諸形質を変容させて、自らを「家畜化」させてきたと考えられる。顎の骨が小さくなり、顔が丸くなり、コミュニケーション能力が高くなり、認知能力が高くなる。一方、オキシトシン（仲良しホルモン）が出て、交流が簡単にでき、文化が広がると云うように、社会的存在である人類は自ら作った文化で自分を管理し、文明に適応して、形や習性を変えた点で、家畜に類似するということから「自己家畜化現象」と呼ばれている。

生物学的進化は、親から子へ子から孫へと世代時間によってその変異速度は制限されている。しかし、文化的進化は生物学的進化に比べて変異速度は速く、親以外から次の世代への伝達もある。ヒトは社会的動物であり、文化とは複数の個人からなる社会の集団的な特性と考えられる。更にヒトは環境に対して適応するのではなく、環境を適応させ、新しいニッチを造る構築者である。作り替えた生物界（普通の自然生物界と人為的・人工的な生物界）の中で、野生の生物ばかりか、家畜やペットから成る

新しい生物世界（ニッチ、文化）を作り出して、ヒトは自己家畜化してきたと云えよう。

しかし、残念ながらフロイトの甘い期待は裏切られ、第一次、第二次大戦が起き、更に小さな紛争や戦争は絶えていない。非常に興味あるヒトの「自己家畜化」仮説は何処まで真実を現しているのだろうか。あるいは自己家畜化が十分に進んでいないのだろうか。自己家畜化が進むと、内集団では同じ行動をとるようになり均一性が強くなり、他集団に対する攻撃性が増すとも云われている。そのような状態に既にヒトが成っているとしたら、これを打破するには、個々人が属する集団だけでなく、多くの他集団にも属することによって、「共生」を図ることかも知れない。そう考えると「共同の生」を掲げて活動している本学寮の存在の意義も見えてくる。

人類学者の西田利貞氏は、戦争とは「殺害を伴う、同種の動物の集団間の組織的な争い」と定義している。そして、戦争は定住生活、ことに農耕を始めたあとに始まったものであり、資本主義的生産と共に頻繁になった。その最大の原因は人口過剰である。資源に対して人口が過剰になったときに、生き延びるために戦争をする。人口を減少させない限り絶え間なく戦争は起こるだろう。人の命が尊いのは、人口が少ない時だけであると。なぜ、大量虐殺（ジェノサイド）になるのだろうか？ 攻撃性の現れ方には、ヒトとチンパンジーで共通性がある。1つは誰がグループのメンバーで誰がメンバーでないかを決めるのに大きな力をもつのが、第一位雄だということである。そして付和雷同し、強い者つまり第一位雄に味方するという強い傾向が存在することであろう。その上好戦的なリーダーに従う傾向が、ジェノサイドの大きな原因であろう。その上、武器の発達のため敵を倒さなければ、こちらが殺されるという恐怖が生まれたのが、さらなる理由であろう。このように西田氏は、一人の独裁者にチンパンジーもヒトも、戦争にかりたてられていることを冷静に観察し警告している。

独裁者の国の横暴に常に悩まされているのに、日本人の多くは自由と民主主義が世界の潮流だと考えて、世界の人口の7割が「独裁に分類される国に住む」という現実を直視しようとしなない。英オックスフォード大の研究チームが運営する国際統計サイト「Our World in Data」はデータ入手の可能な199カ国・地域を4つのカテゴリー「閉鎖型独裁」、「選挙による独裁」、「選挙による民主主義」、「自由民主主義」に分類した。その結果、2021年の時点で「自由民主主義」が34カ国・地域、「選挙による民主主義」が56カ国で、「意味のある」選挙を実施している国と合わせて90カ国・地域となっている。一方で「選挙による独裁」は63カ国、「閉鎖型独裁」は46カ国・地域で、合わせて109カ国・地域が「権威主義的な政府」となっている。人口で見ても、民主主義を享受する割合は2017年の50%を頂点に下落し、2021年では世界人口（78.6億人）の29%（23億人）までに下がっていた。つまり、現在は、世界人口の71%に相当する55.6億人が本当の意味での「投票権」と云う基本的人権の保障を十分に受けていないということになる。

この世界の現状を知り、西田氏が警告する「独裁者」の問題点を真摯に受け止めて警戒する必要がある。独裁者を生み出さない様にするには、国民・地域の人々に自由

と民主主義について、人権についての教育を受けさせることが大切であろう。何と言っても緊急の改革すべきことは、国連の常任理事国の拒否権の撤廃だと思われる。しかし、一度手に入れた利権の放棄と国のエゴイズムを抑えることは超難問と言えよう。

一方、ゴリラの研究で有名な人類学者の山極寿一氏は、大量虐殺を辞さない程の苛烈な戦争が起こるようになったのは、言語の出現と土地の所有、そして死者に繋がる新しいアイデンティティの創出による（宗教の誕生）と考えている。更に、限られた資源に対して人口増加は戦争の引き金になるのは必然だと考えている。この悪循環を断ち切る解決策として「分かち合う社会」を目指す教育であると山極氏は述べている。ここにも「分かち合う社会」つまり「共生」の必要性が説かれている。

本学寮を設立した神学者のコーラ博士は、第一次・第二次世界大戦の悲惨な経験を通して、世界の若者達に人間の共同社会の方向性を託された（「共同の生」について 献堂式の言葉 YEARBOOK Vol. 14. 36～42（2019）に掲載）。

コーラ氏は、この「共同の生」を全人類の輝かしい永遠の未来のための止揚（ドイツ語の哲学用語 aufheben の訳語）として理解し、人間の「生」の意味は「共同の生」において、その結論に達すると考えている。「共同の生」は、この解決にさいしては、人間の共同社会の決定のための戦い、すなわちお互いのための、また我々の将来のための現存在を獲得すべき戦いにおいて、常にその途上にあると説いている。

コーラ氏は、「共生」はそう簡単なことではなく、命がけで挑む対話によってのみ達成されると考えている。私たちに大きな夢を託したコーラ博士が生み出した「共同の生」の訓練所である（公財）京都国際学生の家（別称：出会いの家、HdB, Haus der Begegnung）を継続・存続させるためには、ますます私たちは頑張る必要があるだろう。

その実践方法を示したのが、常にYEARBOOKの表表紙の裏に掲載している「Principle and Purpose」である。

～ 目次—CONTENTS ～

【設立理念】

PRINCIPLE AND PURPOSE 見返し

【巻頭言】

・内海博司 人類は戦争を放棄できるのだろうか？——共生へ..... 1

【目次】 5

【新ハウスペアレントより】

・山本慶一 ハウスペアレントとしての一年を振り返って..... 7

・山本夏子 ハウスマザーとしての一年を振り返って..... 10

【保全委員会報告】

・深海八郎 設備トラブルと保全委員会の対応..... 12

【特集：第4回公開講演会】

・内海博司 公開講演会について..... 13

<HdB で育った先輩達>

・秋津元輝 農村研究から世界へ、そして食からの地域づくり..... 15

・ハギギセパンタ

ハウスの扉、美への扉 イランで出版された日本美術事典の紹介 18

<HdB の過去・現在・未来>

・Namulindwa Stellah

WHY JAPAN? 24

・Wnag Ren 共通点の発見は相互理解の始まり..... 27

・浅井裕理 生きる上での息苦しさからの解放..... 28

・平松幸三 グローバル化社会に生きる大学と研究者..... 30

【OM 便り】

・奥山 格 HdB での生活とその後 37

・村田翼夫 過疎地の教育に関する本の出版

—「美山山村留学センター」を中心に—..... 38

・西本太観 メテさんと日本語..... 41

・Jon Tamio Tanaka

Friendships That Last 45

・Soraya Liu HdB Performance Programs 2015-2021 46

【ハウスペアレントとレジデントより】

・HF 山本慶一 2022年度公益財団法人京都国際学生の家 Events List 48

・Esther Holtshulte

Four months in Japan 48

・Hardik Tankaria

Social Injustice, False Narratives, Media, Targeted Biases

and Global Politics!..... 49

・黄 弋粟 イヤーブック..... 53

・祝迫美羽 あっという間に過ぎた2022年..... 54

・Jack Crawford My first few months at HdB 56

| | | |
|--------------------------------|---|----|
| • 仇 宏暄 | 頭の中に思い浮かんだもの…………… | 56 |
| • Kenta Ando | Lightning-The time passed too fast, my 2-years-HdB life- …… | 57 |
| • 久我 英 | 僕と HdB …… | 58 |
| • 黒田 旬 | HdB での二年間 …… | 59 |
| • Luca Kristin Cremer | Yearbook- Luca Cremer …… | 60 |
| • Jindapa Phinmee | Nice to meet you, HdB …… | 62 |
| • Marina Reavis | Community …… | 63 |
| • 宮原里奈 | HdB での生活とお気に入りの料理 …… | 64 |
| • Noah Yoshida | Love …… | 65 |
| • 大谷和輝 | なんで HdB の寒さに耐えられたのだろうか？ …… | 66 |
| • Rakotomamonjy Harilalao Ando | 豊富な体験…………… | 68 |
| • 谷河 響 | 文化と性格の差異…………… | 69 |
| • Vincent Brilling | Checkmate …… | 70 |
| • Wang Ren | 日本語との二度目の出会い…………… | 71 |
| • 渡辺淳也 | 覇権安定論と今後の国際秩序…………… | 72 |
| • 山本峰丸 | 神戸刑務所を見学して…………… | 73 |
| • ZHANG Boyiwen | AI helped me a liiiiiittle bit on this …… | 75 |
| • 周 平 | Short travel In …… | 75 |
| • Arne Simon Käfer | そうですね…………… | 77 |
| • 劉笑聡 | HdB で食べまくる …… | 78 |
| 【資料】 | | |
| • 公益財団法人京都国際学生の家役員等…………… | | 79 |
| • 2022年度補助金・寄付金・その他ご支援…………… | | 81 |
| • 公益財団法人京都国際学生の家略史…………… | | 83 |
| • 公益財団法人京都国際学生の家利用者の集計…………… | | 88 |
| • 公益財団法人京都国際学生の家の後援会会則…………… | | 91 |
| • 公益財団法人京都国際学生の家同窓会会則…………… | | 92 |
| • 施設概要…………… | | 95 |
| 【編集後記】 | | |
| • 笹山幸子 | 編集に携わって…………… | 96 |
| • 祝迫美羽 | HdB というコミュニティ …… | 97 |
| 【広告】 | | 98 |
| 【寄付金振込用紙】 | | |

【新ハウスペアレントより】

ハウスペアレントとしての一年を振り返って

ハウスファーザー(HF) 山本 慶一

2022年4月からHFを務めております。

ハウスマザー(HM)の父(稲垣 博)は、学生時代、広島に原爆が投下された直後に救援に駆け付け、地獄のような状況を目の当たりにすると共に自身も被曝した体験から、スイス人牧師 Werner Kohler 先生の理念を実現するべく HdB の設立段階から深くかかわり、義母(和子)とともに初代 HP を務めるなど、生涯その運営に心血を注いできました。没後は、現理事長を務めてくださる内海先生を中心に多くの方々のご尽力で、60年近く経った今も世界中から多くの学生達があつたここ HdB で生活しております。そのようは歴史ある HdB の HP として、私たちにお声掛け戴きましたことは、誠に光栄であり、亡くなった両親もきっと喜んでくれていることでしょう。

私たちは4月6日引っ越し作業と同時に入寮するも、Office はコロナ禍で13日まで閉室。しかし、8日には前期イベントの Welcome Party が予定され、直ぐにでもその準備にとりかかる必要がありました。HdB の卒寮生(OM)でもなく右も左も分からない中、段ボール荷物もそのまま、翌日にはチームのメンバーと一緒に言われるままの食材の買い出し作業、そして Lobby の清掃、食事の準備とバタバタでした。

当日の Welcome Party が無事終わり、HM とお互いホッとしたことを覚えております。

翌日の午前中は、残った料理の片付け、調理器具類、食器類、コップ類の洗浄に追われていました。

私たちの HP としての第一歩は、このような生活からスタートしました。

海外の学生達には、日本での短い貴重な生活時間の中で、少しでも日本の文化・風習を見ていただきたいと思い、我が自宅の納屋に眠っていた息子のお節句「五月人形」をハウス玄関に飾り、披露致しました。写真を撮る学生もあり、きっと喜んでいただけたかと思っております。

恒例の「国際食べ物祭り」では、8月の暑い時期、コロナ禍に加えて食中毒の心配もある中で実施に向けて少しでもディスタンスを保つため、また地域子供達との積極的な交流の場を設けるべく、ハウス日本庭園の活用を企画しました。

当日は地域の人や Office の助けもあって、パラソル&タープ下では、子供達の歓声があり、また食事を楽しむ招待客・参加者もあり、老若男女問わず、とても賑やかに交流が出来ました。

さらに、今回新たに（株）三悦様からは、若い社員 5 名の方々が本イベントのお手伝いに来て、レジデント達と一緒に食事の準備から最後まで助けていただきました。社会現場で活躍されている社員の皆様から直接様々なお話が聞けたことで、学生たちは、とても有意義な時間を過ごせたことでしょう。

（株）三悦の皆様 有難うございました。

レジデントは、4 月時点で男子 14 名、女子 6 名の 20 名(留学生国籍 5 か国)でした。その後、卒寮・入寮などがあり、12 月末では男子 16 名、女子 13 名(留学生国籍 8 か国)となっています。

ハウスにいるレジデント達がコモンミールなどの諸行事を一緒に行いながら、その都度「食」を共有する中で、皆の親交が深まりあっていく姿を見てきました。

新入寮生がある都度、レジデントの誰が声をかけるでもなく、ごく自然発生的に暖かく welcome 企画をたて、「ワイガヤ」が始まっていました。

日本庭園で BBQ を開いたり、有志による手料理やコロナ対策をしながらそうめん流しを行ったりと…。

また短い期間でありましたが、スカラーとの交わりも大変有意義な一時であったと思っております。諸行事に積極的に率先して参加して下さるスカラーの姿は、レジデント達にとっても印象深く心に刻まれたことでしょう。

一方、レジデントがコロナウイルスに感染、あるいは疑似症状を発症するなどもあり、ハウス内感染を危惧する中、これまでのところ個人レベルで収束していて有難いことです。

と思いきや、この原稿を描いている最中の年の瀬、コロナ感染者が現れました。

すっかり日常化してしまったコロナ禍渦中の 3 年目から 4 年目を迎えようとしていますが、彼らの安全を第一に、Office とも連携して、引き続き気を引き締めねばと思っております。

12 月 31 日は百万遍知恩寺で在寮生と除夜の鐘をつき、そして 2023 年 1 月 1 日元旦は、HP ルームで HM の手作り「日本のお正月ーおせち料理」を楽しみました。女子レジデントはおせち料理の盛り付け、男子はテーブル・椅子のセットを手伝い、「お屠蘇」で各自が「新年の挨拶」をと…。

スカラー、OM 友達も参加して総勢 16 名と私達。

「食」を通じたお互いのつながり 忘れられない瞬間 とても素晴らしい新年のスタートとなりました。

人類は”戦”の歴史であり、今もって人間の尊厳を認めない蛮行が行われています。地上に引かれた無慈悲で不気味な国境という一本の線を思うと、

HdB の理念は、今もって 光り輝いています。

最後に、義父が京都大学の教職時代、多くの学生さんの中のお一人で、某大企業のトップにまで昇りつめられました杉山喬一様からは、私達が HP を務めることになっ

たことを機に、多額のご寄付を戴きました。

杉山様は、義母の幼友達の御親戚で当 HdB とは何の縁もない方でございますが、両親との繋がりだけで並々ならぬご支援を戴きましたことに、改めまして深く感謝致しますと共に厚くお礼申し上げます。 有難うございました。

五月人形



IFF-日本庭園



レジデント達による おせち料理の盛り付け



IFF-集合写真



お屠蘇 (otoso)



ハウスマザーとしての一年を振り返って

ハウスマザー(HM) 山本夏子

久しぶりに HdB に住むことになりました。久しぶりといっても、半世紀ぶり。

聖護院中町に生まれ、13歳の時にここ東町にオープンした HdB に家族で越してきました。真新しいハウスでの生活は、まるで外国に来たようでした。

地下にボイラー室があり、全館暖房が行き届き、ハウスの中では冬でも半袖で生活できました。卓球台があり、コカ・コーラの自販機がある家に住んでいるのは私位のもの。屋上から見る景色は素晴らしく、毎週のCOMMONミールにはインターナショナルな食事が並びました。

当時のハウスペアレンツは2組、日本から私の両親(稲垣博・和子)とスイスからの Werner Kohler 先生ご夫妻。40歳代の創設者の二人。ハウスに対する熱意、期待に溢れた HP。オープンしたてのハウスはきっと活気に溢れていたと想像します。

ハウス創設に尽力された多くの方々が既に亡くなられた現在、このハウスは老体にムチ打って頑張ってくれています。

朝日が東山から昇り、3階の南の窓からはきれいな形の華頂山が、そしてその頂上には將軍塚がくっきり見えています。

ハウスからこんなにきれいに見えるなら、きっと向こうからも見えるはず。確かに平安神宮の朱塗りの鳥居の向こうに、HdB がきれいに見えました。こんなに立派に頑張って建っているハウスの姿を見ると、とても誇らしく、愛おしく思えました。

夕方になると、室内にほどよい夕日が差し込み、西の家々の向こうに夕日が沈んでいく、一日の終わりが感じられます。ここは最高の場所です。

今年も8月16日には大文字の送り火があり、11月8日には皆既月食もありました。特に月食中には天王星食も同時に見られる非常に珍しい442年ぶりの天体 show でした。ハウスの窓から学生たちと歓声を上げながら見ていました。

また今年も4年に1度の2022 FIFA ワールドカップもありました。大画面でパブリックビューイング。ドイツ人が5人もいたため、ドイツ対日本の試合の時は、ドイツ人スカラーがホットワインを振る舞って下さり、私はジャーマンポテトを作りました(COMMONミールで残った食材を有効利用)。

PM10時から始まる試合を見ようと、続々ロビーに集合。点数が入る度に怒涛の様な歓声が地響きの様に起こりました。

こういったものは、もちろん一人で静かに見るのも良し。しかし大勢の人たちとその喜びを共有すると、その歓喜も倍増するはず。HdBに住んでいるからこんな体験が

出来るのです。

ある日、Office にシンガポール出身で 1 期生のティアさんから、夏子に伝えてほしいと電話がありました。彼は私がここに住んでいることなど、全く知らず、唯一の連絡手段が HdB だったのです。折り返しシンガポールへ電話をかけますと、ティア夫人の千鶴子さんが亡くなったという、悲しい知らせでした。2 年間一緒に暮らした懐かしいティアさんの声が聞けて大変嬉しかった。

母の遺品の中に、沢山の彼らから送られて来た写真がありました。結婚、出産、そして子供さんの結婚式の写真まで。それを見て、母にとって、彼らは（当初は男子寮でしたから）皆家族と一緒に、ということを感じました。

私が子供を出産してその子が 1 歳の時、コーラー先生に幼児祝福をして頂きました。その彼も、もう 41 歳。月日は刻々と過ぎ去り、ハウスの思い出は抱えきれないほど増えていく。

初代 HM の私の母は、晩年、ハウスの存続を半ば諦めていました。建て替えどころか、補修費もままならない現状を見て、93 歳の母はどうすればいいのか、途方に暮れていました。

母が 2020 年に亡くなり、2022 年 2 月 HdB から HP のお話を頂き、4 月に就任しました。引越してきた日、先ず驚いたのが、コンセントが余りにも少ない事。57 年前は何の不便も感じなかったのに時代の変化を感じました。窓枠もアルミサッシではない。お風呂とトイレは新しくなっていたのでホッとしました。天井でわけのわからない配管からチロチロと水の流れる音。いつまで経ってもお湯にならず、やっとなったら今度は熱湯が出てくる。そういった事に一つ一つ驚き、そして次第に慣れてきました。

イベントや学生達との付き合いを、オフィスの方やレジデントに助けてもらいながら、やっとなんとかこなして 9 ヶ月が過ぎました。

就任当初、就任と引越しの挨拶状をお出しした方から、思いもかけない嬉しいお電話がかかり、感謝の気持ちで一杯になりました。半世紀以上に稲垣夫妻にお世話になったから、HdB に多額のご寄付をして下さるとのこと。前途に光が射した瞬間です。

多くの方々のご厚意によって、まだまだハウスは健在ですよ～、と母に報告できました。これからも HdB が続くことを切に祈ります。



コーラー先生から幼児祝福

【保全委員会報告】

設備トラブルと保全委員会の対応

HdB 保全委員会 深海八郎（評議員）

前期末の第29回理事会では、今期の修繕計画に関して、コロナ禍の苦しい運営の中、厳しい財源に応じて優先順位の高いものから実施するとの方向性が確認された。

その後、杉山喬一氏から㈱D T Sの株式4,000株（1200万円相当）の寄附申し出を受けて（5月18日の第30回臨時理事会で承認）、基本財産の一部（目安として1000万円超）を取り崩しても緊急事態に備えた保守修繕を実施していくべきとの提案が、6月5日の第31回理事会で審議承認された。同時に保全委員会を立ち上げ、「修繕必要箇所一覧表（以下、修繕一覧表）」を作成し緊急度に応じて修繕対象を決め、逐一実施することとなった。保全委員会は、吉川委員長の下、内海・永井・平野・深海・水谷内（敬称略）で構成され、オンライン会議を含めて既に5回の協議を繰り返している。

「修繕一覧表」は、現状25項目に及び、事故の発生可能性（リスク）、影響度、リターン（メリット）、見積もり金額、短評、備考欄を加えて、修繕項目毎の情報の共有・明確化を図っている。また、業者選択に関しては原則相見積もりを取ることも申し合わせた。

その結果、今期直ぐにも取り掛かるべきと決定した修繕箇所と実施予定は

- ・ 北側隣家とのブロック塀の耐震強化・・・最終決定待ち（見積もり額未定）
- ・ 本館地下の消火水槽の更新・・・3月6～8日実施予定（見積もり額236万5千円）
- ・ 本館・西館屋上の電気給湯器のガス給湯器への交換・・・11月28日完了（実施額275万円）

上記に加えて、一般会計適用の修繕箇所としての下記は実施済である。

- ・ 本館南側駐車場扉修理
- ・ 本館地下非常口修理
- ・ 本館玄関扉交換・鍵改修

その他、地下雑排水管の詰まりによる汚水溢れ、地下物置の排水管漏れ、屋上の排水管用漏れ等の事故も発生し、その都度応急措置にて対応してきたが、其々再発の危険性もあり、早急に抜本的な対応を検討していくことになる。

別途、西館の居住環境が整わない為に本館同様に賃貸するには相当の改修工事が必要との認識が保全委員会で共有されてきた。本件は理事会で財源問題を含め抜本的な改善の可否を検討していただくことになると理解している。

トラブルの際の場当たり的な対応しかできず、定期的な保全を組織的に実施して来なかった点は大いなる反省点である。以上、今期の保全委員会の活動報告である。

【特集：第4回公開講演会】

(公財) 京都国際学生の家 公開講演会について

内海 博司

(HdB 理事長、京都大学名誉教授、19650M, 元 HF)

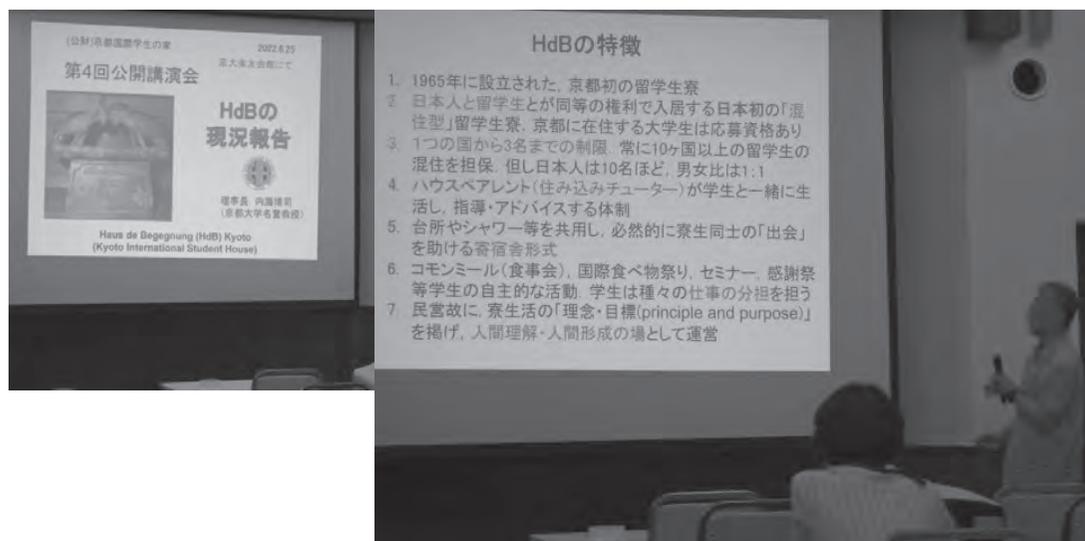
4年前に、京都国際学生を家の卒業生の会（OM会：Old Member）が発足しました。そして、多くの京都市民に(公財)京都国際学生を家の存在とその活動状況を知って頂く目的で、卒業生及び在寮生達による公開講演会を、2019年6月8日（土）に京大楽友会館で開催する活動を開始しました。それが第一回の公開講演会でした。この公開講演会の第2の目的は、開寮以来千名を超える卒業生がいるにも係わらず連絡が取れる卒業生が非常に少ないこともあり、卒業生同志、卒業生と在寮生との交流を深めることでした。お陰で、卒業生との連絡も多くなっています。

コロナのパンデミックが起き始めた2020年12月12日にも第2回を、2021年7月17日には第3回を、2022年6月25日には第4回の公開講演会を楽友会館にて開催してきました。更に、コロナ渦で人々の集まりが難しいことも考え、2021年からは公開講演会にオンラインも利用して開催しています。その動画は現在もホームページに公開中です。

更に、出席できなかった人達にイヤブックスの特集として、その内容を活字として皆様にお届けしています。第4回公開講座の内容は、次ページ以降に掲載しています。

当然、これまでの公開講演会の記事はイヤブックス掲載され、これらはpdfとしてホームページ (<http://hdbkyoto.jp/>) に公開しています。ダウンロードして読んで頂ければ有り難いです（ホームページの「当財団について」を開き、イヤブックスを開くと存在します）。

本年もコロナがまだ収束しない中、第5回公開講演会を、京大病院の南西角にある京都教育文化センター（京都市左京区聖護院川原町4-13）にて、6月17日（土）にて開催する予定です。ぜひ、多くの皆様に出席して欲しいと思っています。



『(公財)中島記念国際交流財団助成』(独)日本学生支援機構留学生地域交流事業



京都国際学生の家 Haus der Begegnung (HdB)

第4回公開講演会 入場無料・マスク着用

日時：2022年6月25日(土) 13:00~16:10

場所：京都大学楽友会館 〒606-8501 京都市左京区吉田二本松町

HdBは1965年より57年間、外国人学生と日本人学生の出会いの家として活動してきました。その歴史と現在の活動状況、未来への展望を卒業生と在寮生との講演で紹介させていただきます。

開会の辞 内海 博司 (理事長、京都大学名誉教授)

第I部 HdBで育った先輩達

13:10~ 14:00 食の領域からローカルな暮らしを組み直す

: 政策提案のためのアクションリサーチの試み
秋津 元輝 (京都大学大学院農学研究科教授)

14:00~ 14:40 ハウスの扉、美への扉

: イランで出版されたペルシア語による日本美術事典の紹介
ハギギ セパンタ (慶應義塾大学非常勤講師)

第II部 HdBの過去、現在、未来

15:00~ 15:30 外国人学生及び日本人学生から

在寮生有志 (NAMULINDWA STELLAH, Wang Ren, 浅井 裕理)

15:30~ 16:00 グローバル化の時代に生きる

平松 幸三 (京都大学名誉教授)

閉会の辞 村田 翼夫 (理事、筑波大学名誉教授)

参加： 来聴歓迎。どなたでも参加できます。

- ご来場にあたっては、マスク着用、手指消毒、検温、記名入場、ソーシャルディスタンスを確保のうえ、感染防止対策にご協力下さい。
- 万一発症された方がおられた場合は、保健所等の求めに応じ記名入場者リストを提出します。

主催：公益財団法人 京都国際学生の家

後援：京都新聞

連絡先：(公財)京都国際学生の家 京都市左京区聖護院東町10

電話/FAX：075-771-3648

ホームページ：<http://hdbkyoto.jp/en/home/>

<HdB から育った先輩達>

農村研究から世界へ、そして食からの地域づくり

秋津 元輝

(京都大学大学院農学研究科・教授、1986OM)

私がハウスに在寮したのは、1986年から87年までのたった1年だけでした。しかし、その後の歩みを振り返ると、その時の国際的な経験をひそかな踏み台として研究生活の方向が決まったように思います。今でも私はいろいろな場所をぶらぶらするのが好きで、先日数えてみると国内で何らかの意図で訪ねたことのない県は、青森県だけでした。海外にも34カ国を訪ねたことになります。あらためて思い返すと、子どもの頃に5歳上の兄と地図帳を広げて地名探しクイズというものでよく遊んでいました。地図帳を開いて、その見開き頁のなかにある〇〇という地名を相手に探させるという遊びです。私はたいてい探す側で、それを通じてさまざまな場所への関心が生まれたかなと、今となっては亡き兄に感謝しています。

もともとの私の専門は日本の農村社会研究です。そこから出発しましたが、元来海外に出かけることに関心があったので、韓国、タンザニア、ハンガリー、タイなどで少し長期の農村調査をおこないました。おおかたの国々に農業や農村があるので、ぶらぶらするには最適の専門分野です。大学に入るときに、毎日同じ場所に通勤する生活は嫌だと考えていたので、将来はジャーナリストか現地調査する研究者になろうと思っていました。まあ、その望みがかなったことになります。

もうひとつ大学に入る頃に考えていたことは、環境問題でした。田舎育ちではありませんでしたが、生活史上、農業とほとんど関連のない私が農学部を選択した理由は、環境問題への関心からでした。現在の職にいたる途中に、奈良女子大学で環境社会学を担当したこともありました。環境問題と世界、そして専門となった農村社会研究の3つの関心がぐるぐると周りながら研究対象を形成してきました。

しかし対象のひとつである農村、とりわけ日本農村の存立が危うくなってきました。背後には日本農業の停滞があります。悠久の歴史のなかで、農村はつねに権力の集中する都市によって搾取されてきました。農村人口が減少あるいは都市へと移動し、地球規模の都市化が進行するなかで、農村や農業は、もはや都市あるいは食料消費を専

らとする者の支援や理解なくして存続が困難になっています。都市の食べ手の側としても、自らの生命をつなぐ食に対して無関心ではいられないはずです。農村や農業の未来を考えるために、食を起点として食べる側から考える時代になってきたのです。また、最近の研究によると、地球への環境負荷のうち、4分の1は食料確保に関わる活動が原因とされています。さらに、日本の食料の60%以上が海外での生産に依存するようになり、その割合が下がる気配はありません。私たちの暮らしは食を通じて世界とつながっています。つまり、食を起点として考えることにより、環境問題、世界、農村社会研究がひとつにつながってきました。

そんな経緯をへて、近年研究しているテーマが食の倫理や食農システム転換としての食からの地域づくりです。食から暮らしを見つめ直す動きは、欧米から起こってきました。その関係で最近では北米や欧州にも出かけています。農業生産技術に加えて、食品加工技術が高度化して、私たちは毎日素性のよくわからない物を食べているとか、そうしたものを便利で安くて食品流通や加工産業が儲かるからという理由で食べさせられています。それを、素性を確かめながら主体性をもって選んで食べるという暮らしに近づけたい



大学院生ワークショップでドイツへ（2022年12月）

と考えています。そうすることによって、素性の分かりやすい身近な地域の食材が選ばれるようになり、身近ゆえにその生産方法についての情報も透明化されて、より環境優しい農業へと関心が向かうようになり、自らの住む環境を守るためによい農業をおこなう農業者を支えるという動機が生まれ、農村と農業が存続していく...とまあ、こういう循環をつくりたいと考えています。

これは研究でもあり実践でもあります。研究として、参加型アクションリサーチと呼んでもよいし、社会実装型地域研究と呼んでもかまいません。私としては、次の世代によりよい社会システムを引き継ぎたいと考えているので、むしろ実践のほうに重心が傾いています。こうしたローカルからの食の地域づくりの単位となるのは、各自治体です。非政府系のNPOやNGOの力が育たない日本において、現状では自治体が地域社会に政策的働きかけおこなう最大の団体です。そうした末端自治体に、自分たちの地域の未来の食と農を考える組織体を埋め込んでいくことが実践的課題です。

この組織体は北米では Food Policy council と呼ばれています。それを日本では「食と農の未来会議」と名付けて展開を図っています。これまで亀岡市や京都市をおもな対象地域として活動を進めてきました。秋田や長野でも研究仲間たちと組織づくりを試みてきましたが、地域にはそれぞれ固有の事情があったり、私たちの側のアプローチが不手際だったりして、社会を動かすことの難しさを痛感しています。組織づくりで学んだひとつは、食と農をめぐってその場所で何がもっとも重要な課題と考えられているかを見極めることがツボになることです。

こうした境地は研究の延長線上で到達したものですが、私としてはこの食からの地域づくりこそが未来の農村と農業を救う術だと信じているので、それをわかってもらうための活動はほとんど「布教」活動に近いかたちになります。研究が何か新しいことを求めて探索するのに対して、「布教」はほぼ同じ内容をいろいろなところで話すところに意義がでてきます。研究をすっかり辞めてしまったわけではないにせよ、60歳を過ぎて国立大学教員としての定年も見えてきたところで、「宣教師」になるのも必要ではないかと思うこの頃です。

大切に思う地域の人々と環境を未来へとつなぎたいと考えている皆さん、お声がけいただければ手弁当で食からの地域づくりの「布教」に参ります。よい食を実現することで生まれる豊かな社会をめざして、手を取り合いましょう。



ハウスの扉、美への扉 イランで出版された日本美術事典の紹介

ハギギ セパンタ(イラン)
(慶応義塾大学非常勤講師、1988OM)

1. 戦地のイランから平和なハウスへ

私は留学目的ではなく、戦争から逃れるためにイランを離れ来日しました。1985年イラン・イラク戦争が激しさを増していた時に、「15歳に達した男子の出国を禁じる」という法案がイラン国会を通過しました。当時、私は15歳の誕生日を目前に控え、家族の計らいで半強制的に親戚のいる日本に行くことになりました。

ここで皆さんも一度は目にしたと思われるピカソのゲルニカをお見せしたいと思います。反戦運動の象徴ともなっている一枚です。スペインのバスク地方、文化の街ゲルニカがフランコ将軍とナチ空軍によって空爆された模様が描かれています。この絵は国を問わず、戦争の実態を良く表していると思います。兵士は倒れ、子供が死ぬ、女たちが子供を抱きしめ泣き叫ぶ、馬は驚いていなく・・・イランでもイラクでもアフガニスタンでもシリアでも同じことが起こり、悲しいことにまさに今ウクライナでも戦争が行われています。



ピカソ作:ゲルニカ

さて、改めてもう一枚の絵をお見せしたいと思います。個人的にはゲルニカよりも心惹かれる絵であり、ゲルニカの対極を表現する絵かもしれません。我々がハウスです。



ハウスの絵に多くの窓がありますように、ハウスを想う時いつも廊下に並ぶ多くの「扉」を思い

ゲルニカが戦争の実態を示す一枚であるとするならば、私にとってハウスは平和の本質を体現するシェルターのような存在でした。私は1988年、18歳からの3年間の月日をこのハウスで過ごしました。Haus der Begegnungには文字通り多くの出会いが待っていました。この

出します。どの「扉」もどこかの国の文化、言語または専門領域に通じていて、その「扉」をノックし、入りさえすれば、瞬時に異世界にワープすることが出来るのです。

2. ペルシア語とは

私は今、大学でペルシア語を教えています。初回の授業ではよく「扉」の話をして。ペルシア語はイランの地理的条件また言語上の性質により多くの言語と繋がりを持つ言葉です。ヒンディー語、ウルドゥー語とは姉妹関係にあり、アフガニスタンのダリー語、タジキスタンのタジク語とは方言の違いだけでほぼ同じ言語です。またペルシア文学の影響でトルコ語・オスマン語には多くのペルシア語が流入しており、反対にイランに住む多くのアゼルバイジャン系の人によって多くのトルコ語がペルシア語に定着しています。また、アラビア語との関係も深い。イランはイスラム化していく過程でアラビア文字を使う事になり、多くのアラビア語を借用することになりました。そもそもペルシア語はインド・ヨーロッパ語族に属する言語なので皆さんも英語などのヨーロッパ語を通じて知らず知らずの内に何らかのペルシア語に触れているはず。このようにペルシア語は様々な言語に通じるいわば言語上の「どこでもドア」的存在かもしれません。

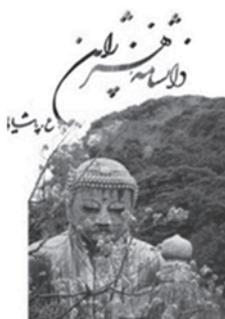
インド・ヨーロッパ語族の一例

| English | Persian |
|----------|---------|
| Mother | Madar |
| Father | Pedar |
| Brother | Baradar |
| Daughter | Dokhtar |
| | そして扉 |
| Door | Dar |

3. 日本美術事典とパーシャイー先生

さて、この度ペルシア語による「日本美術事典」がイランで出版されました。557 ページに渡る事典ですから、大事典と呼んだ方が良いでしょう。

この事典の生みの親はイランにおける日本



日本美術事典



パーシャイー先生

研究の第一人者である A・パーシャイー先生で、私は編集の側面からこの事典に携わりました。現在 83 歳になるパーシャイー先生は元々仏教哲学と禅がご専門で、日本の多くの俳句や百人一首といった文学作品をペルシア語に訳された方です。日本に関する著書、翻訳は 34 冊、仏教関係等を含めれば 90 冊以上を手掛ける多作な作家・研究者です。一方でパーシャイー先生の日本滞在歴は短く、その研究の多くは英語資料に準拠しています。先生は長い研究生活を通じて膨大な資料を収集し、その結果 5 年間かけて今回の日本美術事典を

完成されました。出版に際して、私は先生からの依頼で事典の内容を日本語の関連資料と照らし合わせる最終チェックを担当しました。コロナによる緊急事態宣言が発令される中、在宅時間が長く続いていた背景もあり約半年間事典の編集に携わることになりました。ではここから編集者の視点でこの事典について紹介したいと思います。

4. 事典の特徴と内容

中東諸国の中でもイランは殊に多岐にわたる出版物の数々とジャンルを誇ります。その中に、諸外国の美術を扱った書籍も当然のことながら存在しますが、557 ページに渡るこの日本美術事典はイランにおいて初の本格的な外国美術事典になります。扱う範囲は旧石器時代から平成に及び、具体的には縄文時代の土器・土偶から平成の草間弥生作品までをカバーしています。事典の中核は当然、造形美術に関する記載で占められていますが、パーシャール先生の言葉を借りれば、日本の造形美術をその背景にある日本的美意識や思想と切り離す事はできません。仏教美術と仏教思想、禅画と禅を切り分ける事が不可能です。「渋さ」「わびさび」「もののあわれ」「幽玄」といった美意識や諸概念の数々を含め、この事典は数百の項目を網羅しています。

5. 編集上の難儀、日本の時代区分

日本人の時代区分に対する意識はイラン人より明確であるという印象を持っています。これは学校教育も影響している事と思いますが、専門家でなくとも歴史的出来事とその時代が正確に記憶されているといつも感心します。

一方イラン(ペルシア)も多くの時代を経てきていますが、誇れる歴史とそうではない歴史があって、アケメネス朝やササン朝ペルシアのような大帝国内時代に関しては一般によく記憶されていても、外国に支配されたギリシア、アラブ、モンゴル系の王朝に関しては忘れがちになってしまいます。さて、編集の話題に戻りますと、当然の事ではありますが各ページに作品・人物が登場し、その都度時代と年代を明記する必要があります。この作業に中々の労力を費やしました。というのも、日本史の時代設定に関しては時に専門家の見解が異なるからです。例えば安土桃山時代の始まりと終わりに関して諸説存在します。始まりを信長が京都に入った1568年とするのか、室町幕府が事実上滅亡した1573年にするのか、はたまた安土城の建設が始まった1576年と捉えるのか、専門家でも意見が分かれます。終わりに関しては、困ったことに、秀吉が亡くなった1598年、関ヶ原の戦いで家康が勝利した1600年、江戸幕府が開かれた1603年、更には美術史的立場として豊臣家が滅亡した1615年までを桃山時代とする考え方も根強くあります。見方と立場によって前述の時代区分はどれも正しいが、独立した一冊の事典として統一した見解を提示する上では、どの時代設定に準拠するのか、その選定は困難な作業となりました。この頃、鎌倉時代の始期についても諸説が登場していて、一昔前の受験生は1192年(イイクニ)で暗記していたのに最近では1185年(イイハコ)で覚えるようにしているらしい。年代の変更について日本の受験生だけでなく、美術典に携わる私のようなごく一部のイラン人も戸惑い、少し困っているのも事実です！

6. 日本語を正確にペルシア語に表記する難しさ

日本語、日本の固有名詞などを如何に正確にペルシア語で表記し、正しくペルシア語圏の人に読ませるかも課題でした。ローマ字の場合、長音符号「マクロン」という横棒を母音の

上に加える事で多くの問題が解決します。(Kyoto→Kyōto, Kyushu→Kyūshūのように)しかしペルシア語では O と U には原則同じ文字が使われます。「将軍」は普通ペルシア語で شوگونという形で書かれますが、困ったことにこれを読む時、しょうぐん以外にしょぐん、しゅぐん、しゅうぐん、しょごん、しゅごん等様々な読み方が許されてしまいます。さらに「教王護国寺にある両界曼荼羅図」のような長い固有名詞になると気が遠くなるほど読み方、発音パターンが可能となってしまいます。この問題を回避する為、パーシャール先生が日本語を正確にペルシア語で表記するための特殊記号を考案し、読み方のルールを明示した上で事典で使うことにしました。しかし事典に何千、何万と登場するすべての日本語にペルシア語の発音記号を付けるのは至難の業で、編集の際、このチェックだけでも数ヶ月要しました。

7. イージーミスの修正に意外と時間がかかる

「^{えかだんびず}慧可断臂図」切り落としたのは左ひじ？それとも右ひじ？

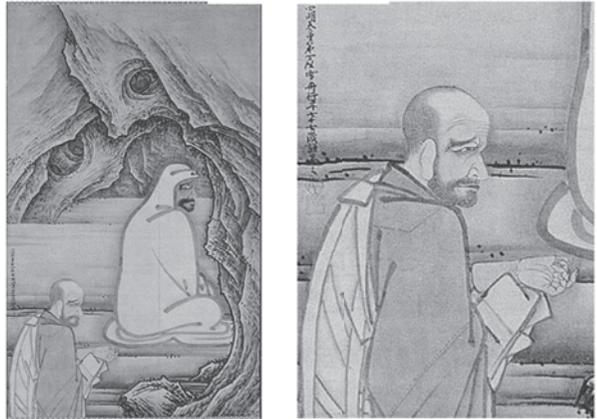
時には参照している英語資料そのものにイージーミスがあり、その修正に多くの時間を割かなければなりません。

例えば、雪舟による慧可断臂図。慧可^{えか}という僧が少林寺で面壁座禅中の達磨に参禅を求めるが断られてしまう。

慧可は自らのひじを切り落として決意の固さを示し入門を許されるという有名な場面が描かれています。さて、編集前の事典ではパーシャール先生が使用した英語資料に基づき慧可が切り落としたのは「右ひじ」となっていました。しかし日本語の関連資料では慧可が切り落としたのは「左ひじ」となっていました。イランにいるパーシャール先生と連絡を取り、他の資料を確認し、虫眼鏡を使って「右か左か」を見極める。こういった些細なことの確認に一日かけたりすることも度々ありました。

8. 海外に流出した文化財

作品によっては英語資料には豊富な情報があっても、日本語の資料では情報が限定的というケースもあります。総じて海外に流出した文化財に関する日本語資料は少ない傾向にある印象を受けました。一例として狩野派の中であまり作品が残ってい



雪舟筆「慧可断臂図」京都国立博物館



ない狩野孝信による^{きんきしとがず}琴棋書画図があげられます。

9. イラン特有の事情、「指導省」の壁

日本ではあり得ない事です、イランでは出版をする際、事前に省庁の一つである「イラン文化・イスラム指導省」にその本を提出し、内容に問題がないかチェックを受け、出版許可を得なければなりません。宗教規範に反したり、逸脱したりしている箇所があれば、指導省にその部分を指摘され、修正するよう差し戻されます。出版社は問題部分を修正した上、再度出版許可を待つことになるが、このプロセスには相当時間がかかります。面倒な手順を避けるため、殆どの書き手はあらかじめ指導省のレッドラインを超えないよう自己検閲をして無難に本を出版しようとします。因みにイランでは映画産業をはじめ新聞、すべての出版物は指導省の管理下に置かれています。当然のことながらイランの多くの作家、表現者は指導省による検閲と自己検閲を問題視しています。

10. 起きてはならないことが起きてしまった！

美術の話から少し脱線しますが、村上春樹はイランでも大人気作家の一人です。彼の小説には度々露骨な性描写が含まれますが、それでも多くの著作がペルシア語に翻訳され続けています。本来あってはならないことですが、翻訳者による様々な機転、言葉選びの工夫、時に大胆な意識によってその出版が可能となっています。例えば、とある村上文学の男女の性描写は、ペルシア語訳の中で：「二人は誰もしたことの無いような事をした」とか「起きてはならないことが起きてしまった」などと様変わりします。村上春樹が怒るかもしれませんが、このように性的表現を変え、割愛することで一冊の本の出版が可能になります。

さて、いわゆる「起きてはならないこと」はアートの世界で「頻繁に起きる」ものです。昭和初期

の洋画家、^{よるざてつごろう}萬鉄五郎の作品を編集していた時、一瞬はっとしてしまいました。原作とは異なり、



左：黒塗りされた萬鉄五郎による元「裸体美人」



右：原作(萬鉄五郎「裸体美人」東京国立近代美術館)

本来着ていないはずの T シャツを女性が着ているではないか！パーシャイー先生に問い合わせてみると、以前日本で購入した画集をイランの自宅に郵送し、後にイランで受け取った際にこの裸婦が黒塗りされていることに気づいたという経緯でした。海外から送られる書籍、雑誌で肌の露出が多い写真などはイランの税関でマジックで黒塗りされた上で宛先に届けられるのです。パーシャイー先生

は「現実には起きた事なのでこの一枚は黒塗りされた状態で事典の中で使いたい」と話され、T

シャツ姿で事典に掲載されました。しかし、よく見ると粗い黒塗りではなく丁寧に T シャツを描いている事に少し感心しました。イランの税関おじさんに多少の絵心があったかもしれません！各国にルールと事情があり、それを基本的に尊重しなければなりません、芸術に対してももう少し寛容であってほしいような気がします。

11. 日本美術から学ぶものとは・まとめ

日本語を如何に正確なペルシア語で表記するか、諸説ある日本の時代区分をどのように整理するか、イーザミスの修正、海外に流出した作品の情報を収集する困難さ、イランにおける検閲・自己検閲といった問題に触れてきました。

しかし今回の編集では様々な困難を上回る幸せな時間を経験しました。美術館での瞬間的鑑賞は美術編集時の細部鑑賞とは大きく異なります。時間をかけて美術作品を覗き込む時、作品にも覗かれているような錯覚にとらわれる事があります。それは作品との対話が成立する事による幸せな瞬間、高揚感の類でしょう。

また日本美術を通じて、今まで意識してこなかった母国イランの美意識を再発見することにも繋がりました。「わびさび」や「もののあわれ」等は日本独特の美意識かもしれませんが、外国の文化・美術にも姿かたちを変えて存在しているのです。外国美術との触れ合いは「出会いの家ハウス」と同じく、その「扉」をくぐれば新たな出会いがあり、自己を新たに発見し形成することにも繋がります。

最後に我々がハウスに戻りましょう。やはりこの一枚を見ると落ち着きます。京都国際学生の家(HdB)は私たちにその「扉」の数だけ多くの出会いを提供し、計り知れないことを教えてくれました。ハウスは現在、老朽化が進み、傷みは目立つようになりました。建築美術として



ハウスを美術事典に載せられないかもしれませんが、ハウスの真価と可能性はその哲学にあります。「ハウス哲学」を受け継いだ人たちはそれぞれの立場で世界を少しでも良くしようと努力しています。そしてハウスに愛着を持つ多くの人は美術品を修理修復するかのようにハウスを守ろうと一生懸命活動を続けています。彼らに感謝しかなく頭が下がります。ハウスもハウス精神も、これから存続しますよう祈りを込めて本日の話を終わります。

<HdB の過去・現在・未来>

WHY JAPAN ?

Namulindwa Stellah(ウガンダ)
(京都大学 交通情報工学専攻 M2)

Last year, On 2nd October 2022 to be precise, I made exactly two(2) years in Japan dating from my first day of arrival at Kansai International Airport as a research government scholar in the International Master's Graduate Engineering program of the Department of Urban Management at Kyoto University. From then on, every 2nd of October became a special day in my life, a day I take time off to reflect and give accountability to myself and by extension to others for the wonderful time I have so far spent and lived in Japan. All the kind people whose kindness has lifted me up and made me what I am this very moment today. All the people who have been kind enough to politely correct and guide me as I stumbled through the early stages of adjustment and adaptation to my new environment. All my housemates at HdB, a wide array of fantastic individuals, from diverse ethnic and cultural backgrounds with whom I have been so privileged to interact and share what for now are some of the happiest memories of my life. All the staff at HdB who , have made it possible by providing us all with the most appropriate kind of environment for study, socialization, self-reflection and growth. An environment so true to its name "Kyoto International Student's House" a true home to international scholars so far away from away home! More to the list is my professor and my lab mates who have taught me the so much about the way of knowledge accumulation, preservation and practice in Japan, which has greatly benefited me as an individual in my lifelong quest for wisdom, skills and knowledge to better myself. Lastly and most importantly is the Japanese Government and its people at large for having offered me this once in a lifetime opportunity to travel to Japan, partake and learn from the culture of its people and to improve my self by adopting a level of skills in the field of Intelligent transport systems and traffic engineering by which, as a honorable citizen of the world, I can be able to meaningfully add an infinitesimal contribution to the progressive advancement of our human race as a whole.

Going beyond My first day of Arrival in Japan, My thoughts always fall back upon the first day I thought about applying for a Master's Degree Program Abroad. It had been two(2) years since I graduated from the undergraduate program with a Honors degree in Civil and Environmental Engineering. I had been working as an Entry level Engineer with a Government road development Agency. If the pay wasn't gratifying enough, given the extra hours of work required to be put in, then I ought to confess that it was the nature of engineering challenge at hand that kept me enthusiastically glued to my Job as A graduate Engineer. For the most part,

70% of the challenge was presented by the difficult nature of the terrain, characterized by either steep mountains, boggy swamps or extremely deep valleys, all which are nightmares to any highway construction project. The Steep mountains because they require highly specialized equipment to handle the earthworks and the Valleys, because they are susceptible to floods and yet require large volumes of material to be filled and left to settle over a very long period of time. Our team, however, succeeded in accomplishing the project in time, the result of which was a newly built dual-lane highway bridging valleys and formerly estranged, but now happy and grateful local communities, in a wonderful feat of Mind (Mathematics and Engineering) over nature. It was on one of those evenings after work, that I thought about enrolling for higher education abroad to further improve my skills in Highway Engineering. However random my choices were, the first three University choices I had in mind all happened to be in Japan. It was my Officemate who first noticed the coincidence, followed by my supervisor at work, then my Mentor and my Mother. It was then that I began to concurrently hear the phrase, But WHY JAPAN ?

I didn't give it much thought then. And so, my responses coupled with the level of enthusiasm varied depending on time and place. But I began to notice, there were no two individuals I gave the same answer. Which in my culture is a serious drawback to personal character and integrity. But this in part, was due to the fact that upto this point I hadn't yet widely researched about Japan as a country nor really known about its people, cultural norms, work culture, food etc.. upto this point. The only impression I had of Japan, and perhaps everlasting one, was one of a picture I had cut out of my mother's beauty magazine several years ago. A picture of a very beautiful smiling Japanese lady in a floral Kimono, gracefully standing by Fish pond in a traditional Japanese Garden. For me then, That Beautiful kindly spirit in the smiling lady's polite eyes represented Japan and its people. It represented moderation and temperance, it represented simplicity in its uttermost complication, a culture that puts individual and collective dignity above all else. An industrious Nation where most, if not all technological marvels were born. These impressions that I had perhaps nurtured for too long, where the real reason Japan was unconsciously so close to my heart, the reason I held it in high regard above all else. That kind of gentle mystery of all the things yet to be discovered, known and learnt in a far away unknown land across vast lands and oceans, kept chipping away at me. But I dared not say a word. I dared not share say the truth, until I finally arrived in Japan despite the woke of the COVID-19 pandemic. And when I arrived in Japan, shortly after leaving the then 14-day quarantine at Daiwa Roynet Hotel, You won't believe one of the most recurrent questions I met from time to time. "But WHY JAPAN?" There it was again, but this time I had learnt my lesson. I had learnt that it is very important for me to reflect and understand why both my people in Uganda and The Japanese people asked the same question and yet they had no prior intel had been exchanged between them whatsoever. I understood that on a deeper, perhaps philosophical level, this could

be a story of my life in Japan and that my experiences and insights well thought and documented could benefit both countries and many more generations of international scholars to come. And so I began to collect the relevant resources, by consciously living everyday and taking notes of all that leaves an impression upon my mind. And all I can say is that so far, the beautiful smiling Japanese lady with kind eyes in a floral kimono from My Mother's magazine so many years before has stayed true to me. I have learnt so much in terms of research and academia, and I have been given an opportunity to express myself and my ideas freely. Doors have been opened onto me to professional platforms I never dreamt possible and I have also been able to experience a very deep culture that appeals to self-introspection, self reliance and maintenance of a high level of both individual and collective integrity. I have tasted some of the most delicious meals on Earth in Japan. And although I don't particularly like sushi, I have found a wide variety of alternative traditional Japanese cuisines to my liking which I never miss to try out every other day. I have found the people very kind and helpful whenever I am in need of assistance regarding both day to day life and official matters. In terms of friendships however, I have found that most Japanese people are quite slow and extremely conscious when making friendships with foreigners but once made, the friendships blossom into everlasting partnerships. I have also fallen in love with the nature here, the beauty of Kyoto City is truly legendary. Sometimes it feels like taking pictures alone can't help me describe exactly what it is I see and feel when I ride my bike along the Kamo River under the overpowering beauty of the cherry blossoms in spring, and neither can I truly put to words what it I see and feel at the sight of the traditional Japanese temples enveloped in the ineffable beauty of the Autumn Leaves. These and more are the perhaps the real reason WHY JAPAN for me. I believe in will do better when I learn how to speak the Japanese language, as I have resolved to do, this year. Also, i have taken to journaling of late, in order to support my future aim at producing a more comprehensive report on WHY JAPAN. But for Now, I hope this my first public attempt at the answering this legendary question from the bottom of my heart suffices to earn your consideration. Many thanks for all, again. Blessings Always.



Picture taken on Thanksgiving day 2022.

共通点の発見は相互理解の始まり

Wang Ren (ワン レン) (中国)
(京都大学経済学研究科)

皆様こんにちは。今日スピーチのテーマは、「共通点の発見は相互理解の始まり」です。

約6年前、ある英語圏の国に住んでいた時、何かしたわけでもないのにただアジア人の顔付きというだけで差別を受けたことがあります。しかし、当時怒ったり悲しんだり少しもしませんでした。何故ならば、どこの国でも「外国人嫌悪」というグループが存在するからです。自分の母国である中国を例にとると、外国人をわけもなく憎み差別する人が多いわけではありませんが、確かにそういった層は一定数存在します。

外国人嫌悪の発端という時々、異国の方々には彼我の差を重んじすぎる先入観が働くかもしれません。ひと昔前の中国語として「異民族の人々は必ず私達と考え方が違う」という名言があります。しかし、このような相違点にしか着目しない考え方は既に今日のグローバル時代に合わないため、捨てたほうが良いと思います。しがみついてしまうと、さまざまな国際提携の機会を見逃し、結果として私達自身の利益に支障をきたす恐れがあるためです。

では、国際の相互理解を深めるためにはどうすればいいのでしょうか。私に言わせれば、これから国々の相違点に注目するかわりに、共通点を探すようにすべきだと思います。

これも、前述の英語圏の国に住んでいた時の話です。その当時、ベトナム・インド出身の二人とよく一緒に旅行に行ったり、勉強会を行ったりしていました。

ベトナムと中国は、共通している文化や制度が多いということは知っていましたが、会話をする中で共通点が想像以上にあると分かりました。例えば、端午の節句のちまきなどです。

さらに驚いたことがあります。インドと中国は、文化と社会システムは異なるものの、世界でも一番目・二番目に規模の大きい開発途上国であり、例えば環境保護や地域格差など、意外と共通する問題が多いのです。自国と異国の共通点が予想以上に多いという事実を意識したら、お互いに親近感が強くなり、より一層親くなりました。

以上は私の個人的な経験ですが、皆様の国際理解に参考になれば幸いです。皆様は「小異を捨てて大同につく」ということわざをご存知かと思います。恐れ入りますが、今日この場をお借りして、この日本語と中国語で共通していることわざを勝手に改作させていただきます。「小同を見つけて大同につく」です。もし世界の国の人びとがお互いの細かい共通点を積極的に発見すれば、戦争や貿易摩擦といった問題を直ちに解決できるとまでは言いませんが、民間レベルの隔たりを少しずつ解消し、相互理解を深めることができるかもしれません。これが大同への第一歩ではないかと思います。

ご静聴ありがとうございました。

生きる上での息苦しさからの解放

浅井裕理

(同志社女子大学大学院文学研究科日本語日本文化専攻 修士課程2年)

大学院へ進んでから、自分が圧倒的に勉強不足・力不足であると感じ苦しんでいた。修士1年の秋口になると、どんな修士論文を書きたいのかわからなくなり、息苦しさを感じる頻度はますます高くなっていった。修士課程を修了した後、一体自分は何ができるのか、何がしたいのかもわからなかった。ただ、いつも「いつか教育機関で働いてみたい」「いつか海外で日本語学習や日本留学のサポートをしたい」という思いだけは何となくあった。だが、現実的でないし自分にそんな力はないと思い半ばあきらめていた。

ところが今年の5月中旬、風向きが変わった。「こんなのあるよ。ちょっとお金かかるけど。参考までに。」それは同じHdBの寮生である山本峰丸くんからのLINEだった。送られてきたのは、モンゴルの首都ウランバートルに位置する新モンゴル小中高一貫学校におけるサマースクール*のチラシ。当時、私はモンゴルに強い興味・関心があったわけではなかった。しかし不思議と、2か月後にそこにいる自分の姿がイメージできた。そして未知の国モンゴルで何か大きなものを得られる、そんな気がしたので飛び込んでみた。

こうして7月中旬から8月末までの40日間、モンゴルで毎日を必死に過ごした。朝6時に起床。授業開始時間ギリギリに授業準備を終え、必死で日本語の読解の授業をこなし、食堂に行きみんなで昼食をとる。午後はコミュニケーションやキャリアに関する授業をしたり、他の先生の授業見学をしたりした。放課後は、面接官やスピーチコンテストの審査員になるなど多様な自分に出会った。スピーチコンテストでは、「天文学を学んだ学生の就職先をモンゴルにつくりたい」など、具体的な夢を持った生徒たちのスピーチに感銘を受けた。

他にも JICA の事務所を訪問する機会や、偶然お会いした日本人サッカー選手からお話を伺う機会もあった。さらに面白いことに私の通う大学、そして HdB 付近にあるラーメン店あくた川のモンゴル CEO の方にお会いした日もあった。休日に車で4時間かけ大草原へ行き、遊牧民の方が住むゲルにお邪魔したこともあった。街にあるカラオケやバーへ行き酔いつぶれた日もあった。若いうちにしかできない無茶ができたような気がして少し嬉しかった。また、なぜかモンゴルにいる間オンラインのビジネスコンテストに出場(峰丸くんが誘ってくれた)したり、同じくオンラインの日本語学習サポートのアルバイト(HdBの寮生 Wang Ren さんが紹介してくださった)を始めたりもした。夜9時か10時過ぎまで学校に残り、一人パソコンの前でアルバイトをしていた日もしばしばあったが、この時間まで教室に残り自習をしている生徒がおり、その熱意に驚かされた。

実は、当初の予定では他の日本人学生と共に30日で帰国することになっていたのだが、新モンゴルの分校、日馬富士学園のサマースクールでも授業を行うことが急遽決定しビザを申請、滞在期間を延長した。日馬富士学園で活動したのは1週間ほどだったが、生徒や先生方は突如現れたよそ者に対し「モンゴルに来てくれてありがとう」と口を揃え、大変

良くしてくださった。別れ際には涙をこらえることができなかった。

紙面の都合上、見たもの全てを書くことができないのが惜しいが、このように私自身が色彩豊かな経験をさせていただいたことに加え、生徒たちの奥底にある自国に貢献したいという気持ち、そんな生徒を思う職員・教員のみなさんの思いに圧倒された。そしていつの間にか、少し前まで感じていた息苦しさは薄れていた。思い返してみると、私の根底にあったのは自分への自信のなさであった。誰かに褒められても、自分が自分を認めていなかったのだから心の奥に粘着する自信のなさ息苦しさを剥がすことはできなかった。

モンゴルでの40日を経て、これらを取り払うには常に「なるようになる」と構えていること・達成感を得ること・自分が本当にやりたいことを見つけることの三つが重要なのではないかと気が付いた。そのためには多様多様な経験をする中で多くの人と接し、生きていくためにどんな道があるのかを知ることから始まると考えている。

ところで新モンゴルにいる間に職員の方より、来年から新たなキャリア支援プログラムを始めたいとお話があり、ありがたいことに私も来年4月から職員としてその仲間に加わることとなった。一つ気がかりなのは、以前の私と同様に自信のなさに悩む生徒が何人かいたことである。そのような生徒のために、まずはさまざまな場所で活躍するOB・OG、そしてモンゴルに住む日本人との交流の機会を多くつくり、将来の夢のヒントを見つけたり、日本語で会話できたという達成感を得たりしてほしい。また、日本の大学への進学を希望する生徒を対象にした『留学ガイドブック』なるものを作成・出版したい。面接や志望理由書の対策など、留学準備のために役立つ内容にするのはもちろん、日本の大学での過ごし方や友人とのコミュニケーションのとり方についての内容なども盛り込み、日本へ渡った後にも役立つようなものにしたい。

モンゴルで2・3年ほど働いた後は、中国の大学で「自然な日本語会話」のための指導を行いたい。この目標は、前述のRenさんが紹介してくださったアルバイトをしていくうちに具体化していった。モンゴルから帰国した後も、峰丸さんとRenにはそれぞれ大変お世話になった。この半年を振り返ってみても、人生の中で最も実りのある期間になったように思う。この二人には、本当に頭が上がらない。

しかし、この先どうなっていくかはわからない。モンゴルで何十年と働くかもしれないし、1年も経たないうちに帰国することになるかもしれない。だからこそ今しかできないこと、そして今やりたいことを常に模索しながら、後悔しないようこれからも進んでいきたい。

*今年で開催19回を迎えるプログラムであり、日本の大学生が日本の大学への入学を希望する高校生に対し、多様多様な授業やイベントの開催を行うというものである。筆者が参加したのは留学試験対策の授業を行うというプログラムであり、読解の授業を担当した。新モンゴルは、モンゴル人であるガルバドラッハ氏が東北大学博士課程に在学中、娘の通う山形県の進学校に感銘を受け「モンゴルの未来を背負う優秀な若者を育成したい」との思いから設立された。2000年、モンゴル初の日本式の学校として「新モンゴル高校」を開校。その後、小学校・中学校・高等専門学校・工科大学、そして日本語センター・英語センター、さらには分校「新モンゴル日馬富士学園」を設立した。制服に部活動など日本独自の学校における文化を取り入れ、生徒は中学生の段階から日本語を学び始める。これまでに高校卒業後に日本の大学へ進学した生徒は40%にも上る。HdB付近に位置する、京都大学への進学実績も多くある。

グローバル化社会に生きる大学と研究者

平松 幸三

(京都大学名誉教授、元運営委員長、19710M)

1.1. はじめに

京都「国際学生の家」は、故ヴェルナー博士の思想、つまり「共同の生」を通してさまざまな対立を克服する「出会い」を実現し、ひいては人類共存と世界平和を希求するという思想を基本理念として設立されました。互いに文化やイデオロギーで衝突しても、対話によって理解し合うことで、戦争を回避することができるだろう、という期待があった、と思います。ところが、今、ロシアとウクライナという、他のどの国民よりも互いによく理解しあっているはずの2国が戦争状態にあります。われわれの理想は、間違っていたのでしょうか。現実の前に理想は無効なのでしょうか。私に答えはありません。

ただ、約60年前にこのハウスが構想されたときからは、時代が大きく変わったということと言えます。それは大学も例外ではなく、550年前の大学と今の大学とは半分別物と言えましょう。そういう時代にあって、日本の大学はグローバル化への対応が遅れている、という印象を乏しい経験からですが、私は抱きましたので、やや大それたタイトルですが、管見を披歴したいと思います。

2. グローバル化と国際化

国際とは、国境がはっきりしていて複数の国が交流する状態で、一方、グローバル化とは、国境がなくなるか、ゆるくなって、情報の伝達、人の往来、物資やお金の移動がかなり自由になった状態です。

こう言うと、グローバル化は人類の歴史上、ごく最近の現象であるかのように聞こえますが、実は国境がきちんと引かれたのはむしろ新しいことで、グローバル化で起こることは、決してこれまで経験しなかったことばかりではありません。たとえば、地中海。2500年前にギリシアが栄えた時、当時の交通事情に鑑みると、地中海は現在の地球より大きい空間でした。そこで言葉も習慣も外観も違う人たちが、交易し、時に戦っていました。国家も都市国家であって、国境などはっきりしません。確定した国境を前提にする国際という概念のほうがむしろ新しいくらいです。

当時の地中海世界で都市国家は、いちおう人々が暮らしを守る膜ではあっても、基本的に個人を守る膜は希薄でした。その代わりに、海を渡って隣の都市に行くのに特段に許可は不要でした。ちょうど今の時代と似ているのです。

3. 富裕層の拡大と大学ランキング

どうしてそうなるのか、私には詳しいことはわかりませんが、グローバル化の進行に伴って世界中で富裕層が拡大したように思います。以前から存在した超富裕層ほどではなくても、比較的裕福な中間層が厚くなりました。これは実感です。富の偏在が、よりきつくなった、と思います。

富裕層が拡大したとき大学はどうなるのでしょうか。富裕層・中間層の親の一部は、子供を大学に入れるにあたって、自国の大学ではなく、先進国と言われる国の大学に留学させようと考えます。こんなことは今に始まったことではありませんが、富裕層・中間層の拡大によってそういう学生の数が大幅に増えました。

すると、どこの国のどの大学に入れればよいのか、という情報が求められます。その需要が大学ランキングを生んだ、と私は考えています。もちろんそれ以外に、大学に投資したり、共同研究したりするときにも詳しい情報が必要だ、というのも理由に挙げられるでしょう。端的に言って、大学のランクとは、「大学の魅力度」です。留学生がいくべき大学のリストであり、国際交流する大学の目安です。アカデミシャンがイメージする大学の實力とは必ずしも一致しない、と思います。言うまでもなく、大学ランキングリストの作成には少なからぬお金がかかります。ビジネスとして成り立つからこそ作成されている、それだけの需要がある、ということなのです。

4. ワールド・クラスの大学

2010年にロンドンでWorld Class University (WCU) のワークショップが開かれたことがありました。参加者はイギリスを中心としていましたが、ヨーロッパのほか、アフリカからも4、5名、アジアは中国、韓国、シンガポール、香港、インドネシアから参加、32か国から約170名の参加者がありました。日本の大学の参加はゼロ。日本人は私ひとりでした。ここでワールド・クラスとは、THEランキングで200位以内としていました。

このときロンドン大学のグラント学長が、優れた大学の概念をランキングによって定義づけることに反対する、と講演で明言されました。大学ランキングは、画一的にならざるをえないが、大学は非常に多様であって、ランキングの上位に乗らないけれどすぐれた研究・教育を行っている大学は少なくない、と。そもそも大学とか教育とかを競争原理に乗せることが間違っています。

しかし現実には、世界の頭脳をどれだけ集められるかを競っています。学生にしても、研究者にしても、限られた人生の時間の中でもっとも効率よく学び、あるいは研究実績をあげたい、というのは人情です。特に若い時期をどこで過ごすかは将来に決定的に影響するのですから、WCUのない国は、頭脳が流出していくことを防げないでしょう。しかし国中の大学をWCUにすることはできない相談で、アメリカといえども、大多数の大学はワールド・クラスではありません。

つまり、一部の大学がワールド・クラスになって、その大学間で交流し、あるいは競争する時代になったといえましょう。まさにグローバル化によって拡大した少数の富裕層（拡大したとは言え、圧倒的に少数者です）がグローバル化を享受するのと同様に、一部の優秀な人材あるいは富裕な家庭の子供が WCU に進学し、それなりの世界で生きていく時代になった、ということなのです。

日本にワールド・クラスの大学があるかという点、THE ランキングで 200 位以内には、2022 年現在 2 校あります。たしかにランキングによると 2 校とも 100 位以内ですが、内実はワールド・クラスになっていない、と私は思います。Times Higher Education (THE) は、日本はかつて経済成長を遂げたときに大学を国際化することに失敗した、と断じています。グーの根もでません。

5. 日本の大学でなにが起こっているか。

では、日本の大学のどこが悪いのでしょうか。一言で言って、政府も大学も日本の大学が世界で置かれている位置が分かっているのだろうか、と疑わざるをえません。要するに、日本の大学のグローバル化時代への態勢づくりができていないのです。大学一特に国立大学一の事務組織をグローバル化時代に適応させるのは、単に外国語のできる事務員が少ないというだけではなく、長年培った事務体制と、それを運営する事務職員のマインドがそれなりに作り上げられているから、至難の業と、これは経験から実感します。「大学の国際化に失敗した」と言われる所以です。ランキング＝魅力度において過去 10 年で海外の大学にどんどん追い抜かれた理由がわかります。

6. ワールド・クラスの大学になると幸せか

大学の体質をそれなりに変えていかないといけないとしたら、WCU になって幸せなのか、というと、私は疑問を払拭できません。たとえば、京都大学。事務管理は別にしても、学務に関してはかなりゆるーく運営してきた大学で、だからこそ独創的な人材を生んだ、と京大人は自負しています。しかし WCU になって外国からの学生や教員が多くなると、そういった暗黙の了解事項、ある種の文化といえるでしょう、それが共有されにくくなります。具体的な例を挙げますと、京大は入学試験を通るのが難関とされますから、そのフィルターを通過しているかぎり人材として優れている、と一般に認められてきました。しかし WCU になって、留学生の割合が増えてくると、話が変わります。大学卒業生の質を問われたなら、学内できちんとしたフィルターを設けなければならなくなるのは理の当然。つまり、学務運営の文化が変わらなければならない、ということになります。

グローバル化というのは、異質なものの混合が必然的に起こることですから、ローカルな生活や文化が変容を余儀なくされるのは、ある意味で当然です。たとえば EU は小規模ではあるけれども、一種のグローバル化空間を実現してきたわけですが、そ

れは効率や便利さのために域内の経済、法制度、技術レベル、文化などの均一化を伴いました。

7. 科学者の生き方の変化

科学の歴史を振り返りますと、19世紀中ごろまでは、科学者は富裕な人の趣味として、あるいは富裕なパトロン支援で研究がなされていました。18世紀に南米で国民国家が成立し、フランス革命後にヨーロッパ諸国が遅かれ早かれ国民国家に変わって行きます。そして科学が富国強兵のエンジンである工業発展の知識を生むことが認識されるようになって、科学者という職業が成立していきました。

ニュートンの時代に科学と技術は、別のものでもありました。しかし19世紀、特にその後半になると、科学と技術とが手を結び、軍事力、工業力を強くすることに大きく貢献していき、20世紀になってますますその傾向が強まりました。

科学が富国強兵の原動力であるとき、科学者がそのエンジンとして動員されるのは当然です。「科学に国境はないが、科学者には国境がある」（パスツール）と言われるように、科学者はお国のために奉仕する「戦士」となったのです。第2次世界大戦時には、どの国でも科学者が最大限に動員され、兵器の開発に尽力しました。しかし核兵器の開発と使用とは、これが広がると人類を破滅に導きかねないという危機感を一部の科学者に抱かせるようになった結果、核兵器廃絶、科学の平和利用を訴えるラッセル＝アインシュタイン宣言（1955）が発表され、それは「科学と世界の諸問題に関するバグウォッシュ会議」（バグウォッシュ会議）の結成につながりました。

このあたりから「お国のため」という発想では科学者が生きられない、あるいは生きてはならない、という時代が到来した、と言ってよいでしょう。ただ現実には、各国はすぐれた科学者を取り込んで富国強兵に貢献させる仕組みをさまざまに作り上げています。また科学者たちは、職をえるため、よりよい地位に就くため、あるいは榮譽ある賞を獲得するために研究業績を上げることにしのぎを削るものですが、その競争が1国の中に限らず、国境をまたいではげしくなりました。その結果、剽窃、データ改竄、ハゲタカジャーナルの横行などの、不正かそれに近い動きが無視できないほどになり、「全人類の福利のために真理を解明する」科学者像は、青臭い美辞麗句にすぎない、とみなされかねなくなりました。しかし同時に、そういった世間を欺く科学者の行為に対する監視と追及も厳しくなっています。

グローバル化された社会では、多かれ少なかれ個人が裸で世界に向き合う事態が起こります。それにはメリットもデメリットもあります。組織が守ってくれない局面が増える一方、個人が世界に向けて情報を発信することができますし、入手可能な情報であれば国境を越えて瞬時に得ることができるわけで、大きなメリットが生まれました。

個人が世界に向き合うとき、単純化を恐れずに言うと、力量と才覚と意思さえあれば、世界のどこでも職を得ることが可能になります。逆に、大学や研究所は世界中から優秀な学者を得るチャンスがあって、そういう学者を獲得して、自らの予算獲得を増やし、組織の質と規模を拡大することができます。

8. これからどうなるのか

こういう状況で、研究者・科学者はどう行動し、生きていけばよいのでしょうか。当たり前ですが、これはそう簡単に言うことはできません。ひとつ参考になるのがイギリスの例です。イギリスは、30年余り前に大学教員を3つのカテゴリに分けました。研究教員、教育教員、その中間です。研究教員だと、年に1億円規模の研究費を獲得することが期待され、その代わりに教育義務が少なくなります。教育教員の場合は、もっぱら講義と実習だけ担当して、職員室に机をもらい、研究室は与えられません。その代わりに、研究費獲得、学生の論文指導、研究論文執筆などから解放されます。また、大学も研究センター型の大学とそれ以外とに分かれていきます。

イギリスでは教員が研究費を獲得すると、同額の間接経費が大学に入りますから、大学は教員が多額の研究費をとってくれると、経営上メリットが大きいので、そういう教員を多く獲得しようとしています。教員の国籍は問いません。だから大学も研究者も自らがどういうタイプで生きていくのかを真剣に考えなければならない時代になっています。世界にはノマドのようにして生きている研究者が多くいて、彼らは実績を積み重ねて、鵜の目鷹の目であらゆる国の職を探して自分を売り込んでいます。また大学や研究所もそういう人材の中からできるだけ優れた人を獲得しようとしているのです。だからWCUとして生き延びようとするなら、大学はそういう場での競争に立たされますし、研究者もすぐれた研究条件のもとでよい成果をあげたいなら、その中で生き残らねばならないのです。

そういう大学にしても研究者にしても、全体の中では上澄みと言ってよい、いわゆるエリート層です。グローバル化は社会の上澄み部分にとってメリットが大きいと思いますが、まさに大学や研究者についても言えます。こういう姿をみると、グローバル化社会の大学や研究者は、お国のために頑張るとか組織に貢献する、という価値観が薄くなる代わりに、グローバルに役立つことを目標とするようになる、と思えます。学術というものは、本来、人類を含む全世界の福利のため、さらにいうなら将来の世界のために貢献するという理想を持つものだと思いますが、その理想が、少なくとも建前上は、グローバル化によってより具体的になっていくかもしれません。

以上は光の側面ですが、陰の側面として、業績があるように見せかける仕組みがあります。いわゆるハゲタカジャーナルがそのひとつで、それを利用する人も少なからずあり、私の経験では途上国とされる国でハゲタカジャーナルへの論文投稿が横行し

ています。ということは、逆に言うと需要があるからで、そのような業績リストで人事が通る大学が少なくない、ということの意味します。その他、犯罪と言えるような剽窃やデータ改竄などあの手この手が編み出されています。

光は上の方に当たり、陰は下にできるという一般的な傾向がこの場合もみられます。研究者個人としては、この辺の事情をよくみておく必要があるでしょう。たとえば海外の共同研究者が光のあたる場にいる人なら、共著論文も一流の学術誌に発表されて自分にとってプラスになるでしょうが、陰にいる人でハゲタカジャーナルに頻繁に投稿している人との共著論文を出してしまったら、将来自分の経歴に瑕となるかもしれません。グローバル化の結果、さまざまな人と直に接触し、交流する機会が増えるにつれ、その相手の立場や資質や状況を見極めなければならなくなっているともいえるのです。

9. 研究費の出所と成果の応用

いつの時代も研究者にとって大きな関心事は、研究費の獲得です。政府系の助成も含めて研究費は、助成する側の意図によってベクトルの方向と長さが決められます。それは研究者の主張にも影を落とし、助成側の意向によって結論に偏りが生まれる、と指摘されています。それで最近の学術誌の一部は、論文投稿者に研究費の出所などを明記させるようになってきました。科学的結論だからといって、価値中立的ではなくなったのです。

科学研究がイデオロギーによって捻じ曲げられた歴史がありますが、そこまで露骨ではなくても、巨大企業や大きな政治的権力によって、研究が巧妙に誘導されていることは否定できません。大学や研究者個人が、しっかりと自覚しなければならない時代になっている、と思われまます。

研究費の出所が特に問題になるのが、軍関係からの研究費です。日本では、日本学術会議が軍事研究をしない、と宣言していることもあって、軍事研究に消極的な大学が多数を占めているようです。日本でも戦前はふつうに軍事研究をしていたわけですから、日本学術会議が軍事研究をしないと宣言したのは、もちろん広島・長崎を含む敗戦の惨禍、加えて戦争に協力したという科学者の反省の上にたったのことでした。また、憲法9条の趣旨に鑑みても、軍事研究は認められない、という認識があったし、さらに、ポツダム宣言に「軍事を除く産業の復興を認める」という趣旨の文言から日本に軍事研究をさせないというのが連合国の意図でもあった、と推認されます。ポツダム宣言に「軍事を除く産業の復興云々」と入れられたのは、第1次世界大戦後ドイツが短期間に軍事大国になった理由がその工業力の強さゆえであった、という教訓を踏まえたものだ、と私は考えています。逆に言うと、1950年代から日本が工業を復興させるとき、近隣諸国から異論が出なかったのは、憲法9条に加えて日本学術会議の

宣言が軍事産業の復活に対する歯止めとなった、と理解されたのではないのでしょうか。

ところが現在は、軍事と非軍事との境界に線が引けないとか、軍事研究に積極的とかいう主張なされ、大学にとって軍事研究は微妙なテーマとなっています。大学が軍事研究をしないのは、たぶん世界中で日本だけだ、と思います。一方で、海外の大学や研究機関と連携し、あるいは支援するとき、とりわけ相手国が軍事政権であるとき、注意が必要です。長く続いている軍事政権下では社会の隅々まで軍の関与が及んでいるもので、大学だけが軍と無関係にいられるわけがありません。日本の大学が軍事研究に距離をおいていても、相手の大学は何の歯止めもなくやっけてしまいますから、協働する日本人教員が相手国の軍事研究に手を染めるということが起こりえます。それに大学間交流は相手国にとっては日本の科学技術情報を入手する、ひとつのチャンネルになるはずで、当該国やその同盟国の諜報機関がそのチャンネルを利用しない、とは考えにくいでしょう。知らず知らずに日本人教員が、相手国の諜報機関に利用され、また相手国の軍事研究に加担する可能性もないとは言えないのです。

日本国内では軍事研究に敏感な大学が、国際交流ではあまりこの点を意識していないように思われます。日本は脇が甘いという感じが否めません。

10. おわりに

以上みたように、海外の大学事情に照らして日本の大学や研究者を眺めると、ある意味で日本人はまだ「繭」に包まれて生きているようなところがあります。グローバル化時代にあっては、人間の自然状態についてホッブスが指摘した「万人の万人に対する闘争」に似たことになりかねません。とはいえ、人々はさまざまなネットワークの中で存在しますから、既存のネットワークも含めて、国境などの「繭」を越えたグローバルなつながりを通じた生活をするようになった、ということでしょう。

ごく乏しい経験ですが、過去 20 年ほど海外事情を見聞した結果、今の時代、大学も研究者個人もこれまでなしていたことを考え直す時期に来ている、前例にこだわっては取り残される恐れがある、と考えさせられました。どうすればよいかという処方箋を書くのは簡単なことではありませんが、やはり海外の事情をよく知って各校、各自でしっかりとしたポリシーを持って、自らを守りつつ積極的に活動することがますます求められている、と言うことはできると思います。

冒頭で HdB の設立理念が挑戦を受けている、と言いましたが、これから先どうなるか推し量りにくいグローバル化社会にあって、異文化を背景にする人がじつくりと議論し、人と人とのつながりを作ろうとするハウスの理念はけっして意味を失ったのではなくて、再定義することができる、と思うところです。

【OM 便り】

HdB での生活とその後

奥山 格

(兵庫県立大学名誉教授、1965OM)

京都大学の大学院在学中に新しく開館された HdB に第一期生として入塾させていただき、1年間を過ごしました。その1年は多忙ながらも HdB の理念のもと、ドマムートそしてコーラー先生と稲垣先生ご家族にもお世話になりながら、よい経験を積むことができました。しかし、有機化学実験系の研究室で学位論文を書くためには、徹夜実験も辞さないという研究室とハウスの生活を両立することに困難を感じ、残念ながら1年後に退寮しました。

学位取得後、大阪大学に職を得（のちに兵庫県立大学に転職）、1年後には、米国で勉強する機会を得ました。最初の1年間はテキサス西北部の大学でしたが、学外の民営の留学生寮で生活しました。HdB のように明確な理念をうたっている寮ではありませんでしたが、寮生は世界各国から来た大学院生あるいは研究生（ポスドク）が多く、夕食後の食堂では社会・教育・文化などが話題になり、HdB での生活を思い出していました。また、テキサスはバプティストを中心とする宗教色の強い州でもあり、クリスマスから年頭の時期には各家庭に招かれ、家族の一員として過ごすこともできました。お返しに日本の料理を作ることになり、“茶碗蒸し”を作った覚えがあります。この地域は川もなく乾燥した気候で、日本食として持ち込んだ海苔や昆布の佃煮がドライになってしまい、保湿して保存する必要があるほどでした。

2年目は、東北部のニューヨークの北1時間ほどの学園都市ニューヘブーンに移りました。ここではアパート生活でしたが、充実した研究生活に加えて、日本から来た英文学者や医学者の留学生家族と交流を持つことができました。英文学者とはニューイングランドの文学史跡巡りに同行したり、両親が招待されて留守になる家族の幼児の子守りを手伝ったりすることもありました。帰国の際には、医師の一人とロッキー山脈から西の大陸半横断のドライブ旅行を楽しむことができました。ここで出会った人たちとはその後もずっと交流が続いていましたが、それぞれ高齢で訃報を聞くことも多くなってきました。

過疎地の教育に関する本の出版

—「美山山村留学センター」を中心に—

村田翼夫

(HdB 評議員、Year Book 編集委員長、筑波大学名誉教授、19650M)

1. 過疎地の教育に関する本の出版

多くの過疎地は人口減少に伴い少子高齢化が進み、学校統合を余儀なくされています。中には限界集落と呼ばれるように村の存続が危うくなっているケースもみられます。過疎地の教育には問題が多いが、恵まれた自然環境における体験学習、少人数教育、学校と地域の協力などの良さもあります。このような過疎地における利点を再考して地方の教育を見直そうと考え本の出版を計画しました。それは、『過疎地の特性を活かす創造的教育—美山町（京都府）のケースを中心に—』と題するもので今年（2023年）1月10日に東信堂より出版されました。筆者が共編著者でした。

本書では、第1章第1節で長野光孝先生が、旧知井小学校を中心に美山町における学校統合の経緯と廃校の利用状況を記述されています。美山町では、2016年に5つの小学校が美山小学校に統合されました。第2節で山口満先生が、美山小学校のコミュニティ・スクールや美山学導入の意義と課題について論述されました。美山学では、特に子どもの主体性、探究心を重視しているとのこと。第3節で筆者が「美山山村留学センター」の特色について紹介しました。また、第2章で森隆治先生が、亀岡市神前地区におけるチョロギ村開発の経緯と、そこで実践されている薬草栽培と教育の関係について解説されました。第3章で久保田賢一先生が、「京都・久多で田舎暮らしを学ぶ」と題し、過疎地久多における大学生、通信制高校生の村留学やインターネット活用などを紹介し、山里での教育展開の可能性を示されました。第4章で上田学先生が「過疎における教育の疲弊と地域再生の課題」と題して、過疎地教育の全国的な傾向と課題を論じられました。

2. 美山山村留学センター

(1) 主な特色

次に筆者が担当した「美山山村留学センター」の特色について述べてみます。同センターは、1998年に美山町の知井地区に設立され、近くの都市（京都市や大阪市など）における小学校の留学生を受け入れました。年に約10名でした。そこでは、都会にいる家族と離れて1～2年間にわたり山村に滞在して知らなかった友達と共同生活を送っています。こうした山村留学センターは、1976年に長野県八坂村に「公益財団法人育てる会（青木孝安理事長）」の教育実践活動の場として初めて設立されました。1985頃にピークに達し2004年には実施校158校、留学生860人に及びました。2007年頃から減少しつつあります。

美山山村留学センターの主な特色としては、まず、多くの自然体験をできることが挙げられます。春には田植え、山菜取り、ジャガイモ掘り、夏にはホタル取り、川遊

び、山登り、秋には落穂拾い、キノコ狩り、冬には雪遊び、餅つき、そり滑りなどがあります。これらの活動を通して自然環境を守ることの大切さも学んでいます。

美山山村留学センターの全景また、里親制度も実施しています。各留学生は週に一度里親の家に一泊して家族と生活を共にしています。同センターは、基本的に社会教育機関として南丹市教育委員会の社会教育課の管轄下にあります。その運営は、知井振興会の協力の下に「山村留学センター運営委員会」が行っています。



美山山村留学センターの全景

(2) 意義

そのセンターの意義について考察してみました。

山村と都会の交流：都会の子どもが山村に滞在して、山村の子ども達と豊かな自然環境の下で生活し、子ども達は異質な友達と交流し合って活気づきます。最近、従来の地域による内発的発展に加え、山村と都会の交流、および外部からの援助に力点を置くネオ内発的発展を重視する傾向がみられます。この観点からも注目される活動です。

山村と都会という異質な環境で育っている子ども達が共同生活・学習を行うことにより新たな刺激を受けて両者が活気づきます。これは、外国留学生との共同生活を行う「京都国際学生の家」における共生の原理とある程度同じくするものでありましよう。

忍耐力、社会力の育成：家族と離れて行く他人との共同生活は、経験する子どもにとって緊張を伴います。新しい生活習慣、異なるルールに従い、新しい友達、指導員、里親の家族との交流などは、留学生に忍耐力や社会力を養うことになります。現在、子ども達に最も欠けているのは、社会力、協調性、寛容性などと言われます。いわば、このような生きる力を身につけることになればきわめて有意義な経験といえましよう。

自然体験と思考力、解決力の向上：自然との直接体験を通して自分自身の思考力、



留学生の田植え



留学生の川遊び

自立性、集中力、ならびに解決力を育てることになります。都会の子どもは、最近では、画像を通していろいろな自然のバーチャル体験を楽しむことができます。しかし、それは自分の体、心に響く経験ではありません。直接、生命や物に触れる体験を通して思考の基礎を築き、思考の葦を磨くことができます。さらに自然体験を通していろいろな課題意識が生まれ、その解決に向かう解決力が身に付きましよう。山村へ若者が集まる契機：留学生へのアンケートにおいて彼/彼女らは、センターの生活終了後も同センターを必ず訪問したいと答えていました。このように、留学経験やセンターへの保護者の訪問などは、都会の若者が山村を訪問したり、滞在したりする契機になると考えられます。

(3) 課題

同センターは、2022年で24年目を迎えています。澤田利通運営委員長の説明によれば、25周年に当たる来年3月で廃止されるとのことです。その理由を検討するとともに課題を考察してみました。

財政援助：センターでは、留学生が月に7万円の月謝を払っています。また、南丹市から年額約2千万円の補助を得ています。それは、施設設備の維持費、指導員や寮母への給与等に使用されています。その援助の継続が最近困難になっているそうです。以前に南丹市の教育長から得た情報によれば京都府に同援助の要望を出したが対応してくれなかったとのことでした。山村留学を地域に与える影響の大きさを考慮して財政援助を行うべきでありましよう。

指導員・寮母の育成：2名の指導員は常時勤務して留学生の生活指導や相談を行っています。寮母さんは、主に、食事や選択の世話をしています。その指導員や寮母が高齢化して後任を見つけにくくなっています。彼/彼女らの育成が求められています。

地域住民と留学生との交流：学校統合前には留学生は旧知井小学校へ徒歩で登校し、地元の児童との交流も盛んでありました。学校の教員も留学生の特色を考慮して指導に当たっていました。しかるに、統合された美山小学校へはバス通学し、地元の児童との交流機会もすくなくなっています。今後の地域の教育発展を考えると、地域の児童や住民との交流の拡大、小学校における留学生の特性に対する配慮が求められるでしょう。

情報の流布：全国的に山村留学センターは減少傾向にあります。同センターの利点である自然体験活動、人物を鍛える教育・生活指導、都会と農村との人材交流などの情報が広く流布していないのではないかと思います。各センターでは、ホームページを通してセンター活動について紹介しているであろうが、留学生の通う学校、その学校が存在する市町村や府県の教育委員会なども、もっとその良さを取り上げて情報を流布して存続に協力するべきと思います。

いずれにしても、残されるセンターの施設を利用して山村と都会の子どもや住民が交流する機会を継続発展するように工夫してもらいたいものです。

メテさんと日本語

西本太観（ニシモト・タイカン）
（同志社大学大学院文学研究科修、1971OM）

メテさんて、誰なのでしょう？

メテさん（トゥンジョク・A・メテ / Prof. Dr. A. Mete TUNCOKU）とは、トルコから来た留学生です。1970年10月から数年間、この京都「国際学生の家」のレジデントでした。京都大学法学部に外国人研究生として受け入れられて、大学院修士課程の2つのゼミに通っていました。1つは、指導教官である高坂正堯教授の国際政治のゼミです。もう1つは、田畑茂二郎教授が担当する国際法のゼミでした。

私は、韓国ソウル大学新聞大学院での留学を終えて、1971年4月、ここに入寮して、メテさんと出会いました。その当時の仲間としては、メテさんの他に、中山さん、岡川さん、平松さん、五味さん、永井さん、在日のリョさん、韓国のパクさん、チョウさん、香港のチャンさん、タイのクリサダさん、ミャンマーのコンニョンさん、アフガニスタンのアジュミさん、イランのエンシャイアンさん、フランスのノイバーさん、アメリカのウイックステッドさん、などの名前が、思い浮かびます。

当時は今とは異なり、男性寮でした。レジデント約30人のうち、日本人が10人、外国人が20人ほどです。コモン・ミールとして、月に1回、金曜日の夕食を全員そろって食べるのが、楽しみだったのを覚えています。その後で、イベントの企画や、その時々の問題などについて、ミーティングをしました。言葉は、すべて日本語でしたけれども、必要があれば、英語で補足しました。選挙で選ばれた5人が、チェアマンを中心としてチームを構成し、世話役を半年ほどやっていたと思います。

不思議なことに、男ばかりなのに、酒を飲んでも喧嘩などの暴力沙汰は、私が入寮していた3～4年の間、一度もありませんでした。私たち学生は、ほとんどが大学院生でしたし、「同じ釜の飯を食う仲」なので、親近感が沸き、目立った差別もなかったはずです。みんなで、卓球やバレーボールや玉突きなどをして、楽しみました。

さて、話をメテさんに戻しましょう。

私が入寮して2年ほどたったある日、メテさんが、「大学院のゼミで発表をしなければならぬから、日本語の下書き原稿をチェックしてくれないか」と、私に頼みました。

「僕じゃなくても、他に、たくさん日本人学生がいるだろう」と応えると、「いやいや、理科系の学生がほとんどなので、文化系の君に、文章を推敲してほしいのだ」と言います。

「そうか。僕で良かったら、喜んでお手伝いするよ」

そんなわけで、何度か日本語のチェックをしてあげました。またあるときは、原稿の日本語を、録音してほしいと頼まれたこともあります。それゆえ、カセットテープに、とちらないように、汗をかきながら、原稿を吹き込みました。メテさんは、「録音されたテープを、何度も聞いて、覚えたいのだ」と、とても熱心でした。

無事にゼミでの発表が終わった日、メテさんは、私を部屋に招いてくれました。飲み物とお菓子を出してくれて、

「これは、わずかだが、お礼の印だ」と、お金まで渡そうとします。

「そんなの、友達同士なのに、みずくさいよ」

私は、そう言ったものの、メテさんがあまりにも真剣なので、ついに断り切れずに、もらうことにしました。メテさんは、きっと、ゼミでの発表がうまくいったので、とてもうれしかったのに、ちがいません。

では、ここからは、メテさんが「土日基金」の援助で、2021年11月に出版した『トルコ共和国における日本語教育と日本研究の50年』という本を、紹介したいと思います。

この本には、全部でXVIII章あります。その中から、興味深そうな章を、いくつか選んでみます。

II. 初めて日本へ：1970年4月8日 大阪での日本語コース

III. 京都の生活、日本語を学ぶ努力

IV. トルコへの帰国 中東工科大学およびアンカラにおける日本語コース

V. アンカラ大学言語歴史地理学部日本語・日本文学科開設

VI. 帰国留学生会と土日基金の設立

VII. 中東工科大学外国語高等専門学校現代言語学科

VIII. チャナッカレ・オンセキズ・マルト大学における日本語教育

初代学長就任時の活動（1992年～1994年）

この大学に再び戻った後（2002年～2012年）

IX. エルジェス大学（カイセリ）日本語・日本文学科設置

XIII. ナムック・ケマル大学（テキルダ）文理学部日本語・日本文学科

XV. ハジ・ベクタシュ・ヴェリ大学（ネヴシェヒル）文理学部日本語・日本文学

科

XVI. アンカラ社会科学大学外国語学部日本語翻訳・通訳学科

XVIII. 個人で活動している日本研究関係者

この本を読むと、メテさんがどのようにして日本語を学んだのか、さらに、日本での留学を終えてトルコに帰国してから、どのようにトルコでの日本語教育活動をしてきたのかが、理解できます。

結論を先に言えば、メテさんは、誰も真似ができないほど、トルコでの第一世代の日本語教育者として、孤軍奮闘してきました。その熱意に対して、日本人の一人として、「アリガトウ！」という感謝の気持ちから、拍手喝采したくなります。

そんなメテさんも、ざっと50年前に、日本政府奨学金（文部省）の試験に合格したものの、日本についての知識は、サヨナラ、フジヤマ、ヒロシマ、ナガサキだけだったそうです。当時のトルコでは、日本語を学ぶ機会が全然なかったために、日本語はまったく知らなかったのです。

メテさんは、奨学金の条件により、日本での最初の半年間は、大阪外国語大学での集中コースで、初歩の日本語を学びました。会話、読解、文法など4～5時間の授業が、毎日ありました。非常に刺激的だったといえます。しかし、こんな程度の日本語能力では、大学院での授業には、とてもついて行けません。

実は、日本に留学する前は、研究は英語でやり、同時に日本語を学べばよいだろう、と安易に考えていました。ところが、指導教官の高坂正堯教授に相談したら、次のような助言があったといえます。

「京都大学の教育は、日本語で行われます。日本の近代化について研究するために、日本に留学に来たのだから、まず日本語を学ぶことが肝要です。これからの半年間、しっかり日本語を勉強してください。修士課程の入学試験は、日本語で行われますよ」

高坂教授は、アメリカのハーバード大学へ留学し、流暢な英語を話されました。

そして、この高坂教授の助言から、私は、ソウル大学新聞大学院での、自分の経験を思い出します。大学院の試験3カ月ほど前に、キム・キュファン大学院長は、こうおっしゃいました。

「西本君、君は日本人だから、日本語で受験してもかまわないよ。在日のJ君も、日本語で受験するからね」

私は、一瞬、ほっと安心しました。しかし、ここは韓国のソウル。日本ではありません。それゆえ、うれしい反面、ある種の自己責任を感じたので、こう答えました。

「先生、とてもありがたいですけども、私は韓国へ来たのですから、韓国語で受験させてください。お願いします」

試験の後で先輩たちに結果を聞くと、合格者の真ん中ぐらいだったそうです。（すみません！ ちょっと、自己宣伝になりました。）

ところで、メテさんとは異なり、その当時日本に来ていた、たとえば、中国や韓国だけでなく、アメリカ、ドイツ、オランダ、ブルガリアなどからの留学生は、それぞれ自分の国の大学で、すでに日本語を学んでいたといえます。トルコの大学では、西洋の言語に加えて、中国語、ポーランド語、シュメール語、ヒンディー語などは教えられていたけれども、まだ日本語は教えられていなかったのです。

メテさんは、それゆえ、以下のように考えました。

「日本での研究を無事に終えて帰国できたら、トルコの大学で日本語を教えることもできるだろう。そうなれば、将来、日本に興味のある若者は、来日前に日本語を勉強できて、私が悩まされた言葉の問題を回避して、最初から、自分の専門分野の研究に、専念できるだろう」

それから、メテさんは、文字通り必死になって、日本語の勉強を始めたのです。

毎朝、NHKのニュースをテープに録音しました。昼まで、その録音を何度も聴きながら、知らない言葉をローマ字でメモして、意味を辞書で調べて、ニュースの内容を理解しようと努めました。この方法で、政治、経済、文化など、さまざまな分野の単語を学んだのです。昼や晩のニュースも同様に録音して、聞き取り練習をしました。面白いことに、朝のニュースでは、25～30%ぐらいしかわかりませんでしたけれども、昼のニュースでは40～45%、晩のニュースでは60～70%ぐらい、理解できるようになりました。これは、メテさんの自信につながり、勉強にいつそう熱がこもったといえます。また、NHKのアナウンサーの日本語を聴いて、模範的な発音を身につけることができました。

さらに、もう1つ、日本語を学ぶ方法として、メテさんは、日本のあちこちへ短期の旅行をして、できるだけいろんな人々と触れ合って、対話をするように努めました。このようにして、話し言葉や生きた日本語を、身につけていったのです。

このような、メテさんの日本語学習方法は、日本人が外国語を独習するときにも、有効だと思います。

メテさんは、帰国後、トルコでの日本語教育と日本研究の基礎を作り、発展させることを決意しました。そのため、奨学金を節約したり、英語の家庭教師で稼いだお金で、「日本語の図書館」を作るための本を集め始めました。そのとき、2つのことに留意したそうです。

1つは、トルコでは、日本への関心は幅が広いから、多種多様な分野の本を収集すること。たとえば、日本語教育、各種辞書、歴史、社会構造、文化、政治、宗教、美術などです。

2つ目は、当時のトルコでは、日本語を読める人はほとんどいないので、英語で書かれた本を、優先して選ぶこと。

このような準備をしていたから、メテさんは、日本で博士号をもらって、1978年末にトルコに帰国して数年後に、約3000冊の個人図書館を、作ることができたのです。これらの書物は、メテさんが、最初に勤めた中東工科大学で、誰でもが自由に利用できるように、大学に置きました。メテさんが退職して、チャナッカに住むようになってからは、それらすべてを、アンカラの土日基金の図書館に、寄贈しました。現在も、基金の図書館で、誰でも利用できるそうです。

メテさんは、自分の後半生を、トルコでの日本語教育に捧げたといっても、過言ではないでしょう。もう一度、メテさんに、「アリガトウ！」と、お礼を言いたいです。

Friendships That Last

Jon Tamio Tanaka (USA)
(1985OM)

Last night I met three friends from HdB for the first time in more than 30 years since we were together. For the current residents of the House, it may be hard to imagine that the friendships you are forming now will last the rest of your life, but it's true! Of course, we laughed and enjoyed recollecting the "beautiful days of our youth" as Kyodai students in the House. In those days, it was all male and most of the residents were graduate students. We spoke fondly about the many conflicts and intense discussions we about such fundamental questions such as: "What is the definition of early morning?" For all residents, HdB was a rare chance to engage deeply with people from all over the world and discuss our cultural differences in a thoughtful and respectful way.

In the 1980s the Cold War was going full blast and international tensions were high – I remember the Chernobyl nuclear meltdown in which airborne radiation even came to Japan and the US space shuttle Challenger exploded mid-air. These horrible accidents occurring in the supposed "superpowers" questioned the infallibility of technology and our ability to manage complex technological systems without failure. On the bright side, Randy Bass and Kakufu led the Hanshin Tigers to a baseball championship!

During our conversation, we observed that the intense geo-politics of 30 years ago seem to be in resurgence. Today we see tensions between nations, as well as tensions within nations on the rise around the world. By the end of the evening, I was reminded of the HdB philosophy: personal encounter, dialogue rather than denial, and mutual respect rather than violent oppression. HdB endures as a place with hope for humanity! While no doubt times have changed tremendously, and current residents have their own experiences about what it means to live in the House. HdB's philosophy of "encounter" remains as important and relevant as it was 30 some years ago. Thank you to my friends of more than 30 years for reminding me of the lessons learned there!

HdB Performance Programs 2015–2021

Soraya Liu (ソラヤ・リュウ) (カナダ)

(京都大学人間・環境学研究科、2015OM)

It has been 3 years since I moved out of HdB, and there are 3 things starting with “p” which I miss the most: the people, the ping-pong, and the piano. The people and the ping-pong I have mentioned previously, but I have not yet written about the piano. HdB has two splendid pianos (an upright and a grand), and when I was living there you could hear me practicing almost every day. Over the years, my repertoire consists of 1 song by Mozart (Turkish March), 2 songs by Schubert (Moments Musicaux and Serenade), 3 songs by Beethoven (Für Elise, Pathétique Sonata 2nd Movement, and Moonlight Sonata 1st Movement), 4 songs by Chopin (Nocturne Op. 9 No. 2, Nocturne No. 20, Valse Op. 64 No. 2, and Fantaisie-Impromptu, which I am still working on), and 5 songs by Andrew Lloyd Webber from my favorite musical The Phantom of the Opera (Think of Me, Angel of Music, Phantom of the Opera, Music of the Night, and All I Ask of You) among others. Therefore, the yearly Thanksgiving and Christmas Party performances were a stage to contribute. Below I have compiled a list of all Thanksgiving and Christmas Party performances which I have taken part of, mostly as pianist, but also as vocal and dancer. Hope you enjoy the program!

As I was compiling the list, I recalled with nostalgia the many talented people in HdB whom I have met and collaborated with, the multiple rehearsals we have gone through before going on stage, and the joy we have brought to our audience. I hope you are all doing well. If you see your name written above, please drop me a message!

Thanksgiving and Christmas Party Performance Program (2015-2021)

Christmas 2015:

① “Take Five” by Paul Desmond (Piano Duet by Jennifer and Soraya) ② “Por Una Cabeza” by Carlos Gardel (Trio: Violin by Mana, Cello by Kosuke Onishi, Piano by Soraya) ③ “Colors” by Utada Hikaru (Bellydance Solo by Soraya)

Thanksgiving 2016:

① “I Will Follow Him” from Sister Act (Vocal by Julie, Natsuho, Judy and Soraya, Piano by Linca) ② “Let It Be” by The Beatles (Vocal by Alexander Van-Brunt, Violin by Mana, Flute

by Natsuho, Piano by Linca, Chorus by Julie, Judy and Soraya)

Christmas 2016:

①“Let It Go” from Frozen (Vocal by Jennifer, Gyonmin, Julie, Momoko, Judy and Soraya, Piano by Linca)

Thanksgiving 2017:

Thanksgiving 2017) “All I Ask of You” from The Phantom of the Opera (Christine by Natsumi, Raoul by Leroy Pfannkuchen, Piano by Soraya) ② “Edelweiss” from The Sound of Music (Vocal and Guitar by Alexander Van-Brunt, Flute by Kanane, Piano by Soraya, Chorus by Natsumi and Hikaru)



Thanksgiving 2018:

①“Think of Me” from The Phantom of the Opera (Christine by Gyonmin (English), Sandra (German) and Natsumi (Japanese), Raoul by Chi-Yen Liu (special guest), Piano by Soraya) ②“Angel of Music” from The Phantom of the Opera (Christine by Natsumi, Meg Giry by Gyonmin, Piano by Soraya)

Christmas 2018:

① “Pathétique Sonata” 2nd Movement by Beethoven (Duet: Flute by Kanane, Piano by Soraya) ② “Take Five” by Paul Desmond (Duet: Saxophone by Chiho, Piano by Soraya) ③“Christmas Song Medley” (Quartet: Flute by Kanane, Saxophone by Chiho, Trumpet by Kimiko, Piano by Soraya)



Thanksgiving 2019:

①“Op. 46 No. 8” by Dvorak (Piano Duet by Onno Hofmann and Soraya)

Christmas 2019:

①“Ave Maria” by Bach/Gounod (Duet: Flute by Kanane, Piano by Soraya) ② “Jingle Bells” (Quartet: Flute by Kanane, Saxophone by Chiho, Trumpet by Kimiko, Piano by Soraya)

Christmas 2021 (Joining as a guest):

① “Joy to the World” + “Jingle Bells” (Vocal by Stellah, Soumya, Hardik, Haku, Taito, Junya and Kazuki, Flute by Kanane, Piano by Soraya)

【ハウスペアレンツとレジデントより】

2022 年度 公益財団法人京都国際学生の家 Events List

HF 山本慶一

2022 年度に実施した事業を下記に記す。本来、これらの行事当番の学生からの報告書を掲載する予定で集めましたが、諸経費の高騰で行事しか掲載できなくなったのは非常に残念です。しかし、学生から提出された報告書は、後輩達が、今後の行事を行う際の参考となる貴重な記録として、保存し継承していく予定です。

☆1st Semester

| Date | | Event |
|--------|----------|-----------------------------------|
| April | 08(Fri.) | Welcome Party |
| | 22(Fri.) | Common Meal (CM1) |
| May | 13(Fri.) | Common Meal (CM2) |
| | 28(Sat.) | Sports Day |
| June | 10(Fri.) | Common Meal (CM3) |
| | 24(Fri.) | Common Meal (CM4) |
| | 25(Sat.) | Public Forum by Old Member Club |
| July | 08(Fri.) | Common Meal (CM5) |
| August | 07(Sun.) | International Food Festival (IFF) |
| | 08(Mon.) | Big Cleaning Day |

☆2nd Semester

| Date | | Event |
|----------|----------|---------------------------------|
| October | 07(Fri.) | Welcome Party |
| | 21(Fri.) | Common Meal (CM1) |
| | 30(Sun.) | Japanese Garden & Mini Workshop |
| November | 04(Fri.) | Seminar & Common Meal (CM2) |
| | 19(Sat.) | Thanksgiving Day |
| December | 2(Fri.) | Common Meal (CM3) |
| | 10(Sat.) | Trip |
| | 17(Sat.) | Christmas Party |
| January | 13(Fri.) | Common Meal (CM4) |
| | 21(Sat.) | Big Cleaning Day |
| February | 17(Fri.) | Common Meal (CM5) |

Four months in Japan

Esther Holtshulte (ドイツ)

NCC Center for the Studies of Japanese Religions

‘It is hard to make friends as a foreigner in Japan’ is something you hear and read a lot when you start researching being a foreigner in Japan. Thankfully, there is Haus der Begegnung to help with that.

I was able to live here as a student of the NCC Center for the Study of Japanese Religion since September 2022. And since almost all of my classes consist of an entirely German peer group, living here has been a great opportunity to get in contact with other students. During my time here, I was able to make friends from Japan who occasionally challenged me to try saying something in Japanese as well (I am only a beginner), from Uganda who shared some of their cooking skills with me (most important ingredient: love), China, the UK, the USA and so many more places from all over the world.

Not only did we enjoy a wide variety of different foods, cleaned up the garden together, and learned how to make Matcha tea, but we also helped each other in everyday life. Living together as a community is also about the little things: someone explaining to you how to order tickets at a Japanese cinema, someone showing you their favourite clubs & bars or telling you about other student dorms' parties, someone offering help when you are sick. Being in such a welcoming and caring community definitely will be part of why I will miss Kyoto so much when I have to leave again in January.

But Kyoto itself is also beautiful as well. Maybe it is because the autumn leaves are appreciated more here with all the night illuminations and special momiji watching spots, maybe it is because so many of them are golden and red instead of just brown, but the beauty of the city impresses me again and again. Usually, autumn is my least favourite season, but here wherever I go I sometimes just look around for a while and admire what a beautiful place it is.

I also especially like the neighbourhood HdB is located at: you can get all the essentials you need and have good public transportations nearby while it is as quiet as a small and peaceful village.

So I am really thankful to have been able to live in this part of the city in such a special student dorm and hope that many more people from all over the world will be able to experience this welcoming community.

Social Injustice, False Narratives, Media, Targeted Biases and Global Politics!

Hardik Tankaria (India)

PhD student (Mathematical Optimization) Kyoto University

I am writing my thoughts on society based on observation of the current geopolitical situation, global politics, geographical factors, and history.

“Where are you from?” The moment you tell your country, the questioner has predefined beliefs on your country based on their educational system, media, propaganda and narratives. For example, in the case of India, stereotypes of “Caste, Cows and Curry”! However, as an Indian, de facto ancient India is the Oldest and richest civilization on this planet (For ex. Harappan civilization - 9000 BCE, from Buddhism in east Asia to Angkor Wat in Cambodia,

and Bamiyan Buddha in Afghanistan to Ganesha in Thailand) which is a perfectly organized culture and is based on science. Foreign rulers tried to invade India around 200 times, and British colonizers ruled India for about 200 years and looted India about 45 trillion US dollars in today's money (**Currently, US GDP is 23 trillion**). Britishers killed 165+ million unarmed Indians during 1880 to 1920 (in just 40 years), imagine the total number of killings in 200 years. 29 million people died from starvation despite having food but sent from India to the port of England and stealed countless raw materials. Even today, you can regularly see biased media which continuously show the negative and ONLY negative side of India. Still some Indian people face racism and discrimination. One or the other way, most people try to make Indians feel inferior despite the fact that India has produced the most successful CEOs (Google, Microsoft, IBM etc), engineers and doctors in the developed countries. One of the profound reasons is that Indian people are forgiving, and accept everyone as they are, without differentiating them based on skin, ethnicity or their religion. For example, India has accepted everyone who was being thrown out due to atrocities or seeking refugees! Jews, Parsis from Iran (Zoroastrianisms) and many more. India believes **“the world is one family”** (*Vasudhaiva Kutumbakam*).

Anyway, the economy remains the only important part in society and politics. Certain developed economies have hegemony so they exploit others and make them a puppet state. For example, using some country's unlimited natural resources while being biased towards developing countries. Being a developed country, it is easy to use the media to impose their own values and mindset on developing countries, creating false narratives, and cultural imperialism. Specifically, foreign interventions in the middle east to fulfill strategic plans through man made military conflict or more specifically using “Hawks” technique!

Last year, we saw many countries have stored 5 to 6 doses of COVID-19 vaccine per person, whereas some African countries have left on god end! Clearly, WHO failed and took too much time to react.

For the last two decades a developed country had some conflict in a part of central asia, no developed country took any interest to resolve the conflict. However, when a similar situation occurring in eastern Europe, the world is going through inflation, currency depreciation and highly manipulated oil prices. I am so surprised that only humans were suffering in both conflicts but the value of certain parts of humans is more. Moreover, exposing the hypocrisy of purchasing gas but not allowing a country which has 7 times less per capita income to purchase oil, and then discriminating and isolating globally. Why can't we treat everyone **equally?!** Clearly, the United Nation (UN) is no longer reliable. Hope **G4** can get a permanent seat in UNSC.

In this era, a common man can easily analyze the current scenario based on the bitter history. We all need to digest the fact that this is no longer a unipolar world, it is a multipolar world. We better start treating everyone equally.

This world would have been a better place if wise and learned ones were not silent on injustice!
-Hardik Tankaria

For the HdB, I am extremely delighted to be a part of HdB. I met wonderful people and made good friends. Andy is the first person who left an impression on me. He introduced me to Japanese sento culture, shared some history of Japan and became good friends. My face lights up whenever I meet Haku, Shun, Stellah and Noah (my hot sauce) and feel a positive vibe. I have made so many memories, celebrating birthdays, going to Mt. Daimonji, Biwako, Camping, Ice skating, dinner, trip, sento, running alongside Kamo river, watching movies, cooking, Chinese restaurant, etc. Yuri is a really kind and nice person who taught me introductory Japanese, and cooks really delicious food. I can't forget when shun came to the hospital with me when I had a fever. We were lucky to have such nice house parents and we had been served delicious food whenever we met house parents. Hibiki, Marina and Kazuki are really funny and they are always happy and energetic. There are many residents that I haven't spent enough time with and got close to, but I am sure they are also lovely people and hope to make some memories with them before I leave the dorm.



Finally, I want to tell every resident that I hope all your dreams come true and I wish we will have a HdB reunion someday and we all will meet with the same energy and enthusiasm.



現在の地政学的状況、世界政治、地理的要因、歴史などを観察した上で、社会に対する私の考えを書いています。

“出身はどこですか？” 自分の国を言った瞬間に、質問者はその国の教育制度、メディア、プロパガンダ、物語に基づいて、あなたの国に対するあらかじめ定義された信念を持つこととなります。例えば、インドの場合、「カースト、牛、カレー」というステレオタイプ！？しかし、インド人としては、事実上、古代インドはこの地球上で最も古く、最も豊かな文明である（例：ハラッパー文明 - 9000年）。東アジアの仏教からカンボジアのアンコールワット、アフガニスタンのバーミヤン仏、タイのガネーシャまで）、科学に基づいた完璧に組織化された文化である。外国の支配者は200回ほどインドを侵略しようとし、イギリスの植民地支配者は約200年間インドを支配し、現在のお金で約45兆ドル（現在のアメリカのGDPは23兆円）を略奪しました。イギリス人は1880年から1920年までの40年間に非武装のインド人を1億6千5百万人以上殺害しています。インドからイギリスの港に食料が送られ、無数の原材料が盗まれたにもかかわらず、2900万人が餓死した。今日でも、インドのネガティブな面ばかりを紹介する偏向報道を定期的に目にすることができます。インド人の中には人種差別を受ける人もいます。インドが先進国で最も成功したCEO（グーグル、マイクロソフト、IBMなど）、エンジニア、医師を輩出しているにもかかわらず、一方ではインド人に劣等感を抱かせようとする人がほとんどです。その理由の一つは、インド人は寛容であり、肌や民族、宗教で区別することなく、誰でもありのままを受け入れてくれるからである。例えば、残虐行為で追い出された人や難民を求める人を、インドはすべて受け入れてきたのです。ユダヤ人、イランからのパールシー（ゾロアスター教）、その他多数。インドは「世界は一つの家族」（Vasudhaiva Kutumbakam）と考えています。

とにかく、社会と政治の中で経済だけが重要であることに変わりはない。特定の先進国が覇権を握っているため、他国を搾取し、傀儡国家にしている。例えば、ある国の無限の天然資源を利用する一方で、発展途上国に偏重している。先進国であるがゆえに、メディアを使って自国の価値観や考え方を途上国に押し付け、誤った物語を作り、文化的帝国主義を行うことが容易である。具体的には、人為的な軍事衝突を通じて戦略的計画を実現するために中東に介入すること、もっと言えば「ホークス」のテクニックを使うことです。

昨年、多くの国が一人当たり5-6回分のCOVID-19ワクチンを備蓄しているのを見ましたが、アフリカの一部の国では神頼みのままになっていました。明らかに、WHOは失敗し、対応に時間がかかりすぎた。

過去20年間、ある先進国が中央アジアの一部で紛争を起こしたが、どの先進国もその紛争解決に関心を示さなかった。しかし、東ヨーロッパで同じような事態が発生したとき、世界はインフレ、通貨安、高度に操作された原油価格を経験することになる。どちらの紛争も人間だけが被害を受け、人間のある部分の価値がより高いことに驚きました。さらに、ガスを購入しても、一人当たりの所得が7倍も少ない国には石油を購入させないという偽善を暴き、世界的に差別し、孤立させる。なぜ、みんなを平等に扱えないのか！？明らかに国連（UN）は信頼できなくなった。G4が国連安保

理の常任理事国入りを果たすことを願っている。

この時代、庶民は苦い歴史から現在のシナリオを容易に分析することができます。もはや一極集中ではなく、多極化していることを理解する必要があります。すべての人を平等に扱うことを始めた方がいい。

賢明で学識ある者が不正に対して沈黙していなければ、この世界はより良い場所になったはずだ！
-ハーディク・タンカリア

HdB にとって、私は非常に喜ばしいことです。素晴らしい人たちに出会い、良い友人もできました。アンディは、私に最初に印象を残した人です。彼は私に日本の銭湯文化を紹介し、日本の歴史を共有し、良い友達になりました。ハク、シュン、ステラ、ノア（私のホットソース）に会うたびに顔が明るくなり、ポジティブな雰囲気を感じることができるようになりました。誕生日のお祝い、大文字山、びわ湖、キャンプ、アイススケート、ディナー、旅行、銭湯、鴨川沿いのランニング、映画鑑賞、料理、中華料理屋など、たくさんの思い出を作りました。ユリは本当に親切でいい人です。私に日本語入門を教えてくれたし、本当においしい料理を作ってくれます。私が熱を出したとき、俊さんが一緒に病院に来てくれたことも忘れられません。こんな素敵なハウスペアレンツがいてくれて、ハウスペアレンツに会うたびにおいしいご飯を食べさせてもらって、幸せでした。響さん、マリナさん、カズキさんは本当に面白くて、いつも楽しくて元気なんです。まだ一緒に過ごして親しくなっていない寮生もたくさんいますが、彼らもきっと素敵な人たちだと思うので、寮を出るまでに一緒に思い出を作りたいと思っています。

最後に、寮生の皆さんへ、皆さんの夢が叶うことを祈っています。そして、いつか HdB の同窓会が開かれ、同じエネルギーと熱意を持った仲間に出会えることを願っています。

イヤーブック

黄 弋粟（中国）

京都大学・大学院生

HdB を承知したのは今年の年初です。研究室の先輩から、「京都国際学生の家」という学生寮が学校の付近に存在するのをご存知ですかと聞かれた。ちなみに、先輩と結婚相手は、HDB で知り合ったのです。ちょうど私も引越する予定があるから、早速申し込みました。

あれは3月の下旬だと思います。引越し会社を通じて荷物を駐車場に届いてくれました。安価な中国人引越し業者なので、階段登りの搬送するのは抜きです。そんな気まずい時、助けてくれたのは、先輩二人と、寮から続々現れてきた水谷内さんと寮生さんです。みんなが熱心に助けてくれたため、引越しは順調に終わらせました。

HdB では、目まぐるしいほどのイベントと活動が設けられています。二週一回のコモンミールが一番 HdB っぽい活動だと私は思って、計二回の当番と三回のヘルパーを担当してきました。自国の食べ物を作ると同時に、異国のそれを体験する自体は、一

種の国際交流に違いありません。日本に来てからもうすでに2年を経たのに、単に食物という分野においていろんなカルチャーショックと出会い続けるのは不思議だと感心しながら、文化体験の勉強として受け取りました。

「国際食べ物祭り 2022」(International Food Festival)は、夏休みの間において、京都国際学生の家ロビーと庭で開催されました。自分で楽しむほかのイベントとは違って、HDB が所在するコミュニティの「いつからでも支持と理解をいただくことに感謝の意を申し上げる」ために開催された IFF は、特異な存在と言えるかもしれません。

企画の発足からイベントの終わりまで、一ヶ月ぐらいかかりました。私が務めてきたのは企画職と宣伝職でした。企画については、先例を参考しながら、当番の王さんやミウさん・リナさん、そしてオフィスの水谷内さんと HP の夏子さんなどとともに色々な企画案を考え、討議してきました。また、宣伝においてオフィスと HP はだいぶ分担してくれました。王さんが上手に考えて作った綺麗なポスターを持ちながら、聖護院東町を拠点とする HdB のネイバーにある数十軒の住家とお店を一軒一軒訪ねて宣伝することにはまだ印象深いのです。本番の IFF では、私は韓国(中国人であるのに)のグループに入ってヤンニョムチキンとキンパを作りました。

HDB で開催されたイベントを除き、寮生や元寮生と一緒に登山したり、餃子を作ったりするなど幸せな思い出も残りました。そんな由緒深くて神秘的な「組織」と出会ってよかったとは、ずっと感銘しています。

ただし、学業と仕事が繁忙になる後学期に入ってから、ちゃんとイベントを楽しめたいとは思ったのですが、意余って力足らず、参加できなかったのが残念極まりありません。

あつという間に過ぎた 2022 年

祝迫美羽(日本)

京都大学・経済学部

私にとって 2022 年はやりたいこと、気になったことには挑戦し、友達ともたくさん遊び、忙しくもとても充実した一年でした。その中で今年一つテーマになったことを挙げるとすれば「世界との出逢い」です。今年の一年は“海外”にたくさん触れられた一年でした。

まずはなんといっても HdB。1 年を通して、HdB を縁にして素敵な出逢いをたくさんすることができました。この一年は、CM のご飯やその後の飲み会(?)、そしてイベントを通して、たくさんの人といっぱい話し関わることができ、HdB の素敵さを改めて実感する一年でした。レジデントに加え、ロシアから来ていた研究者の方とおしゃべりしたり、HdB の OB のオランダ人とたくさんお酒を一緒に飲んだり、ワールドカップをたくさん色んな国の人とみたりと、HdB に居たからこそ得られた素敵な出逢いがたくさんありました。またこの一年は特に、英語を主に話すレジデントがたくさん入ってきてくれ、昨年に比べて英語を使う機会がとても増えました。今まで HdB

にいてもみんなの日本語力に甘えてほとんど英語を使って話してこなかったため、当初はとても緊張しましたが、拙い英語でもみんなが笑顔でたくさん話してくれました。英語力だけが重要なのではなく、伝えようとして一緒にたくさん話すことで仲良くなれるという気づきを得られた一方で、伝えたいことを 100%伝えられないもどかしさも感じ、もっと英語力を伸ばしたいと思う機会にもなりました。HdB のおかげで幼い頃の「世界中に友達を作る」という壮大な夢に、気づけば近づいている気がします。HdB での時間は私の宝物です。

次に韓国。2022 年の 9 月の初頭に高校からの友達と深夜テンションで 9 月末に旅行することを決めました。私は友人の影響で、大学に入ってから韓国ドラマや kpop にハマリ、韓国にとっても関心を持ちました。勢いで決めた三泊四日の弾丸旅行で、たくさんハプニングもありましたが、タイミングが良かったり現地で素敵な人に恵まれたりしたおかげで、本当に素敵な思い出をたくさん作ることができました。韓国で最も印象的だったのは、韓国人の英語力と日本語力です。ある程度英語で通じるだろうと思って渡韓はしましたが、想像以上に本当に英語ができる方が多く、話すスピードが速すぎて自分の英語力に落ち込むほどでした（笑）。また何より驚いたのは、日本人だと分かると日本語で話しかけてくれる方もとても多かったことです。韓国語が話せる日本人より、日本語が話せる韓国人の方が多いのではないかなと感じました。もちろん英語で意思疎通はできますが、日本語で話しかけてもらえるとやはりとても嬉しく、その国の言語をしっかりと学ばなければいけないなと感じました。

そしてアメリカ。2 月に SJEC というスタンフォード大学の学生とオンラインで交流するプログラムに参加したり、9 月からは KCJS というプログラムで同志社大学に留学に来ているアメリカ人の日本語ボランティアに参加したり、AYC というアメリカの大使館が主催しているプログラムに参加したりと、2022 年はアメリカに関わる機会に恵まれました。一つ一つのプログラムで良い経験ができ、アメリカの良さに触れられた気がします。2023 年の 9 月からはアメリカに交換留学する予定なので、それまでもっとたくさん知っていききたいなと思います。

2022 年は本当に心の底から「楽しかった」と言える一年でした。2023 年は学び、成長できる一年にしたいです。来年のこの時期にまた「今年も良い一年だった」と振り返られるよう、一日一日を大切にしていきます。



My first few months at HdB

Jack Crawford(the U.K)

Kyoto University, Graduate School of Economics

I arrived at HdB in September, but it feels like I've been living here for years. The people I've met have been so welcoming and it has enabled me to settle into my new life in Japan well. I've always had an interest in other cultures and coming from the UK I'm very fortunate to live in a very multicultural country, therefore the HdB was I believed would continue to expand my understanding of other cultures, and I have been able to meet people from all around the world since moving here, from Madagascar to China. I've really enjoyed the common meals as they're a chance to express one's own culture and country beyond words, whilst other events such as the gardening day have built our friendships through teamwork. Moving to Japan has been mentally tough, as I've had to adapt to a country that is completely different to the UK. However, no matter how hard my day has been I have always been able to find solace in the HdB, as I know it is somewhere I can relax and ask questions to friends that have also experienced the stresses of moving country.

Thank you HdB, and I look forward to the next couple of years!

頭の中に思い浮かんだもの

仇 宏暄 (中国)

京都大学人間環境学研究所

新型コロナウイルスの流行と大学院における厳しい実験に耐えながら、私は日本で2年間を順調に過ごしました。私は母国である中国で修士号を取得しており、今は博士課程で光触媒について研究しています。当初、光触媒は環境をより良くするための存在であると思っていましたが、今ではエネルギーを生み出し、炭素循環を完成させるために使われているという認識を持っています。特に環境とエネルギーは世界の2つの主要な問題であり、平均台の上の重りのような存在となっています。私は2年前までは研究室で午前2時まで実験をしていたのですが、最近はそのペースを徐々に落とし、実験の結果をまとめたり考察したりすることに集中しています。

ところで私が HdB に来たのは2年前のことですが、その当時と今の雰囲気はまったく異なっています。2年前は寮生が少なかったのですが、今ではすっかり過密状態となり4階にいたってはほぼ満室という状況になっています。人間関係の構築が苦手な私にとって、これは青天の霹靂といえます。

一方で2年前の京都全体の様子を思い返してみると、新型コロナウイルスが流行していたため全体的に人通りも少なく静かな雰囲気だったように思います。しかし最近の観光の自由化の影響により、再び観光客で賑わう風景が戻ってきました。そんな2年間を、京都の木々はじっと見つめていたように思います。木々は決して動かないけ

れど毎年、桜やもみじの色は毎年気温の変動に合わせて変化を遂げます。生え変わらないけれど、季節の移り変わりを人々に伝えるかのように春から冬を行き来します。その様子を見ていると、不思議と孤独や退屈さが和らぐような気がします。

しかし最近、将来への不安や現実に対する無力感が抑うつ元凶となり、頭の中が不安でいっぱいになることが多いです。特にこのエッセイを書いている2日間は天候が急変しめっきり冷え込み、京都全体が初雪の到来を待っている状態にあります。雲が晴れ、再び京都で桜を見ることができると今から心待ちにしています。

Lightning-The time passed too fast, my 2-years-HdB life-

Kenta Ando (日本)

Department of English literature Doshisha Univ.

Hello beautiful people, this is my diary of 2022 in my life of HdB. This year is full of exiting, happy, stimulating, dramatic memories. Thank you for making me such a nice memory! In 2022, we had lots of new residents, and new house parents. Like this, many situations changed so I will look it back in this yearbook.

In this April, Natsuko san and Keiichi san came into HdB. And everything was changed! First, our room sealing light became new one and it is so blight! In addition to this, we can control of its brightness using remote controller! Wow amazing!! My quality of HdB life improved dramatically. Next, we got a post box! Oh, so useful, thank you so much!

In spring semester, I did accountant as toban. What I did is just buying new printer :) So dear residents, please use it carefully because this is my fortune! In April, I was so busy on job hunting, but there were many coworkers in this dormitory, especially Kazuki san thank you for teaching me, and training me how to do interview! In June, Max from Russia came into, he was my first Russian friend, and sento friend. I hope you are doing great in Russia. We did Yoga with Haku, Rina, Hibiki, and Noah and we said let's keep every day! But you know it lasted 3 days or so. :)! On July 15th we went to Gion festival, actually, I was absent my club activity because of sleep over, and enjoyed festival, that was very thrilling night! In summer vacation, we went to camp! That was so nice camping ever! In August, we had IFF! Lots of neighbors and OM came! And Mizuyauchi-san's baby Omi-kun was so cute! I think he will be a good actor in future. In September, Florian came from Polish! And 5 people from Germany also came into! Sabine, Luca, Arne, Vincent, Esther. They are learning about theology, so I could learn lots of form them about region. And Sabine, you teach me "nothing too late, we can challenge new things how old we are!" I want to be like you when I get older, I keep challenge new things! So, from Autumn semester, lots of people came into HdB and our life became more vivid! The welcome party was so nice, after the party, we went to Karaoke-bar "BARCODE" that was so exciting night! On thanksgiving party, me, Rina, and jack made Apple scramble, the traditional UK desert, that was so delicious. I performed piano with Ren

and Luca sing “Champs-Élysées” That was my first-time piano performance, and it was so fun! And master Natsuko taught me really kind, thank you! :) In November, we had world cup game! Japan vs Germany was such a nice game! I became sleeping disorder because of these matches. In December, we went to Wakayama trip! I was toban of trip, but I Enjoyed trip so much that I forgot my schedule haha. Junya fall into groove was highlight of this trip! On Christmas party, that was also amazing! Me, Haku, and Ren played the piano “It’s a small world” It was difficult to play by 3 people! But we did it almost perfectly! Maybe! I enjoyed secret Santa too! Lots of guests also came and enjoyed!



Looking back on this year’s activities, full of memories of meeting new things. I am grateful for seeing you guys in this dormitory. I think the life is like a train, it means that nobody knows each other and came into same train car coincidentally. And get off the train on each station. Our destination is deferent for deferent people. Someone will leave to study abroad, someone graduate university, someone keep living HdB. We just have lived for 1 or 2years on the same train car by chance from all over the world. But I feel sure that I was luckiest boy in the world to live here with all you HdB family. I love HdB life, no loneliness, lots of fun, so I feel so sad to leave here end of this semester :(It beyond my description to express feeling of thankfulness. This HdB life was full of memories and past too fast like lightning. Thank you for meeting!! Goodbye and See you!! Your BFF, bro, Andy :)



僕と HdB

久我 英（日本）

京都大学総合人間学部

皆さんこんにちは。京都大学総合人間学部の久我英と申します。今年の4月からHDBに住んでみてこの寮とは不思議な縁があったように感じており、この文章ではざっと僕のこれまでの半生と今の僕の興味について紹介したいと思います。

僕は生まれは栃木県ですが、父の海外赴任によって4歳から7歳までをドイツで、その後9歳までをイギリスで過ごしました。ドイツでもイギリスでも現地校に放り込まれ濃密な（大変な）異文化体験をしてきました。海外での経験はまだ具体的に言葉で表すことがまだできませんが、僕の人生にこれからも通底するであろう問いのようなものをもたらしたのだと思います。

日本に戻ってきてからは何とか大学までは順当に進んだものの入学早々再び放浪の時期へと突入してしまい、休学して木工の専門学校に通うなど様々な経験をしました。紆余曲折を経て今年の4月から復学することに決め、新たな住まいとして選んだのがこのHDBです。1, 2回生（5年以上前）の頃から前の道を良く通っていたので、この寮の存在は前から頭の片隅にありましたが当時は住むことになるとは全く思ってもいませんでした。

現在僕は大学で文化人類学を学んでいます。僕は昔から工作、ものづくりが好きで様々な職人に会ったり学んだりしてきました。また沖縄の古い空手や日本泳法といったちょっと風変わりな趣味にもものめり込んできました。このような雑多な経験を僕が大学で活かせるのは文化人類学しかないと思い専攻を決めました。文化人類学という枠組みのなかではじめて、幼少期を海外で過ごしその後日本に戻ってきたという経験を少し言語化できるようにも感じています。

いかにグローバル化や情報化が進もうと、やはり文化というものは存在するのだという思いが僕にはあります。それは3ヵ国でそれぞれ様々な苦楽を味わい、日本でも大学以外の色々な業界で色々な人々と交流を持った経験からくる実感なのだと思います。そしてそれぞれの場所でこれから何年もかけて消化していくような滋味深い経験ができたことが、僕の大切な糧であると感じています。



僕にとって、フィールドに出て、参与し、その経験を何とか言語化するという泥臭い文化人類学の営みは恐らく合っているのでしょう。このHDBも僕にとっては、そのようなフィールドであり挑戦だと思っています。これからは皆さんにはお世話になると思います。末筆ながら何卒よろしく願いいたします。

HdBでの二年間

黒田 旬（日本）
放送大学教養学部

今年はHdBで生活する2年目の年でした。

去年は新寮生として慣れないイベントやルールも多くほかのレジデントに教えてもらうことも多かったです。またコロナの制限もまだ残っていました。

しかし今年にはコロナの制限も緩くなり、IFF や感謝祭など大勢の人を招待するイベントも多くなりました。

オフィシャルなイベント以外にもみんなではいろんなところに出かけました。

8 月にはキャンプにいったほか、琵琶湖には夏休み期間何度となく泳ぎに行ったのを覚えています。

後期はチェアパーソンとしてイベントの調整やハウスが楽しく快適に過ごせる場所になるように試行錯誤をしています。

9 月には新しいレジデントを交えて BBQ をしました。

後期には入国規制が緩和されたことで新たにドイツ人、イギリス、マダガスカル、タイからレジデントが入寮し、いままでより一層国際色豊かな HDB になりました。

今までは週末は三条のクラブや熊野寮のパーティーに出かけたりとオフィシャルなイベント以外でも遊ぶ機会が増え、11 月から始まったワールドカップではプロジェクターを出してきてみんなで観戦しました。

以前住んでいたレジデントが HDB に遊びに来たことも幾度かあり、つながりの強さを感じます。

さて HDB で 2 年間生活してきたたくさんの楽しい思い出があります。

また hdb の生活については多くの方がプラスの面を書くと思います。

そこで逆に自分はこの 2 年間感じた難しさをあえて書きたいと思います。

たとえば何か問題が起きた時の解決方法は HDB の場合ハウスミーティングでの話し合いです。お互いに十分議論を尽くして妥協できる点や解決策を見つけます。

しかし自分が 2 年間住んでいた中で感じたのはこの解決方法は人により得手不得手があることです。自分はどちらかというと思ったことをそのままみんなの前で普通に言える人タイプですが、一方言いたいことはあるけど言えない。そんな人もいます。もちろん HDB としては話し合いで解決するのがルールであるわけですが、それが得意でない人をいかにサポートしていくのも今後の課題だと思います。今期は Google フォームで事前に投票できるようにしたり匿名でも意見を上げやすいようにしましたが、今後も方法を探っていく必要があると感じました。

Yearbook- Luca Cremer

Luca Kristin Cremer, Germany

Interreligious Study Program、NCC Center for the Study of Japanese Religions

I am Luca from Germany, 24 years old and I stayed in Japan from September to February. I study Catholic Theology in Bonn (Germany) and I came to Japan to learn more about Japanese Religions. I was one of the Germans of the German Group that participated in an interreligious

study program of the NCC (National Christian Council) Center for the Study of the Japanese Religions.

Wow, it has been such a good time here in Japan and I am truly thankful for every moment. If you'd ask me to summarize the life in the HdB this last semester, I would say the following:

The beginning of the semester was quite busy and intense: We went out quite a lot and enjoyed Kyoto's warm days and nights. After a lot of very warm autumn and early winter days, it suddenly got colder and I learned to appreciate the good isolation of German houses. Some weeks earlier I was still wondering why former residents told me to bring very warm clothes to Kyoto but at this point I was really happy about my winter jacket. With the colder weather, it became also a bit calmer in the HdB, which doesn't mean that we had less fun.

As an exchange student you try to make the best out of your time and thanks to the HdB I succeeded in that. I am sure I will forget a lot of moments but I want to give you an impression: I played ping-pong, tennis and billiard, I went skating, I did my own pottery, we had some crazy party nights, chilled movie nights, I had the opportunity to go to karaoke, in the cinema (Black Panther and Avatar 2!), to a Bruno Mars concert, I enjoyed the Common Meals and all the other times I didn't have to eat alone, I was co-host of some morning sport sessions (no boring workouts but a fancy dance workouts! At this point I kindly want to thank my other co-host), I went shopping in fancy second hand shops, we had a successful thanksgiving event, I organised a very lovely Christmas party and experienced new year together with friends in Japan. Not to forget the spontaneous trip to the Biwa Lake to go swimming there in the night.

When I first arrived at the HdB, I didn't have so many expectations. In fact, I was a bit anxious and nervous. Meeting new people is exciting but also challenging for me. I always try to be myself but in the same time, I want to fit in and belong to the group. The day of our arrival, me and the rest of the German group, we arrived quite late in the evening. But that didn't stop anyone here to provide us a warm welcome. Housemother cooked dinner for us and we ate together with her and some of the residents. Some days later there was a Welcome-BBQ that was organised for us. From the first day on, I felt accepted just the way I am and my worries became more quiet from day to day, from week to week. I got more and more used to the rhythm of HdB life and soon I felt as a part of the group. When I came home, I often would just go to the lobby to see if someone was there, me or the other resident would say "Hi, how are you? How was your day?". A simple action, but one that has the power to change so much.

And now, almost in the end?... It feels like home. A home, that is thousand of miles far away from my actually home country, filled with people from so many different countries. I believe, this is something special. For me, personally, the time in the HdB was not only about having fun but also about rediscovering and finding pleasure in a lot of small things. With all these activities and events we planned and that took place, with the time we spent together and with all the possibilities in the house to spend our free time (such as instruments, sport equipment, electronic devices and games), I was able to heal from a bit more difficult time I had the months

before I arrived in Japan. In the future, I would like to continue some of these activities and I generally want to be more active. I had the chance to make the experience how all these things (especially living in a community with such a welcoming atmosphere) brought more joy and positivity to my life. That was something I really needed. Thanks to all of you!

Sometimes I am not sure if it is really the concept of the house that made this semester to such a good time or if it is simply because of the people. I guess the fact that all the years before, residents wrote about their similar great experience in their own yearbooks (I read some of them) shows, that it was not only luck to have such kind residents this year but also the concept of this house that can lead to such a positive atmosphere. In the end, it is maybe a bit of both. I can't find a final answer to this question, but what I know for sure:

I had a really good time and I am very thankful for all the memories I made with all these kind and warm-hearted people: the residents (I prefer calling them friends now), the staff members and our houseparents. Thank you for deep conversations, for your patience (especially while teaching me Japanese words and phrases!), for your humour, for your opinions on different topics... all in all... for the opportunity to learn so many things. I came to Japan in order to learn about Japanese Religions but I am leaving with so much more. HdB is the short form of Haus der Begegnung (House of Encounter) and I can say that I had plenty those. I really hope to stay friends with some of you but now I'd like to wish all of you the best for your future. I hope you'll find your path in life, that leads you to success but also to happiness.

Farewell! Luca

Nice to meet you, HdB

Jindapa Phinmee (Thailand)

Kyoto University Graduate school of Agriculture

If you want to live and learn in Japan faster than usual, Haus der Begegnung or HdB is your



fast track. HdB offers a new society in terms of conservative and revolutionary by learning, respecting history, and moving forward to the future with a positive attitude and motivation. My name is Jindapa PHINMEE, a master student of Kyoto University, from Thailand. I found this dorm due to supervisor advice. It was a good decision because I have enjoyed a lot of activities even though I have been there 3 months (and do not have a plan to move) such as Common Meal, Christmas

party, Trip to Wakayama and Thanksgiving. These events are my precious memories.



One of the signatures in HdB is the diversity of people of all ages around the world who want to meet and share their experiences, attitudes, motivations, and so on, according to the HdB Principle and Purpose “Life Together means love and respect for those who are different...” it means you could be yourself together with accepting other opinions. In other words, you will learn how to compromise, a soft

skill that is useful for real life. Another is “Life Together is an adventure and an experiment...” Each day we do not expect what is going to happen in our life. Especially, when people from different environments work together we could have conflict and harmony. However, in the end of work we could find the right way in time. Personally, I had never lived together with other people before but I agree with the purpose and think this my challenge/big chance to become a person who is better than yesterday.

Community

Marina Reavis (America/Japan)

同志社大学文学部

I recently moved into HdB, only a couple of months ago actually, but I was introduced to the community one year ago at the 2021 thanksgiving event. At the time I had no idea I would one day be a member of the dorm and see the world from that perspective, but from my outsiders view it was a refreshing scene of harmony. Students of different nationalities coming together to share their culture not only to each other but to the surrounding community as well was something from a movie, too far from my reality.

This all changed thanks to the persuasion and persistence of my best friend Noah Yoshida. He is a classmate of mine from Doshisha University, whom I met only a year ago. He was the one who invited me to the thanksgiving event and has been an there for me ever since. When I finally decided to come, he was OVERJOYED lol. I know that I haven't been that active in the events that the dorm hosts, but everyone is still so warm and friendly to me. I especially love the after parties every common meal because it gives me a chance to talk to some of the residents I don't see very much.

This year I got to participate once again in the thanksgiving event, but this time as a dorm member, and it was so much fun getting to eat and watch performances. I can't decide which one is my favorite, Luca's song, or the Katy Perry dance performance. Shout out to the

Tiger who scared me from behind lol. I was a bit nervous because of the guests but Noah was always there to talk to me or talk with me to the guests which was a huge relief. I don't think I would have survived without him.

I'd never played much table tennis before joining the dorm but that took a quick turn when I saw the tournaments held during the common meal after parties. I've been practicing with Noah and getting a little better, I hope, but I can never play with Hibiki. He's so freaking fast I don't get it!!! Besides Noah, though, I think I have had the most time to hang out with Hibiki. He's funny and straightforward and always has something witty to say. I also miss Arne, who left about a month ago. He was always singing, and I swear his smile is contagious. Luca is the sweetest person I have ever met and is just overflowing with empathy and honesty.

I've never felt like I've belonged to a real community before this, but I am forever grateful for the sense of belonging I now feel. Thank you so much to all the members for being so kind and welcoming. Finally, to Noah, my favorite goofball, thank you so much for always listening to me rant or making food with me or forcing me to socialize with the other dormmates. I am forever grateful for your invitation to this dorm and for your true friendship. Love you always!

HdB での生活とお気に入りの料理

宮原里奈（日本）

京都大学教育学研究科

私は今年の5月から HdB に来ました。3月で大学院を卒業するため短い滞在にはなりますが、最後の学生生活にとっても貴重な経験ができたと思います。個人的に就職活動や修論の執筆など一大イベントがある1年間でしたが、ここまで心が折れずにやって来れたのは HdB の生活がとても楽しく、HdB の皆がとても優しく面白い人達だからだと思います。夜遅くに帰宅しても、ロビーからピンポンの音が聞こえたり、笑い声が聞こえます。HouseParents の部屋の窓がイルミネーションでキラキラ輝いたり、廊下から誰かの歌い声が聞こえたり、キッチンに行けば料理上手のレジデントが美味しそうな料理を作っていたりして、毎日とても癒されます。生活で困ったことがあれば office が何でも相談に応じてくれ、料理上手の HM の作ってくださるご飯は何でも非常においしいです。HF は部屋のドアを修理してくださったり、いつでもどこでも頼りにさせていただいています。レジデントやたくさんの方のおかげで、毎日楽しく充実した生活が送れていることに感謝いたします。

最後に私は HdB に来る前はほとんど料理をしませんでしたが、ここに来てから CM やイベント等で料理をする機会が増え、料理がとても好きになりました。その中でも特にお気に入りのものについて書きたいと思います。8月にあった IFF の時に作った茶葉蛋（チャーイェダン）です。台湾チームとして、台湾のソウルフードらしい香辛料で煮た茹で卵を作りました。卵に不思議な模様があるのが特徴的で、他のレジデントからは台湾のコンビニ等でも売っている国民的な料理だと聞きました。作り方とし

ては、茹で卵を作ってから殻にヒビを入れ、その後に醤油や調味料と混ぜ合わせ、鍋で煮た後にしばらくつけておきます。I F F の時にはかなりの数の茶葉蛋を作りましたが、卵が崩れないように殻を剥く作業が非常に時間がかかりとても大変だったことを覚えています。茶葉蛋は日本人にはあまり馴染みがなかったのか IFF ではあまり売れませんでした。私はすごく美味しいと思い、自分でもまた作ってみたいと思っています。

HdB の生活も残りわずかですが、世界中の料理をレジデントから教えてもらったり食事会で一緒に楽しみたいと思います。



Love

Noah Yoshida (Japan/America)
同志社大文学部

I grew up moving around in the United States and have always wanted to have a sense of community and one of the reasons I came to Japan was looking for that, and I have found my community here in HdB International student house.

A lot of the people in the dorm who I have grown close to are leaving within the next six to twelve months, but I hope to make these core memories I have with the new residents in the future. The first person in the dorm that left an impression on me was Kazuki Ohtani. We grew close going to dinner together, practicing English with him, and going to The United States with me. HdB International dorm is about learning new cultures and expressing your own and it was my honor to share my home and welcome him into my family. Kazuki is always aware and thinking about how others are thinking and that is one of his many great qualities that made him an amazing representative for our dorm as a chairman and an even better friend.

Haku and Andy always know how to put a smile on my face. They both give off such positive energy every time I see them in the lounge or during our common meals. I'll miss going to take pictures and going to Biwako with Haku and I'll miss losing to Andy against ping pong. I got to learn how to make authentic Indian curry from Hardik and I'm grateful I can add that to my pasta and cereal cooking resume. I love that he is always the only resident that plays old school rap during parties. Stellah is someone very special to my dorm life.

Every time you speak with her, she makes you feel so warm, and important, and she makes you feel listened to. She is such a caring person and I respect her for that. Hibiki has this energetic presence that uplifts you, but he also has this calm presence that makes you feel comfortable and safe around him. And to the best dancer in the dorm, Junya. He's got great dance moves and a contagious laugh. I haven't become close to Mine since living here, but I can always hear him busy with phone calls and is a hard worker. Sometimes before going to class, I always hear people playing the piano or Suguru doing karate and seeing Suguru showing pride in being Japanese is something I've admired. Shun is someone that you can talk to about anything and feel no judgment. We have similar movie tastes (I know this because he uses my Netflix account and from movie nights), we've fed Johnson Yakitori, and always down to party with me. Ando, Brandy, Jack, Luca, Mai, Miu, Vincent, Zeng, Zhou, Ester, Rina, and Yuri I haven't gotten as close as I'd like to, but I hope we can make great memories together from here on out.

To our new House Parents, I want to thank you guys for the effort and care you two put into this dorm and in us. You two have created a new outlook on this dorm that I think have changed this dorm for the good. Thank you to the office for working every day to make our everyday lives a little easier.

And to my best friend since I have moved to Japan, Marina. The first person that welcomed me into my school, Doshisha University, has been a huge part of my life this past year. She is easy to talk to, listens, carrying and the hardest working person I know. Even when you have lows or not your best self, Marina sees past that and is there for you no matter what. Marina is one of my favorite people in my life and even though she hasn't been in the dorm too long, I hope everyone can see how amazing and strong of a person she truly is. Lots of love for you, always.

なんでHdBの寒さに耐えられたのだろう？

大谷和輝

京都大学農学研究科

2021年11月2日、長い長い歴史が詰まっているのが見ればすぐ分かる建物に私はやってきた。「暗っ」「寒っ」「狭っ」。エアコンは効かないし、シャワーは温かいお湯出るまでじかんかかるし。そしてなんとといっても、キッチン横の自分の部屋には世界各国の料理の臭いが混じったグローバルな臭いがしてくる。家族、友人、知り合い、皆に私の新生活は2か月、いや1か月も続かないと嘲笑されていた。それもそのはずである。私はこれまで何不自由なく暮らしてきた。地元埼玉県では、小中高と私立の学校に通い、さらにサッカーのクラブチームに所属していたが、中学まではどの通学においても、当時の我が家族の愛車ベンツで送り迎えをしてもらっていた。そして、大学でも、3点セパレート、ソファ・ベッド・大きなテレビを置いてもスペースに余裕のある広い空間、9階、出町柳駅徒歩5分、河原町今出川という最強の便の

良さを誇るバス停まではなんと徒歩1分、という好条件のマンションで1人暮らしをしていた。しかもHDBに引っ越す決断をする前に、屋上にジャグジーがあると噂の出町柳付近のマンションに引っ越したいと家族に伝えていた。もう十分だろうか。私自身もこの自慢なのか、単なる説得材料なのか分からないエピソードを書くことに少し疲れた。つまり、周囲の人が口を揃えて私の新生活は継続不可能だと言ったことは、ごもつともだったということだ。実際、私は入寮してからも、昔の家の契約は切らず2つの家がある状態だった。家族によってセーフティーネットが用意されていたのだ。

しかし、周りの人が容易に想像できるHDBの側面、つまりトイレが部屋にないなどの多くの不便さ以上に、HDB外の人には決してわからない、入寮した私だからこそ見えるHDBの素晴らしい魅力があったのだ。私はその魅力に虜にされ、不便さを理由に退寮したいとは微塵も思わなかった。

では、素晴らしい魅力を持つHdBは私に何を与えてくれたのだろうか。新しい種類の人との出会いが、私の視野を広げてくれた。

これまで私の周りには、受験において偏差値の高い大学を目指す人、あるいはスポーツ、特にサッカーで勝利を目指す人がほとんどであった。私と似た思考を持った人間ばかりが、私の周りにいた。特に、大学のサッカー部では、偏差値も高くサッカーが上手い人しかいなかった。それが私の人生に悪いことだったとは決して思わない。むしろ、大学サッカー部では、チーム内競争でもチーム外競争でも下級生の内に一度は負けを経験し、そこから授業にも行かず努力し、3年生で試合に出てチームを代表してリーグ戦を戦った経験は、私にとっても多くの学びを与えてくれた。ただ、私の人生はとても偏った生き方で、考え方も偏っていたと気づいたのは、HdBに入寮してからである。社会で一般的に「凄い」と言われている事ばかりを追い求め生きてきたと気付かされたのだ。この寮には、自分のやりたいこと・好きなことを追い求めて日本へ来て、それに打ち込んで楽しく過ごしている留学生がおり、日本人の寮生も自分の好きなことに忠実に生きている人が多いと感じた。将来と世間体ばかりに囚われることなく、自分の軸を持って生きている人がたくさん住んでいる。私はそんな素敵な方々と出会い、自分自身の人生において、他人の評価ばかりを追い求めるのではなく、自分の好きなことに気付き、それに素直に生きたいと思うようになった。簡単に自分の価値観は変えられないが、この事実気付けたことに意味があり、これから少しずつ自分の好きなことを追い求められる人間になっていきたい。

新しい人との出会いの他に、HdBに入寮してからイベントの企画、数多くの人前で話す機会やパフォーマンス、あるいはチェアパーソンの役割など沢山の貴重な経験をさせてもらった。これらの経験を通して、自分の頭の中にある考えや思い付きを行動に移し実現させる行動力を身につけることができた。HdB以前にも、成人式同窓会の企画や部活の時に人前で話したり何かを演じたりしたことはあったが、HdBではその頻度が非常に多かった。クリスマスパーティーやトリップの当番では、自分たちのアイデアで何十人という人を楽しませるために、様々な計画を立て実行した。サンタやROARのパフォーマンスでも、仲間と協力しながら自分たちが面白いと思ったことを

実際にダンスやコスプレを通して披露した。チェアパーソンでは、寮生全員がHdBで幸せな生活を送れるよう、ルールを変更したり話し合いを設けたりした。これらの経験全てにおいて、「失敗したらどうしよう」という不安は必ず生じる。今更だから暴露するが、人前で話す時やパフォーマンスする時はいつでも、内心とてもビクビクしている。ただその不安に打ち勝つために、考えていないで準備の為に行動を起こした。この経験がHdBでは高頻度で何度も訪れる。それを通して、私は何事においても、成功には準備のために行動を起こし、かつその準備を信じる勇気を持つしかないということを学んだ。この学びは今後私が、社会人として仕事をしていく上で、ひいては一人間として生きていく上で、必ず生きると信じている。

そして、3つ目の学びとして、英語を話すと関わる人の数が増えるということを実感した。会話は人と人との交流の根幹だと私は思う。人は大抵、お互いが理解できる言葉を持っていないと会話はできない。そういった点で、英語は世界の共通語として世界中に広まっており、多種多様な人と交流するための言語としてとても有益である。チェアパーソンとしてハウスミーティングを取り仕切った時に、日本語だけで話してノアに通訳してもらった時より、下手な英語でも自分の言葉で寮生みんなに伝えたときの方が、自分の思いや考えをより多くの人に伝えられた感覚を得た。HdB内での日常会話でも、寮に入ってからすぐの時より、多くの人と深く交流できるようになった。さらに、英語を話せば町中で外国人と交流できる。その時も、関わる人の幅が広がったと感じる。今後英語を話すことで、より多くの人と関わるができると思うとワクワクする。将来もっともっと関わる人が増えた時、HdBに入る時に決意した「俺の挑戦」の真の結果が見えてくると思う。それまでもっと英語を使いこなせるようになりたい。そして「俺の挑戦」の結果が分かったら、HdBのみんなに結果を話しに会いに行くので、その時まで、俺のこと忘れないで覚えていてね。

豊富な体験

Rakotomamonjy Harilalao Ando

(ラクトウマモンジ ハリララウ アンド) (マダガスカル) 京都大学 農学部

私は京都大学農学部の研究先で熱帯林環境学分野に所属している。2022年9月に日本に着き、今は5ヶ月になった。

日本に来てから、五ヶ月の間には日本料理を初め、色々な日本についてを体験した。私の国には日本料理はあまり知られていないし、特にラーメンが人々に人気を集めない。だが、一番好きな日本料であり、時々食べるのを望んだ。日本に来て、ラーメンを食べる夢が叶われて、たまに友達と一緒に食べに行く。楽しい。料理以外、京都の魅力も不思議で驚かせた。京都は古くて長い歴史を誇る町であるのが当然のことだ。京都の町を散歩したり、神社、お寺、歴史的なところを訪れるのは古代や昔の日本を思い出された。とても興味深く、気持ちよかった。

また、日本に来てから、どこへも行かなく、すぐ入寮した。Hdb は留学生の寮だ。hdb に色々な国からの留学生と住んでいる。hdb は少し古い寮。だが、ジームのルームを初めとして、設備がいっぱいで誰でも利用できる。それに加えて、他の国からの留学生と暮らしているのも多様性の文化を発見し、体験になった。もう一つ、留学生の連帯を強化するために、寮はよくイベントを作っている。例えば、common meals や見学旅行のような日帰りだ。そのイベントの間、留学生たちはお互いに文化交流したり、自分の分野や将来のことを話し合ったりしている。千人千色だから、とても勉強になって人間とのコミュニケーションに本当に役立つと思う。日帰りと言えば、和歌山へ行くのは楽しかった。日帰りであっても、和歌山市一円を訪れることができ、よかった。

最後、私が入院寮してから五ヶ月になっても、日本についての知識をいっぱい得、寮の過ごした日々を体験した。自分の国と違っている人と毎日過ごしているのは文化摩擦のせいでなかなか難しいと思ったが、交流したり、話しあったり、同じゴールを目指すと感じ、多様性は富になった。

文化と性格の差異

谷河 響（日本）

京都産業大学 外国語学部

私がこの寮に住もうと思ったきっかけは、中国への留学がコロナによってなくなったからでした。中国語会話の練習をするために始まった寮生活でしたが、中国語を学ぶ以上に得れたものが沢山ありました。

一つ目は、文化の差はあるけれど性格の差はないということです。共同生活をするうえで、たくさん問題が出てきます。しかし、みんなが問題を解決するために、優しく助け合い安定した生活を送ることが出来ました。例に挙げられるのは、common meal の後のミーティングです。Team のメンバーが主体となって、その月ごとに生活を送るうえで何か良くないことは無かったか？もっと改善するポイントはないか？を話し合いみんなが協力していました。これは、言語の壁を越えて他者を思いやって生活しようという同じ優しさが働いた結果だと感じました。

二つ目は、他者は鏡だということです。優しくすれば、優しく返してくれる。冷たくすれば、冷たく帰ってくる。打ち解けたいなら、砕けたコミュニケーションをする。そうすることで、人間関係を作っていけることが分かりました。

三つ目は、意見することの重要性です。この寮の共通言語は英語と日本語です。しかし、私は英語をしゃべることが出来ません。では海外から日本に来ている学生が半数を占めるこの寮でどうやって意見を提案するのか。最初はどうすればいいのか分かりませんでした。こうした方が良くないかと思っても言えない。相手が何を主張しているのか分からない。最初の一か月はそのような状態が続きました。しかし、それでは不安やストレスが溜まってきます。また、それは相手には伝わりません。一

か月を超えたあたりから、周りの人に頼ったり、根気よく使える英語を使ったりして、コミュニケーションを図るようになりました。すると、周りの環境が大きく変わり始めました。大きく変わったのは、留学生が私に喋りかけるようになりました。それから深い話をすることが出来るようになり、相手のことが分かるようになりました。もちろん自分の意見だけを通すのは共同生活を送るうえで難しいが、自分の意見を口にして他者の意見を考慮しつつコミュニケーションを図ることで、良い人間関係がはぐくめることが分かりました。

上記した以外にもこの寮で学べたことはたくさんありますが、ここでは書ききれません。三月から住み始めたHDBの9か月間はとても色濃いものでした。この経験を忘れずこれからも生活していこうと思います。

Checkmate

Vincent Brillung (ウィンセント・ブリリング) (Germany)

NCC-Center, Kyoto

My time at the HdB is wonderful. I came to Japan for four months to study Buddhism, Shintoism and Japanese Christianity. Unfortunately, my Japanese is not very good. So sometimes I have trouble with everyday life: Which kind of medicine do I need from the store? How do I send this package to Germany? This is where the kind residents of the HdB help me out a lot. Not only that, but there are always little events going on where we are invited to by other residents. So when I do not have to study there are many opportunities to enjoy my free time. Whether it is visiting places or just having a good time on the first floor with a game of table tennis or chess, spending time with the other residents is always nice. An event I adore are the Common Meals. Everyone works together in creating a delicious set of meals. Due to the house community being so international, the variety of the food is a given! Furthermore, during the Common Meal evenings you are able to see a lot of the residents who are usually working hard at their universities or jobs. This is always a very welcome opportunity to talk with other people.



When I will go back to Germany I will definitely miss the HdB.

日本語との二度目の出会い

Wang Ren (ワン レン) (中国)

京都大学経済学研究科

30 歳から、人生で一番大変だったことは何かと聞かれるたびに、「日本語を勉強したこと」と答えていました。

正式に日本語を学び始めたのは、30 歳の誕生日の時でした。博士課程に進むため、日本へ留学することを決めたからです。当時、周りのほとんどの人は「30 歳にして全く新しい外国語を学び始めるのは難しすぎる」と私に言いました。その言葉を聞き、心の中で「まず N1 (日本語能力試験の最上級のレベル) に合格してみせよう」と決心しました。

そして、独学で半年余り勉強をし、ギリギリの点数で N1 に合格をしたのち来日し、京都大学に入学しました。当時は、日本へ来たことでこれから日本語が飛躍的に上達すると思っていたのですが、現実は期待通りにはいきませんでした。というのも、N1 に合格したものの、独学だったため基礎がしっかりできておらず、リスニング・ライティング・スピーキング等の能力が初心者並みだったためです。また、博士課程に入って以降、ほとんどの時間を研究にかけていたため、日本語を勉強する時間は十分にありませんでした。さらに、自分の研究テーマは日本ではまだあまり研究されていなかったもので、毎日読んでいた先行研究も、執筆していた論文も全て英語でした。そのため、毎月の指導教員との研究相談以外に日本語と接する機会は、ほとんどありませんでした。

その結果、3 年経っても日本語は全く上達しませんでした。このままでは、無事に修了できたとしても、日本での就職はほぼ不可能だと感じていました。

そんな時、転機が訪れました。「窮すれば通ず」ということばのように、2022 年 2 月のある日、学内の掲示板で HdB の寮生募集のチラシを見かけました。「もしかしたら、これが自分の日本語力を救う、最後のチャンスかもしれない」と思い躊躇なく応募し、3 年間住んでいたアパートから、この歴史に富む寮に引っ越してきました。

HdB に来て、ようやく日本語の練習ができる環境を手に入れました。初めて Common Meal に参加した夜、ぎごちない日本語で夜中過ぎまでみんなと話し込んだことは、一生忘れない思い出です。一番感動させられたのは、HdB の日本人の学生はみんな英語が堪能なのに、私が日本語を学びに来ていることを知り、たとえ私との日本語会話がうまく行かなくても、私の日本語勉強のために、ずっと日本語で優しく話してくださいました。少し前までは聞き取りも会話も苦手で、日本語の試験の選択式問題しかできなかった私でしたが、次第に日本語でコミュニケーションが取れるようになってきました。

光陰矢のごとし、HdB に入居したのは 5 月の暖かい春の日でしたが、今この文章を書いているのは、11 月の肌寒い秋の日です。HdB の皆様、特に House Parents の山本

ご夫妻と、私と同じ寮生の浅井裕理さんはこの6か月間、私の日本語学習に格別のご指導、ご協力をいただきまして、心より感謝申し上げます。今の私の日本語力では、日本で就職することはまだまだ難しいと感じていますが、HdB に来て本当によかったと思っています。初めて日本語と会ったのは30歳でしたが、34歳にして、この素朴で心温まる国際学生寮で日本語との二度目の出会いができました。

覇権安定論と今後の国際秩序

渡辺淳也（日本）

京都大学法学部

国際秩序には様々な国や地域が関わっているが、そのような世界でどのように多国間の協調が達成されるのされるのだろうか。一つ興味深い国際政治経済学の理論があるので紹介したい。

それは覇権安定論である。簡単に言えばひとつの国民国家が世界的な支配的大国、すなわち覇権国であるとき、国際システムが安定するという考え方である。覇権国家がその軍事的、経済的、経済的、技術的力を背景に国際秩序の安定や国際的なルールの執行、レジームの形成などを牽引する役割を担うのだ。

そうすることで得られる各国の利益は様々であるが、まず覇権国家が存在することで、国際レジームに強制力を持たせることができる。たとえ国際レジームが市場の失敗、非効率、経済の不確かさを解決するのに非常に効果的であったとしてもそれに強制力がなければ、各国は自国の利益になるようなレジームのみ遵守し、自国の利益にならないレジームには従わないようになる。なぜならたとえ各国が協力し合ったほうが良い結果が得られるとわかっていても、もし協力的な国と非協力的な国があった場合、そのうちの非協力的な国のみが利益を得られるような状況では、相手がどう出るかわからない以上、自国が損しないように非協力的に立ち回るほかないからだ。そして結果として国際レジームの当初目指した目的を達成できなくなってしまう。しかし覇権主義的協調の国際体制であれば覇権国家が各国に強制的に協調して国際レジームを守らせることができるので、その目的を達成することができ、市場はより効率的で安定的なものになる。

またそのような秩序の下では公共財が提供されることで、リベラルな国際経済が促進されるようになる。公共財はそれが多数の人々の役に立ち、非常に需要があるものであったとしても一般的には不足しがちなものである。なぜなら公共の財はその非排除性により、その公共財を対価を払わずに利用するいわゆるフリーライドの問題を排除できないからである。その性質によって公共財の供給はそれに見合うだけの対価を得ることが非常に難しく、それを供給するインセンティブに乏しい。しかし覇権主

義的国家体制では覇権国家が自由貿易や貨幣の安定性などの公共財をその資源と影響力を持って全国家に供給するか、あるいは他国に公共財のための支払いを強制することによって、その供給不足を解決できるのである。安定した公共財の供給によって自由国際経済はますます安定性を増し、さらに促進され活発化していこう。

このように覇権国家はその体制の中で様々な役割を担う代わりに自国の利益や、同盟国の経済的利益や軍事的利益を含む、政治・防衛的な利益を得ることができ、いわば覇権国とその他の国の相互に互恵的關係のもと国際システムが安定するのである。

しかしこの理論には問題もある。それは覇権国の転換期である。このような国際秩序は覇権国の他国への圧倒的な力関係を背景に成り立っているが、刻一刻と情勢が変わる国際関係の中で一国が常にその優位性を維持し続けることは不可能である。やがてその覇権国家に挑戦する国の台頭や、はたまたどの国家も覇権国家として秩序を維持するだけの力を持ちえない時代も来るだろう。そのようなときに政治的混乱は不可避であり、最悪の場合戦争が起きる可能性もあるだろう。

現在の国際秩序においてはアメリカがこの覇権国家的役割を担っているということが出来るだろう。しかし昨今そのアメリカに匹敵する勢いで様々な国が急成長している。このような世界情勢においてこの理論を頭の片隅に置いておくと、今後の国際秩序や将来起こりうる出来事を考える上で、新たな視座を得られるのではないだろうか。

神戸刑務所を見学して

山本峰丸（日本）

京都大学法学部

皆さんは刑務所と聞くと何をイメージしますか。檻、囚人服、犯罪者、治安悪い、汚い…普通あまり良い印象はないですね。私も懲罰を科す場所という印象が強く、それ以外のことを知りませんでした。しかし 11 月末に、刑事学ゼミの一環で塙の中を見学する機会をいただき、イメージがガラッと変わったので感想を記したいと思います。



神戸刑務所は明治初期から存在する歴史の長い刑務所です。元々神戸市内に立地していたものの、戦時中に現在地の西明石に移転します。昭和末期から平成初期にかけて改修工事が行われ、その際に舟形の本庁舎と大型の門が建築されました。内装こそ質素ではあるものの、全体的に非常に立派で堅牢な作りになっており、バブル景気の香りが漂います。まずは所長から歴史や組織構造、運営、収容者の概要などについてお話を伺いました。現在、刑務所には約 1000 人が収容されていますが、日本全体の刑法犯罪件数の減少に伴って人数は

少しずつ減っています。年齢は20代前半から80代後半まで。外国人も一定数おり、日本語がうまく話せない方やヒンドゥー教徒やユダヤ教徒のように食事の配慮が必要な方も。犯罪歴は窃盗や薬物から暴力団の抗争絡み、性犯罪、殺人まで様々で、無期懲役の服役者は10人弱います。刑務所は日本社会の縮図であり、(専用刑務所にいる女性や少年を除いて)ありとあらゆる属性の人間が暮らしているようです。当然のことかもしれませんが、大学で同年代の同質な人間ばかりとつるんでいる私にとって新鮮な感覚でした。刑務官は個々人の性格や知能体力、犯罪歴などを把握して適材適所の配置を行いつつ、刑務所全体としての統率や受刑者間の平等も図らなければなりません。所長は非常に明るくユーモアがあり包容力と威厳も兼ね備えた方でしたが、このような人格者でないとい仕事は務まらないだろうなと思いました。

次いで所内の木工や裁縫、革靴、自動車整備の工場、厨房などを見学。受刑者は私たち見学者が来ても手を休めることなく、刑務官の監視の下黙々と作業に従事していました。製品は所外に隣接する展示場で販売されています。プロの職人に勝るとも劣らない品質です。自動車については受刑中に国家資格の整備士3級と2級を取得できます。刑務所では懲罰を加える機能よりも、社会で有為な人材となれるよう職業訓練を施す機能がより重視されていることを実感しました。職安のスタッフも常駐しており、出所後の就職を斡旋しています。



また、所内の至る所が清掃されており、床には輪ゴム、紙切れ、鉄屑1個たりとも落ちていません。自殺や私信のやり取りを防止する目的で実施されています。若干息苦しいかもしれませんが、清潔な空間で暮らせば心も落ち着くだろうなと思いました。コロナ感染を防ぐため、受刑者が寝起きする居室などの生活空間は見学できませんでした。刑務官から聞いたところによると、テレビやラジオ、新聞は内容を問わず自由に見聞きできるそう。バラエティ番組やスポーツの試合を見ることも可能。出所後に浦島太郎にならないよう、人権の配慮がなされていることが窺えます。

大学という狭い場所に住む私にとって、別の世界を見れたことは非常に良い経験でした。刑務所は娑婆から隔絶された闇社会ではなく、むしろ社会の重要な一部です。私たちと同じ人間が暮らしています。刑事司法に関わる仕事に就く予定はありませんが、もっと外の世界を知って視を広げていかなければならないと痛感しました。

AI helped me a liiiiiitle bit on this

ZHANG Boyiwen

Life in a dorm HdB is constantly full of surprises, changing slowly but steadily as our members change. As a student living here, I've had the opportunity to take on many roles, as well as attend and organize activities. The events planned by the dorm help me keep connected with my friends while also learning new things. Everyone in our dorm has a diverse background, which provides a unique atmosphere that encourages us to discuss our cultures and opinions with one another. This allows us to cultivate empathy, promote mutual respect, and evolve as a society. My experience at HdB was really fulfilling and shaped me into the person I am today.

It's been an incredible experience living in this excellent dorm. The thin door, no hot water in the room doesn't seem to matter anyone at this point. It has given me the opportunity to meet individuals from all origins and cultures and learn more about them. It has also taught me the value of effective communication and mutual understanding. What I value most about HdB is the friendship I made there. Many residents will have graduated and moved out by 2021. Despite the fact that some of my friends have moved away, I keep in touch with them and share our life updates.

To those who are read our year book, if you live here, while enjoy every bit of it; if you do not, what are you waiting!

Short travel In

周 平 (中国)

Kyoto University, the graduate school of Medicine

It has been more than 2 months since I came to Hdb, and this is my first home in Japan. Before I first came to Japan, I was totally unfamiliar with the Japanese environment, I didn't know how to buy things, how to rent an apartment, how to communicate with an agent and so on. But Hdb has relieved my anxiety. Because of the convenient living conditions provided by Hdb, I was able to devote myself to my studies smoothly. Since I spent the first month preparing for the entrance exam in November, and started my own research after the exam, I was very busy every day and had very few opportunities to communicate with everyone, so I felt a bit regretful.

At the same time, I am not a very outgoing person, and not very good at verbal communication, sometimes isolating myself in my own little world. Brandy would often talk to me, take me out to play, take me to cook with other friends, and give me the greatest support in both study and life. When I was in China before, she was also the one who always gave me strength and always encouraged me not to give up, because she was in front of the front charge,

and I was always the one who had someone to hold the umbrella. Ren-san is the person I talk to most at Hdb besides Brandy. He is a very positive person and often makes me marvel at him. His spirit of learning the language will be my role model forever, and because of his words, it effectively eased my pre exam anxiety. I hope I can bring upward power to others like he did. Shun-san is the class president of Hdb (I am not quite sure), a very sunny big boy. When I saw him, I couldn't help but sigh that it's good to be young. He is very social and energetic, and when I see him, he is participating in various activities. He is also a very thoughtful and considerate boy. There was a Thanksgiving event where I looked rattled after I finished brushing the dishes. His words at that time made me feel saved at that moment. Later he would also encourage me and try to help me adapt to life here. It felt very touching. And Yuri-san, a very delicate Japanese girl. She is also very good at cooking and speaking Chinese. Although I felt a bit sorry that we couldn't have 火锅 and 辛い料理 together several times, I'm sure we will have a chance next time. It was also because of Yuri-san that I was able to eat Chinese qinzuishao in Japan, and for a moment I felt like I was back in China again. And Esther-san, a very friendly girl. Before my exam, she would send me a message to wish me well, I felt very touched and happy at that time. She knew a lot of information and shared where I could study Japanese. Although I haven't tried it yet because of time, I'm sure I'll go there when I'm on the right track. And I was given a beautifully wrapped gift, which made me feel even more flattered. She seems to be going back to Germany, I hope she will be better and better and happy every day. There are many of Hdb's residents have given me many touching moments, and this winter's happiness is given by Hdb.

Some time ago I had to get up early and come home late because of my project research. I like the lights on the way home, dim, but with a feeling of waiting for people to return. I hope everyone can harvest their warmth in this cold winter.

そうですね

Arne Simon Käfer (ドイツ)

NCC-Center, Kyoto

Arne Simon Käfer, 24 years old, German

ソウジツネ



soisichsenber

『HdBで食べまくる』
"I always eat too much at HdB"



My very first meal @HdB
最初の朝ご飯 🍴

It gradually becomes sumptuous as time elapsed
徐々に御馳走になっていく 🍴

Sanative time. Not only through the toothsome cuisines, but also by interacting with the lovely people
美味しい料理を味わうし、優しい人たちと付き合うし、うきうきした 🍴

Looking forward to the new adventure with HdB in the coming new year
来年もよろしくお祈いします 🍴

 劉笑聡 LIU XIAOCONG (Brandy)



【資料】

公益財団法人京都国際学生の家 役員等

監事 (2022年度)

浅田 拓史 (大阪経済大学准教授、公認会計士)
折田 泰宏 (弁護士)
秋津 元輝 (京都大学教授、OM 会員)

評議員会 (2022年度)

深海 八郎 (眺八海倶楽部総支配人)
村田 翼夫 (筑波大学名誉教授、OM 会員)
吉田 和男 (京都大学名誉教授)
平野 克己 (日本塗装機械工業会専務理事)
山田 祐仁 (辻調理師専門学校、学寮運営委員長、OM 会員)

理事会 (2022年度)

理事長

内海 博司 (京都大学名誉教授、元 HF、OM 会員)

常務理事

吉川 晃史 (関西学院大学教授、公認会計士)

理事

山本 慶一 (HF)
上村 多恵子 (京南倉庫(株)代表取締役社長)
嘉田 良平 (四條畷学園大学教授、OM 会員)
吉村 一良 (京都大学教授、元 HF、OM 会員)

RUSTERHOLZ Andreas (関西学院大学文学部教授)

永井 千秋 (公財) 新産業創造研究機構 技術アドバイザー、
OM 会員)

| | |
|----|------------------|
| HF | :House Father |
| HM | :House Mother |
| HC | :House Committee |
| OM | :Old Member |

顧問 (2022年度)

所 久雄 (社会福祉法人京都国際社会福祉協力会理事長)
平松 幸三 (京都大学名誉教授、OM 会員)
森 棟公夫 (椋山女学園特別顧問、京都大学名誉教授)
柴田 光蔵 (京都大学名誉教授)

岩 崎 隆 二 (和晃技研㈱代表取締役社長、OM 会員)
中 島 理一郎 (元同志社大学教授、OM 会員)
西 尾 英之助 (京都日独協会会長)
蔦 田 正 人 (弁理士法人蔦田特許事務所代表、OM 会員)
諏 訪 共 香 (元立命館大学講師)

学寮運営委員会 (HC) (2022 年度)

運営委員長

山 田 祐 仁 (辻調理師専門学校、OM 会員)

運営委員

坂 口 貴 司 (三菱電機㈱、OM 会員)
鈴 木 あるの (京都橘大学教授)
TANANGONAN Jean (近畿大学講師、OM 会員)
DAVIS Peter (Telecognix Corporation CEO)
松 橋 眞 生 (京都大学准教授、元 HF)
長谷川 真 人 (京都大学教授)
北 島 薫 (京都大学教授、元 HM)
笹 山 忠 則 (大阪府立大学名誉教授、
寿テレコム放送舎 (非営利) 代表)
Naresh Bedi (元 HF、OM 会員)
Joseph A. Phillips (元 HF)
山 本 慶 一 (House Father)
山 本 夏 子 (House Mother)

CHAIRPERSON of TEAM

VICE CHAIRPERSON of TEAM

職 員 (2022 年度)

水谷内 典 子
吉 竹 慶 一

2022年度 補助金・寄付金・その他ご支援

2022年1月1日～2022年12月31日受領分

敬称略

補助金・助成金

| | |
|---|---------------|
| 『公益財団法人 中島記念国際交流財団助成』 (独)日本学生支援機構2021年度留学生地域交流事業 ・「多様性の理解を高める食文化を通じた国際交流」 | 360,000円 (予定) |
| 『一般財団法人 日本メイスン財団』 ・「京都国際学生の家のお朽化施設の改修工事」 | 940,000円 |
| 『一般財団法人 MRAハウス』 ・「食を通じての国際相互理解の増進事業」 | 200,000円 (予定) |

株式寄贈

杉山喬一 株式会社D T S 株式 4,000株

寄付金 計 2,679,200円

| 寄 付 者 | 寄 付 者 | 寄 付 者 | 寄 付 者 |
|-----------------|----------------|-------------------------|------------------|
| かまの外科医院 鎌野幸子 | 株式会社三悦 樋田浩三 | ボーイスカウト京都 第42団 谷口平八朗 | 有限会社ハイナン 土屋俊宏 |

| | | | |
|--------------------|---------------------|---------------|---------------|
| HEINRICH REINFRIED | Kevkhisvili Rusudan | Neo Eng Chong | TSAI YOU SHAN |
| WU QINGHUA | Yoshida Noah | 朝倉 寛之 | 浅野 安沙 |
| 浅野 覚文 | 井形 彰利 | 石原 ゆき子 | 市川 裕康 |
| 伊藤 宏樹 | 稲葉 カヨ | 岩田 忠久 | 岩沼 享子 |
| 岩根 麻結美 | ウー チャンユー | 上田 学 | 内海 仁美 |
| 内海 博司 | 江口 翠 | 王 柳蘭 | 大槻 憲弘 |
| 大野 詩子 | 大橋 禮子 | 大畑 京子 | 大畑 浩志 |
| 岡田 徳子 | 岡本 修身 | 岡本 徳子 | 置田 和永 |
| 小野 公二 | 加藤 克馬 | 金子 恒一 | 鎌野 幸子 |
| 鴨田 昭代 | 北島 薫 | 木原 文太左右衛門 | 金 羅煥 |
| 行實 誠 | 金 盛彦 | 窪田 弘 | 小島 和典 |
| 小谷 夏美 | 児玉 靖司 | 琴浦 良彦 | 小西 淳二 |
| 木葉 丈司 | 小林 萌子 | 近藤 哲理 | 齊藤 眞弘 |
| 坂口 貴司 | 坂野 泰治 | 佐藤 文彦 | 四宮 隆 |
| 杉山 茂 | 鈴木 あるの | 鈴木 武夫 | 孫 曉萌 |
| 高田 徳子 | 竹田 洋子 | 多田 譲治 | 田中 治 |

| | | | |
|----------|--------|--------|--------|
| 田中 ジョン | 田中 徳壽 | 谷 幸治 | 田野 かおり |
| 田森 行男 | 千葉 絢子 | 手塚 修司 | 寺本 美智子 |
| 土居 貞往 | 十河 智江子 | 内藤 義弘 | 永井 千秋 |
| 仲谷 正博 | 成田 康昭 | 西本 太観 | 野田 和伸 |
| ハギギ セバンタ | 荻原 悦子 | 長谷 博友 | 原口 航 |
| 平野 克己 | 平松 幸三 | 深海 八郎 | 福本 和久 |
| 福本 学 | 藤田 昌史 | 藤原 邦夫 | 古川 彰 |
| 古川 千佳 | 前上 英二 | 前川 佳世子 | 前 博之 |
| 眞木 恵子 | 松田 敬一 | 松成 亮太 | 三浦 一郎 |
| 宮本 圭子 | 宮本 桂子 | 村上 響 | 村瀬 徹 |
| 村田 翼夫 | 森棟 公夫 | 安永 昌史 | 柳田 由紀子 |
| 薮下 義文 | 薮田 定男 | 山岸 秀夫 | 山下 進一 |
| 山田 有信 | 山本 慶一 | 山本 夏子 | 山本 雅英 |
| 吉川 晃史 | 吉川 昭一 | 和田 浩一 | |

寄贈品・その他 アルコール類、食品類のご寄附をいただきました。

| | | | |
|-----------|------------|--------|-----|
| 浅井 裕理 | たけのこ | 岩根 麻結美 | お菓子 |
| 内海 仁美 | お菓子 | 置田 和永 | 柿一箱 |
| 株式会社 三悦 | 商品券・ビール券 | 川端 一彌 | お酒 |
| 国際ソロプチミスト | お菓子 | 野田 和伸 | お酒 |
| 平松 幸三 | ワイン | ベディ 成守 | お酒 |
| 安田 佳子 | お酒・ケーキ・みかん | 柳田 由紀子 | ケーキ |
| 吉内 玲太 | お米 50kg | | |

皆様のご支援に心より感謝申し上げます。

* 2023年1月以降のご寄付分は、次年度の報告書に記載させていただきます。

公益財団法人京都国際学生の家 の 略 史

| 西暦 和暦 | ハウスペアレンツ | | 事項 |
|-------------|--------------------|--|---|
| | 日本 | スイス | |
| 1961 S36 | | | <ul style="list-style-type: none"> ・1月21日--スイス東アジアミッション(SOAM)コーラー牧師構想の「出会いの家」を京都に実現するための募金活動開始(於チューリッヒ) |
| 1962 S37 | | | <ul style="list-style-type: none"> ・11月19日--第1回京都「国際学生の家」建設発起人会 ・3月24日--第1回京都「国際学生の家」建設実行委員会 |
| 1963 S38 | | | <ul style="list-style-type: none"> ・6月--SOAMとHEKSより67万スイスフラン(邦貨約5,560万円)の寄付 ・12月16日--財団法人京都「国際学生の家」設立 ・12月16日--理事長湯浅八郎博士就任 ・12月16日--財団法人京都「国際学生の家」寄付行為制定 |
| 1964 S39 | | | <ul style="list-style-type: none"> ・8月10日--学寮建設工事契約;榊竹中工務店、総額約8,700万円 ・8月中旬--地鎮祭 ・10月14日--寄付金(一般)の免除対象となる試験研究法人等として承認(4教文第388号・京都府教育委員会委員長) ・12月25日--財団法人京都「国際学生の家」規約制定 |
| 1965 S40 | 4月: 稲垣 Inagaki | 4月: ドマムート Dumermuth 9月: コーラー Kohler | <ul style="list-style-type: none"> ・3月31日--竣工 ・4月1日--開寮 ・4月10日--献堂式 ・10月頃--ハウス・チーム誕生 |
| 1966 S41 | | | <ul style="list-style-type: none"> ・4月10日--学寮開寮一周年記念式典 ・12月20日--寄付金(一般)の免除対象となる試験研究法人等として承認(雑文第1の28号・文部大臣) |
| 1967 S42 | 3月: 中山 Nakayama | | |
| 1968 S43 | | | |
| 1969 S44 | 4月: 内田 Uchida | 5月: ペニンガー Pfenninger | <ul style="list-style-type: none"> ・12月16日--西館完成 |
| 1970 S45 | 7月: 不在 | | |
| 1971 S46 | 4月: 大沢 Ohsawa | 4月: ベア Bär | <ul style="list-style-type: none"> ・2月18日--年報第1号発行 |
| 1972 S47 | | 3月: ケッター Kötter | |
| 1973 S48 | 6月: 内海 Utsumi | | <ul style="list-style-type: none"> ・財団法人万博協会より資金を受け、屋上改修工事 |

| | | | | |
|-------------|--------------------|---|---|--|
| 1974 S49 | 50 | 4月: 内田 Uchida 12月: ハットナム Putnum | <ul style="list-style-type: none"> ・4月1日--財団法人京都「国際学生の家」諸規則の改正 ・5月18日--十周年記念式典 ・5月1日--年報『出会い』第2号「十周年記念号」発行 | |
| 1975 S50 | | | 7月: 山本 M. Yamamoto | |
| 1976 S51 | | | | |
| 1977 S52 | | | | <ul style="list-style-type: none"> ・6月24日--「ライオンズ基金要綱」を制定 寄付金総額1,340万円を基本財産に組み入れ 昭和50年度・51年度のライオンズクラブ(京都27クラブ)よりの寄付 |
| 1978 S53 | | | | |
| 1979 S54 | | | | |
| 1980 S55 | | | 3月: 琴浦 Kotoura | |
| 1981 S56 | | | | <ul style="list-style-type: none"> ・8月15日--初代理事長・湯浅八郎博士逝去 |
| 1982 S57 | | | 2月: プルコルター Burkolter | |
| 1983 S58 | | | | <ul style="list-style-type: none"> ・1月31日--第2代理事長に上野直蔵博士就任 |
| 1984 S59 | 9月: 古川 Furukawa | <ul style="list-style-type: none"> ・8月21日--創始者・ウェールナー・コーラー博士逝去 ・10月2日--第2代理事長・上野直蔵博士逝去 ・10月26日--第3代理事長に遠藤彰氏就任 | | |
| 1985 S60 | | <ul style="list-style-type: none"> ・3月8日--年報第8-9号「二十周年記念号」発行 この年にHdBのエンブレムの制定 ・10月1日--国際交流基金の第1回国際交流奨励賞地域交流振興賞受賞 ・10月19日--創立二十周年記念式典 | | |
| 1986 S61 | | | | |
| 1987 S62 | 4月: 内海 Utsumi | 3月: 不在 | | |
| 1988 S63 | | 4月: フォレンバイダー Vollenweider | <ul style="list-style-type: none"> ・1月18日--財団法人京都「国際学生の家」諸規則の整備 ・5月28日--財団法人京都「国際学生の家」パンフレット作成 | |

| | | | |
|-------------------|----------------------|-------------------|--|
| 1989 S64 H1 | | | ・10月15日一京都市より表彰 |
| 1990 H2 | 8月: 山本 Yamamoto | 4月: オッテ Otte | ・7月2日--第1回国際食べ物祭り開催 この年にHdBの旗を制定 |
| 1991 H3 | | | ・3月31日--第3代理事長・遠藤彰氏辞任(広島女学院大学学長就任) ・4月1日--第4代理事長に稲垣博博士就任 |
| 1992 H4 | | | |
| 1993 H5 | 4月: 吉村 Yoshimura | | |
| 1994 H6 | | 3月: ウィダー Wider | |
| 1995 H7 | | | ・7月8日--創立三十周年記念式典(SOAM会長他5名来日、出席) |
| 1996 H8 | 4月: 戸口田 Toguchida | | |
| 1997 H9 | | | |
| 1998 H10 | | | |
| 1999 H11 | 4月: 高橋 Takahashi | | 12月31日--SOAMとの法的関係解消、ハウスファーザー二人制廃止 |
| 2000 H12 | | 1月: 以降、廃止 | ・9月6日--財団寄付行為の改正 |
| 2001 H13 | | | ・3月下旬--全職員の退職・全寮生の退寮 ・4月初旬--大改修工事開始 ・8月末日--工事完工 ・9月1日--再開館、新職員採用 ・10月21日--再興祝賀行事開催 |
| 2002 H14 | 8月: 木戸 Kido | | |
| 2003 | | | |

| | | | |
|-------------|--------------------------------|------------------------------------|--|
| H15 | | | |
| 2004 H16 | | | |
| 2005 H17 | | | |
| 2006 H18 | 4月: 前川 Maekawa | ハウスアドバイザー 10月: ブアテン Buadaeng | |
| 2007 H19 | | 3月: 帰任 | <ul style="list-style-type: none"> ・1月20日--第4代理事長・稲垣博博士逝去 ・5月20日--第5代理事長に内海博司就任 ・11月17日--稲垣先生を偲ぶ会 |
| 2008 H20 | | | <ul style="list-style-type: none"> ・7月10日--第2代ハウスマザー・ネリー・コーラーさん逝去 (創始者・ウエルナー・コーラー夫人) |
| 2009 H21 | 8月: 松橋 Matsuhashi | | <ul style="list-style-type: none"> ・7月17日--第3代ハウスマザー・ペニンガー好美さん逝去 |
| 2010 H22 | | | <ul style="list-style-type: none"> ・2月12日--石井米雄理事逝去 ・6月30日--田村武理事逝去 ・9月3日--西島安則評議員逝去 ・11月6日--創立四十五周年記念式典 |
| 2011 H23 | | | |
| 2012 H24 | 4月: 山本 Yamamoto | | <ul style="list-style-type: none"> ・3月31日--公益財団法人移行申請 |
| 2013 H25 | | | <ul style="list-style-type: none"> ・4月1日--公益財団法人認可 ・10月31日--第1次耐震審査実施(本館) |
| 2014 H26 | 6月: 北島 Kitajima Phillips | | |
| 2015 H27 | | | <ul style="list-style-type: none"> ・3月30日--寄付金税額控除認可 ・11月7日--創立五十周年記念式典 |
| 2016 H28 | 3月: 飯田 Iida Hidding | | <ul style="list-style-type: none"> ・5月31日--第2次耐震審査実施(本館) |
| 2017 H29 | | | <ul style="list-style-type: none"> ・3月--本館耐震・リフォーム案、西館立替案作成 ・9月27日--募金委員会発足 ・10月1日--募金趣意書作成、募金活動を開始 |

| | | | |
|-------------------|------------------------------|--|---|
| 2018 H30 | | | <ul style="list-style-type: none"> ・8月～12月 A-portにてクラウドファンディング |
| 2019 H31 R1 | 3月: 崔 Choi | | <ul style="list-style-type: none"> ・2月26日--新募金趣意書作成(第一期工事に絞った)し、募金活動を続ける ・6月8日--第1回同窓会(OM会)公開講演会、総会の開催 |
| 2020 R2 | 4月: 村上 Naresh Murakami | | <ul style="list-style-type: none"> ・4月からコロナウイルスのパンデミックが始まる ・4月～6月--耐震工事及び排水管交換工事、運動場を第2駐車場に変更 ・7月29日--初代ハウスマザー稲垣和子さん逝去 ・12月12日--第2回同窓会(OM会)公開講演会、総会開催 ・10～12月--ReadyForにてクラウドファンディング |
| 2021 R3 | 4月: ナレス Naresh | | <ul style="list-style-type: none"> ・1月--神田啓治顧問逝去 ・2月3日--シュペネマン・クラウス顧問逝去 ・7月17日--第3回同窓会(OM会)公開講演会、総会開催 ・11月～2022年1月--ReadyForにてクラウドファンディング |
| 2022 R4 | 4月: 山本 Yamamoto | | <ul style="list-style-type: none"> ・3月になるもコロナウイルスのパンデミックが続き留学生は入国できず。 ・6月25日--第4回同窓会(OM会)公開講演会、総会開催 ・11月1日--大畑浩志元監事逝去 ・11月--ガス給湯器改修工事(本館・西館) |
| 2023 R5 | | | <ul style="list-style-type: none"> ・3月--消火水槽改修工事予定 |

公益財団法人京都国際学生の家 利用者の集計

● 学生の部（レジデント）

国籍別利用者実数

1965年4月から2022年12月までの合計 83ヶ国 1080名

| | | | |
|----------|-----|----------|------|
| アフガニスタン | 6名 | コロンビア | 1名 |
| アメリカ | 48名 | コンゴ | 1名 |
| アルゼンチン | 3名 | コートジボアール | 1名 |
| イギリス | 13名 | ザイール | 1名 |
| イスラエル | 1名 | シンガポール | 19名 |
| イタリア | 5名 | ジンバブエ | 1名 |
| イラク | 3名 | スイス | 12名 |
| イラン | 13名 | スウェーデン | 3名 |
| インド | 22名 | スーダン | 1名 |
| インドネシア | 26名 | スペイン | 1名 |
| ウガンダ | 1名 | スリランカ | 11名 |
| ウズベキスタン | 2名 | セネガル | 1名 |
| エジプト | 7名 | タイ | 43名 |
| エストニア | 2名 | 台湾 | 27名 |
| エチオピア | 2名 | タンザニア | 4名 |
| オーストラリア | 2名 | チェコスロバキア | 4名 |
| オーストリア | 1名 | 中国 | 71名 |
| オランダ | 12名 | 朝鮮 | 4名 |
| カザフスタン | 1名 | チリ | 3名 |
| ガーナ | 1名 | ドイツ | 49名 |
| カナダ | 4名 | ドミニカ | 1名 |
| 韓国 | 52名 | トルコ | 12名 |
| カンボジア | 13名 | ナイジェリア | 3名 |
| キプロス | 1名 | 日本 | 353名 |
| キルギス | 1名 | ニュージーランド | 7名 |
| グルジア | 1名 | ネパール | 6名 |
| ケニア | 6名 | ノルウェー | 4名 |
| パキスタン | 6名 | ホンジュラス | 1名 |
| ハンガリー | 6名 | マリ | 1名 |
| バングラディシュ | 5名 | マレーシア | 23名 |
| フィリピン | 16名 | マダガスカル | 3名 |

| | | | |
|--------|-----|---------|-----|
| フィンランド | 1名 | 南アフリカ | 1名 |
| ブラジル | 9名 | ミャンマー | 16名 |
| フランス | 9名 | メキシコ | 2名 |
| ブータン | 1名 | モロッコ | 4名 |
| ベトナム | 36名 | モンゴル | 10名 |
| ベネズエラ | 2名 | ユーゴスラビア | 4名 |
| ペルー | 4名 | ラオス | 1名 |
| ポーランド | 5名 | リトアニア | 1名 |
| ボリビア | 1名 | ルーマニア | 1名 |
| ポルトガル | 3名 | レバノン | 1名 |
| 香港 | 14名 | | |

● 学者・研究者の部（スカラー）

国籍別利用者実数（同一人物の利用・同行家族を含まない）

1965年4月から2022年12月までの合計 96ヶ国 3101名（内国籍記載なし17名）

| | | | |
|---------|------|----------|------|
| アイルランド | 1名 | ウズベキスタン | 1名 |
| アフガニスタン | 1名 | ウルグアイ | 1名 |
| アメリカ | 336名 | エストニア | 1名 |
| アルジェリア | 4名 | エジプト | 26名 |
| アルゼンチン | 1名 | エチオピア | 1名 |
| アルメニア | 1名 | オーストラリア | 39名 |
| イギリス | 111名 | オーストリア | 19名 |
| イスラエル | 11名 | オランダ | 35名 |
| イタリア | 45名 | ガーナ | 3名 |
| イラク | 3名 | カザフスタン | 1名 |
| イラン | 20名 | カナダ | 47名 |
| インド | 107名 | カメルーン | 1名 |
| インドネシア | 115名 | 韓国 | 206名 |
| ウガンダ | 1名 | カンボジア | 4名 |
| ウクライナ | 9名 | 旧ソビエト連邦 | 14名 |
| キルギス | 1名 | ネパール | 11名 |
| ギリシャ | 4名 | ノルウェー | 7名 |
| ケニア | 3名 | パキスタン | 14名 |
| コスタリカ | 2名 | バーレーン | 1名 |
| コロンビア | 1名 | ハンガリー | 10名 |
| コンゴ | 1名 | バングラディシュ | 16名 |
| ザイール | 1名 | フィリピン | 38名 |

| | | | |
|----------|------|---------|------|
| サウジアラビア | 1名 | フィンランド | 10名 |
| ザンビア | 1名 | ブラジル | 27名 |
| シリア | 1名 | フランス | 111名 |
| シンガポール | 25名 | ブルガリア | 4名 |
| スイス | 186名 | ベトナム | 35名 |
| スウェーデン | 16名 | ペルー | 6名 |
| スーダン | 3名 | ベルギー | 7名 |
| スペイン | 11名 | ポーランド | 33名 |
| スリランカ | 11名 | ボリビア | 1名 |
| スロヴェニア | 1名 | ポルトガル | 8名 |
| セルビア | 1名 | 香港 | 45名 |
| タイ | 187名 | ホンジュラス | 1名 |
| 台湾 | 96名 | マダガスカル | 1名 |
| タンザニア | 8名 | マレーシア | 40名 |
| チェコスロバキア | 12名 | 南アフリカ | 2名 |
| 中国 | 174名 | ミャンマー | 10名 |
| チュニジア | 2名 | メキシコ | 7名 |
| 朝鮮（在日） | 3名 | モロッコ | 6名 |
| チリ | 7名 | モンゴル | 1名 |
| デンマーク | 5名 | ユーゴスラビア | 13名 |
| ドイツ | 302名 | ラオス | 2名 |
| ドミニカ | 2名 | ラトビア | 3名 |
| トルコ | 22名 | リトアニア | 1名 |
| ナイジェリア | 4名 | ルーマニア | 3名 |
| 日本 | 330名 | ルクセンブルグ | 3名 |
| ニュージーランド | 10名 | ロシア | 24名 |

公益財団法人京都国際学生の家後援会会則

(目的)

第1条 この規程は、公益財団法人京都国際学生の家（以下財団という。）の後援会員の入会及び退会並びに会費の納入に関し、必要な事項を定めるものとする。

(会員)

第2条 財団の事業に賛同し、財団を支援する意を有するものは、後援会員となることができる。

- 2 会員になろうとする者は、所定の申込書を、代表理事あてに提出するものとする。

(会費)

第3条 会員は理事会で定められた会費を、入会時に納入するものとする。

- 2 年会費は会員種別に応じて下記各号のとおりとする。

- | | | | | |
|-----|--------------|----|----|----------|
| (1) | 個人会員 (OM 会員) | 年額 | 一口 | 5,000 円 |
| (2) | 法人・団体会員 | 年額 | 一口 | 30,000 円 |

*OM= Old Member、元寮生

(退会)

第4条 会員は、いつでも退会届を財団に提出することにより、退会することができる。

- 2 前項の場合、当該年度の会費が未納のときは、これを納入しなければならない。
- 3 既納の会費は、いかなる理由があってもこれを返還しない。

(改正)

第5条 この規程の改正は、理事会の議決を経て行うものとする。

附則

- 1 この会則の施行に関し、必要な事項は別に定める。
- 2 この会則は、公益財団法人の設立登記の日（平成 25 年 4 月 1 日）から施行する。
- 3 この改正会則は、平成 26 年 3 月 10 日より施行する。（平成 26 年 3 月 8 日第 3 回理事会にて改訂）

公益財団法人京都国際学生の家同窓会会則

(名称) 第1条 本会は京都国際学生の家同窓会（略称 OM 会:Old Member 会）と称する。

(所在地) 第2条 本会の所在地は、京都市左京区聖護院東町10番地とする。

(目的) 第3条 本会は、京都国際学生の家創立趣旨を尊重し、その発展と維持を期し、併せて会員相互の親睦を図ることを目的とする。

(事業) 第4条 本会は、次の事業を行う。

- 1) 学寮の運営と発展とを支援する事業
- 2) その他、本会の目的に沿う事業

(会員) 第5条 本会の会員は、次の者とする。

- 1) 学寮の学生として在籍経験者、
- 2) 学寮のハウスペアレント経験者、
- 3) 学寮のスカラーとして滞在したことのある者で、学寮を支援する意志を有する者、
- 4) 学寮の役員、職員を務めた経験者で、学寮を支援する意志を有する者、
- 5) ハウスペアレントの家族であった者で、学寮を支援する意思を有する者。

(総会) 第6条 総会は会員で構成し、開催の30日前までに通知して会長がこれを招集する。

- 2 総会の成立は、日本国内在住構成員の20分の1の出席による。
- 3 前項の出席は、代理すべき構成員を明記した委任状の提出によって替えることもできる。
- 4 定期総会は、毎会計年度の終了後3カ月以内に開催するものとする。
- 5 臨時総会は、会長が開催を必要と認める時、これを招集する。
- 6 総会は次の事項を審議し、議決する。
 - 1) 会長、副会長、監事の選任にかかる事項。
 - 2) 会則の制定および改正にかかる事項。
 - 3) 予算および決算の承認にかかる事項。
 - 4) 活動計画および活動報告にかかる事項。
 - 5) 会員の退会ならびに除名の承認にかかる事項。
 - 6) 本会の解散にかかる事項。
 - 7) その他、会長が必要と認めた事項。

(総会の議決) 第7条 総会の議決は出席者の過半数の賛成による。

(役員) 第8条 本会に以下の役員を置く。役員に関するその他の事項は細則に定める。

- 1) 会長 1名
 - 2) 副会長 3名以内
 - 3) 幹事 若干名
 - 4) 庶務幹事 若干名
 - 5) 会計担当幹事 1名
 - 6) コーディネーター 20名以内
 - 7) 監事 2名
- 2 本条第1項3)ないし6)の幹事およびコーディネーターは会長がこれを任命する。

(役員の仕事) 第9条 役員の仕事は以下のとおりとする。

- 1) 会長は、この会を代表し会務を総理する。
- 2) 副会長は、会長を補佐し、会長に事故あるときはその仕事を代理する。
- 3) 幹事は、事業を円滑に推進するための必要な業務を分担し実施する。
- 4) 庶務幹事は、会員に関する名簿の管理その他本会の庶務に係る業務を担当する。
- 5) 会計担当幹事は、会計を執行管理する。
- 6) コーディネーターは、会員相互の連絡を密にする業務を担当する。
- 7) 監事は運営ならびに会計の監査を行う。

(役員会) 第10条 役員会は、会長が必要と認める時、これを招集する。

- 2 役員会の議決は出席者の過半数の賛成による。
- 3 前項の出席は代理すべき役員を明記した委任状の提出によって替えることもできる。
- 4 役員会は、電磁的通信手段によって開催することも可とする。

(会費) 第11条 本会の会員は細則に定める年会費を支払うものとする。会費は本会の維持運営にあて、臨時、特別の活動にかかる費用は別途参加費をもってこれにあてるものとする。

(会計年度) 第12条 本会の会計年度は毎年4月1日より翌年3月31日とする。

(退会・除名) 第13条 第5条に定める会員のうち3ないし5に該当する会員は、

その意思を表明することにより、役員会の承認を得て、退会することができる。

2 本会の名誉を傷つける等、本会の会員としてふさわしくないと認められる者は、役員会が発議し、総会の議決を経て、除名することができる。

(解散) 第14条 本会は、総会の議を経て解散する。解散時に本会が所有する財産は、学寮に寄付するものとする。

(会則改正) 第15条 本会則の改正は、役員会の発議により、総会でそれを承認する。

(細則)

第1条 本会の役員を以下に定める。

会長：村田翼夫

副会長：岩田忠久、ジン・タナンゴナン

庶務幹事：前川佳世子

会計担当幹事：木葉丈司

幹事：柳そらや

コーディネーター：内海博司、平松幸三、梶茂樹、坂口貴司、秋津元輝、
鵜塚健、前川佳世子、塩沢祥子、村松拓、ケヴヘイッシュウィリ・ルース
ダン、河瀬光

監事：平松幸三、嘉田良平

第2条 会長・副会長・監事の任期は4年間を上限として定める。

幹事の任期は会長が定める。

第3条 年会費は¥0とする。

(付則)

本会則は、2019年10月18日より施行する。

施設概要

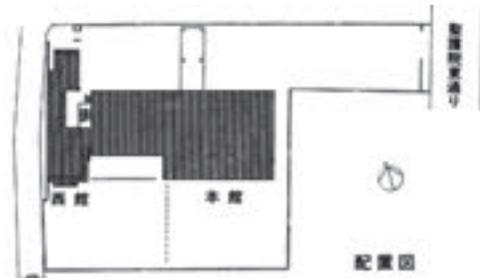
所在地 京都府京都市左京区聖護院東町 10
 敷地面積 1,900.28 m²
 建築面積 531.21 m²
 延面積 1,778.78 m²

構造 本館 鉄筋コンクリート造 地下1階 地上4階
 西館 鉄筋コンクリート造 地上2階

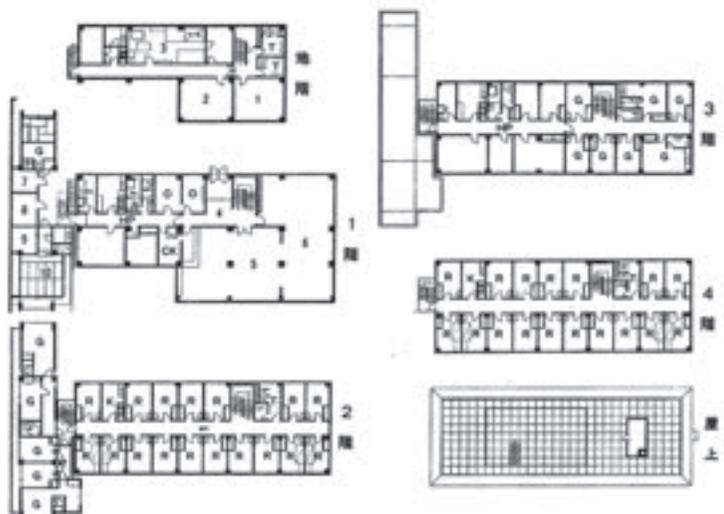
各階用途 本館1階 事務室、会議室、ラウンジ、遊戯室、行商用キッチン
 本館2・4階 レジデント室 34室、キッチン2室、シャワールーム4室
 本館3階 ハウスペアレントツ室、スカラー室 6室
 本館地下 洗濯室、トイレ、倉庫、機械室
 西館 スカラー室 5室、ボーイスカウト会議室

学生居室 面積 13 m²
 洗面設備、ベッド、
 クローゼット、本棚、
 机、椅子、エアコン

その他設備
 日本庭園、卓球台、
 ビリヤード、ピアノ



R:レジデント室
 G:スカラー室



【編集後記】

編集に携わって

笹山幸子

(編集委員、大阪府立高校退職校長会 会員)

私は、2022年12月から編集委員に加わりました。大阪大学を卒業後、大阪府立高校の国語科の教員として25年間勤務し、その後、大阪府教育委員会(主任・首席)指導主事、主任社会教育主事、教頭、そして、3つの高校で校長を務めました。定年退職後、京都大学大学院で教育行政学の修士号を得、その後、私立大学の教職課程で講師を務めています。実務家教員として、教員としての教育指導経験と校長としての学校経営に関する経験、及び研究をもとに、次世代の教職者を育成しています。生徒を教え育てるという教職の使命、責任、厳しさとともに生徒の成長に関われる喜び、やりがいを伝えています。

「京都国際学生の家」については、いきなり『Yearbook』の編集に携わることになりました。教員時代に大阪新聞に作文指導法を連載した経験もあることから、お役に立てるかもしれないと思って引き受けました。

2022年度版『Yearbook』完成に至るまで5回の編集会議がありました。当初は、OM、HP、CMなどの略語から全く別のことを連想することもありました。しかし、感謝祭やクリスマスパーティーに参加し、寮生達と会話することによって、HdBの具体的なイメージがもてました。そして、編集委員の方々が、原稿依頼、様式の修正から、広告の依頼に至るまで、精力的に取り組んでおられる様子を間近に見て、その熱意が伝わりました。

『Yearbook』発行の目的は、「記録と外部への広報」と伺いました。初めて編集会議に参加する者として、部外者の目で、外部の方々にわかりやすく読んで頂けるようにという観点から意見を述べました。

OMの方々の多岐にわたる研究分野、関心事等の報告から、刺激を受けました。HdBに寄せる思いを知り、編集に関わられて、良い経験だと思いました。また、寮生達が、山本HPに見守られながら、日常生活は勿論、各種イベントを思う存分楽しみ、それぞれの夢や目標に向かって「共生」している姿を頼もしく思いました。私は、社会人大学院生の時に、初めてニューヨークに行きました。「若い時にこの雰囲気を経験しなかった」と思いました。寮生達が、HdBで、講演会や『Yearbook』やイベントを通して、先輩方と触れ合い、仲間と切磋琢磨しながら、世界とつながることができているのは、とても恵まれていると思います。

ロシアによるウクライナ侵攻は、1年を超えました。トルコ、シリアでは大地震が起きました。悲しく辛い出来事が続いています。そんな中、私たちにできることは何か？私が学校運営協議会の委員を務めている大阪府立高校の生徒達は、ウクライナ支援の

募金活動を始めています。自分にできることを探して、「バタフライ効果」を信じて、身近な人への感謝と明るい笑顔、慈しみの心で生きたいと思います。

HdB というコミュニティ

祝迫美羽

京都大学経済学部・現住人・年報編集委員

イヤーズブックの意味とは何だろう。HdB に住み始めて1年が経った11月初頭にハウスマザーに声をかけて頂き、編集委員になった。2021年度のイヤーズブックはHdBに入ってから間もない頃にわけもわからず提出したが、編集委員になり、改めてイヤーズブックの意義について考えるようになった。イヤーズブックを作るためにはお金がかかるし、原稿を集めるのも一苦勞であり、正直イヤーズブックを作るのは大変だと思う。しかし、実際に編集委員になり、作成過程に参加する中で、HdBの1年を振り返るというイヤーズブックの意味をととても感じた。編集委員として、微力ながらもイヤーズブックの作成に関わられたことを大変嬉しく思う。

現レジデントの編集委員としての一番の仕事はレジデントの原稿を集めることである。原稿を集めるのはなかなか大変だったが、皆忙しい中、自身の思い出が詰まった原稿を提出してくれた。普段コモンミールやイベントの時はHdBへの想いをあまり話すことがないが、一人一人の原稿を読んでいると、皆HdBが大好きなんだということがとても伝わってきた。そして皆が各々HdBで素敵な時間を過ごしていることを実感し、嬉しかった。私自身も、皆の原稿を読む中で、自分がHdBという場所を見つけ、そこにレジデントとして住むことができているありがたさを改めて感じた。また皆の夢や研究、想いに触れ、HdBは本当に色々なバックグラウンドを持つ学生が一堂に会している場なんだと改めて実感した。

またイヤーズブックの編集委員会に出席し、イヤーズブックに載せる様々な原稿を読み、HdBが本当に多くの方の支援のもとで成り立っているのだということも感じた。支援金や支援物資をはじめ、私たちレジデントの生活は想像以上に多くの人々の支えで成り立っている。ここでもう一度HdBを支えて下さっている方々に感謝申し上げる。また、OM便りを読む中で、HdBが受け継がれてきている場所であるということ強く感じた。私も歴史あるHdBというコミュニティの一員になれたことを誇りに思う。

2023年度の春は現レジデントの半分以上がHdBから旅立ち、人生の次のステップを歩む。卒業して就職する人、留学に行く人と様々だが、それぞれが自分の夢に向かって進んでいく。そして春からは新たに多くの新しいレジデントがHdBに入ってきて、春以降もHdBに住む現レジデントと共に、また新しいHdBという空間を作っていくのだろう。そうやってHdBは受け継がれていく。世界中の学生が共に集い、文化や価値観を超えて青春時代を共に過ごせる、HdBというかけがえのない場所がこれからもずっと受け継がれていくことを切に願う。

賛助広告のご協力に、感謝致します。

(公財)京都国際学生の家(別称 HdB、Haus der Begegnung: 出会いの家)の年刊誌「YEAR BOOK」は、各国大使館領事館は勿論のこと、関係省庁にも配布し、世界の各地で活躍する卒業生にも送付しています。しかし、コロナ禍のため留学生や外国人研究者が入国できず、入寮者が少なく(学生は20人前後、研究者は数人だけ)本当に苦しい経営が続いています。

しかも、コロナ渦とウクライナ戦争で、諸経費も高騰しています。しかし、法人の年刊誌「YEAR BOOK」を絶やすことは出来ず、HdBの卒業生で自営業の方々や京都の会社に、協賛広告を掲載して頂く形でのご支援をお願いしました。

本当に、有難うございました。



不動産売買・管理

お客様のご期待にそえるよう全力で応援致します。



中西電建株式会社

(社)京都府宅地建物取引業協会会員
京都府知事(4)第10024号

本社

〒601-8453
京都市南区唐橋羅城門前6

中京事務所

〒604-8172 京都市中京区烏丸三条上ル
場之町592番地 メディナ烏丸御池4階

お問い合わせは

(075) 950-7080

おかげさまで創業106周年 名古屋の老舗特殊鋼商社です

特殊鋼から非鉄金属までトータルで提供



株式会社 三悦

本社 〒455-0831 愛知県名古屋市港区十一屋一丁目12-3
TEL 052-381-6511(代) FAX 052-381-1372



SDGsでHdBを世界融和の拠点に！



地球温暖化で海面上昇、国土減少の

DO YOU KYOTO? 環境に良いことしてますか? ソロモン諸島にて脱プラを討議

太陽光と蓄電装置でSDGsに貢献！



蓄電装置でヒーリング効果を！



エネルギーEXPO ルーナア・ブカストに出席

当社で活躍中の留学生たち (正社員の他、アルバイトもOK)



自家発電装置

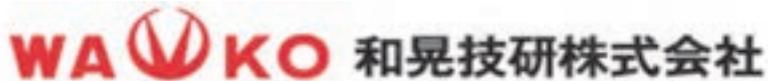
ミャンマー (設計開発)

ソロモン諸島 (資材)

中国 (購買)



京大桂研究所 (分散電源と電力融通S)



代表取締役社長 岩崎 隆二 (京大機械工学科卒) 専務取締役 岩崎 マリ (同志社大心理学科卒)

【本社】〒601-8448 京都府京都市南区西九条豊田町26
TEL:075-681-6291 FAX:075-681-6297



Realize Your Dreams with Canvas Gate

Canvas Gate develops professional human resources and connects people with global companies and educational institutions.

Canvas Gate's name was derived with the idea and feeling of "Painting Your Dreams on a Brand-New Canvas".

Find Your Dream Job!

Employment assistance at Canvas Gate covers a wide range of services for job placement including dispatch work and specified skilled worker opportunities. Canvas Gate provides global education with the collaboration of educational institutions in the U.S., Japan, and other Asian countries to foster human resources (human assets) who acquire the skills necessary to work overseas while they are still attending school.



Canvas Gate supports foreigners seeking to work in Japan by providing the Japanese language, Japanese business culture, and pre-work education.



Canvas Gate Co., Ltd.

482 Kitafudondo-cho, YM Bldg., 4F, Shimogyo-ku, Kyoto city
600-8233, JAPAN

TEL: +81-75-343-7751 / FAX: +81-75-343-7753

Email: info@canvasgate.com Web: www.canvasgate.com

—当財団へご寄付をお願いいたします—

個人 1口5,000円 法人・団体 1口30,000円 何口でも

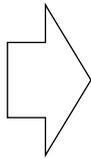
【当財団へのご寄付に関する税制上の優遇措置（確定申告）】

個人の場合：2,000円を超える寄付金額は所得控除または税額控除制度により所得税の減免措置を受けることができます。

法人・団体の場合：特定寄附金として一般寄附金の損金算入限度額と別枠で損金算入限度額に相当する金額まで損金に算入できます。

これらのご申告の際には当財団発行の領収書をご提出下さい。

点線より切り離してご使用ください



| | | | | | |
|---|------|--------------|---|--------------------|---|
| 02 大阪 | | 払込取扱票 | | 通常払込料金加入者負担 | |
| 口座記号番号 | 金額 | 千 | 百 | 十 | 円 |
| 010708 | 3807 | | | | |
| 加入者名 | 料金 | 特殊取扱 | | | |
| (公財) 京都「国際学生の家」 | | | | | |
| 賛助寄附をいたします。 <input type="checkbox"/> 個人・OM（入寮_____年） □（_____円） <input type="checkbox"/> 法人・団体 □（_____円） | | | | | |
| おとところ（郵便番号） | | 日 | | 附 印 | |
| おなまえ | | 様 | | | |
| おなまえ | | 様 | | | |
| （電話番号） | | | | | |
| ご依頼人 | | 日 | | 附 印 | |
| ご依頼人 | | 様 | | | |
| （電話番号） | | | | | |

各票の※印欄は、ご依頼人において記載してください。

振替払込請求書兼受領証

| | | | | | | | |
|--------|-----------------|------|---|---|---|---|-------------|
| 口座記号番号 | 加入者名 | 金額 | 千 | 百 | 十 | 円 | 通常払込料金加入者負担 |
| 010708 | (公財) 京都「国際学生の家」 | 3807 | | | | | 8 |
| おなまえ | | | | | | | 様 |
| ご依頼人 | | | | | | | 日 |
| 料金 | | | | | | | 附 |
| 備考 | | | | | | | 印 |

記載事項を訂正した場合は、その箇所に訂正印を押ししてください。

切り取らないでお出しく下さい。

裏面の注意事項をお読みください。(ゆうちょ銀行) (承認番号大第42986号)

これより下部には何も記入しないでください。

この受領書は、大切に保管してください。

公益財団法人京都国際学生の家 後援会細則

(会員の依頼)

第1条 本会は、次のいずれかに該当する者をもって組織する。

- (1) 賛助寄付金 1口以上の拠出を約諾した法人(法人会員)。
- (2) 賛助寄付金 1口以上の拠出を約諾した個人(個人会員)。

2 会員が拠出すべき賛助寄付金(税務上の寄附金控除あり)の額は、付則により定める。

(ご注意)
・この用紙は、機械で処理しますので、金額を記入する際は、枠内にはつきりとご記入ください。また、本票を汚したり、折り曲げたりしないでください。
・この用紙は、ゆうちょ銀行又は郵便局の払込機能付ATMでもご利用いただけます。
・この払込書を、ゆうちょ銀行又は郵便局の渉外員にお預けになるときは、引換えに預り証を必ずお受け取りください。
・ご依頼人様からご提出いただきました払込書に記載されたおとこ名、おなまえ等は、加入者様に通知されます。
・この受領証は、払込みの証拠となるものですから大切に保管してください。



この場所には、何も記載しないでください。

Year Book, Vol.47. 2022

イヤーブック 第47号

編集者 内海博司 村田翼夫 平野克己
山本慶一 前川佳世 木葉丈司
笹山幸子 祝迫美羽

発行日 2023年3月31日

発行者 公益財団法人京都国際学生の家
Kyoto International Student House
(Haus der Begegnung, Kyoto)

〒606-8325 京都市左京区聖護院東町10
10, Shogoin-higashimachi, Sakyo-ku, Kyoto-Shi,
Kyoto 606-8325, JAPAN Tel : 075-771-3648

印刷所 (株) 北斗プリント社 (075-791-6125)

本イヤーブックの印刷・製本の一部は、
広告掲載料でまかされた。



<http://hdbkyoto.jp/>



“It’s the one thing you can control. You are responsible for how people remember you—or don’t. So don’t take it lightly.”-Kobe Bryant